

国語科教育の理論と実践

広島文教女子大学

目次

一	国語科教育の必要性と意義	1	○国語科学習指導案の書き方	57
二	国語科教育の目標と内容	3	○国語科学習指導案の書き方「じどう車くらべ」	61
三	国語科の教育課程	5	○国語科授業づくりのための十箇条	64
四	子どもの発言を生かした板書のしかた	14	○教材文「じどう車くらべ」	65
五	場面の読み取りを大切にする物語の授業	22	○教材文「よかったなあ」	73
六	理科や社会科にならないための説明文の授業	28	○教材研究シート(詩・短歌・俳句)	74
七	書けない子でも書けるようにする作文の授業	31	○「よかったなあ」参考資料	75
八	声に出して味わう古典の授業	35	○国語科学習指導案例「ふしぎ」「よかったなあ」	77
九	討論や発表を楽しむ授業	37	○評価規準・評価方法の参考資料	81
一〇	漢字指導は国語科指導の「いろは」の「い」	41	○新学習指導要領(国語科)	91
一一	字の形と書く速さを意識する書写の授業	42		
一二	個人差への対応と机間巡視	51		
一三	先生の言葉遣い	52		
一四	学んだ実感を味わわせるポートフォリオ評価	54		
一五	まとめ	56		

□ 国語科教育の必要性と意義

キーワード … 言葉の力、学習指導要領(解説)、基礎・基本

予習のポイント

シラバスを読み、疑問点などをまとめておく。

言葉の正しさとふさわしきについて、考えをまとめておく。↓「ありの行列」(三年)を例に

ありの行列

大滝哲也

夏になると、庭のすみなどで、ありの行列をよく見かけます。その行列は、ありの巣から、えさのある所まで、ずつづつ歩いていきます。ありは、ものがよく見えません。それなのに、なぜ、ありの行列ができるのでしょうか。

アメリカに、ウイルソンという学者がいます。この人は、つぎのようなじっけんをして、ありの様子をかんさつしました。

はじめに、ありの巣から少しはなれた所に、ひとつまみのさとうをおきました。しばらくすると、一びきのありが、そのさとうを見つめました。これは、えさをさがすために、外に出ていたはたらきあります。ありは、やがて、巣に帰っていききました。すると、巣の中から、たぐさんのはたらきがあり、つぎつぎと出てきました。そして、列を作つて、さとうの所まで行きました。ふしぎなことに、その行列は、はじめのありが巣に帰るときに通つた道すじから、外れていないのです。

つぎに、この道すじに大きな石をおいて、ありの行く手をさえぎつてみました。すると、ありの行列は、石の所でみだれて、ちりちりになつてしまいました。ようやく、一びきのありが、石のおこうがわに道のつづきを見つけた。そして、さとうにおかして進んでいきました。そのうちに、ほかのありたちも、一びき二びきと道を見つけて歩きだしました。まただんだんに、ありの行列ができていきました。目的地に着くと、ありは、さとうのつづきを持って、巣に帰っていききました。帰ると

きも、行列の道すじはかわりません。ありの行列は、さとうのかたまりがなくなるまでつづきました。

これらのかんさつから、ウイルソンは、はたらきがありが、地面に何か道しるべになるものをつけておいたのではないかと考えました。

そこで、ウイルソンは、はたらきありの体の仕組みを、細かに研究してみました。すると、ありは、おしりの所から、とくべつ、えきを出すことが分かりました。それは、においのある、じょうはつしやすいえきです。

この研究から、ウイルソンは、ありの行列のできるわけを知ることができました。

はたらきありは、えきを見つけると、道しるべとして、地面にこのえきをつけながら帰るのです。ほかのはたらきありたちは、そのにおいのかいで、においにそって歩いていきます。そして、そのはたらきありたちも、えさを持って帰るときに、同じように、えきを地面につけながら歩くのです。そのため、えきが多いほど、においが強くなります。

このように、においをたどつて、えきの所へ行ったり、巣に帰ったりするので、ありの行列ができるというわけです。

このえきのおいは、ありのしゅるいによつてちがうことも分かりました。それで、ちがったしゅるいのありの道しるべが交わつても、けつしてまようことなく、行列がつづいていくのです。

一 言葉・文学を学ぶことの意義

(一) 言葉と人間

人間の一大特徴は、言語を持つ存在であるということである。一口に言つてしまえば、言語によつて人間形成が図られていくことである。人間社会(共同体)↓家庭・学校・地域など)から隔離されたり孤立したりしている場合には、言葉の習得は十分にできない。

言葉というものが、この世に生まれ、現在も使われ続けている。地球上に人間がたつたひとりしかいなかったら、言葉は必要不可欠なものとはならないだろう。人間

社会が営まれているからこそ、言葉が自然に発生したのである。

(注)：基礎・基本

国語科における基礎・基本は何かという議論が度々これまでになされてきた。ここで、その関係を見ておこう。国語科という教科の中でも、例えば「漢字」は基礎と呼べるものうちの一つである。漢字は、覚えなければならぬ・覚えておくと便利な、言葉の重要な知識である。

一方、国語科の基本は、言葉、この場合は漢字を（実際の場で使う力）であると言ってよい。漢字を覚えることが基礎だとして、国語科の基本は、（様々な漢字を使い、書く、あるいは読める）ようにしていくことである。ここでの基礎は、国語科の内で専門的に扱われ、揺るぎないものとされる。その意味で、教科内で完結する。それに対して、国語科の基本であるという場合は、上記の力が動的に展開されていくことを指す。国語科の外でも生かされていくのである。その他の教科の学習を進めるために、きわめて必要な技能となっていく。

(二)ことばの機能

①伝達（コミュニケーション）としての機能

指示・要求（欲求）・依頼、さらには意思・知識・思想等をお互いに伝え合って、人間社会は営まれる。

②認識・思考としての機能

言葉を学ぶということは、それぞれの言語（日本語・英語・仏語・独語等）による認識様式を学び、またその認識様式を土台として、自分自身の「物の見方・考え方」を豊かにしていくことである。

認識・思考は、言葉によって心に刻まれ、次の行動に生かされる。例えば、生き物を飼い、観察し、記録を文章で書くこと。そこで、経験したことが、対象の見方という形で心に蓄えられる。また、その対象を、

すでに持っているその他の対象と結びつけ、考え方を深めていける。それが、認識を深めることである。生き物を飼うことで、その生き物に対する興味はもちろん、その日の天気や気温についても記すようになる。徐々に目の向け方が広くなっていく。可愛い、大切にしたいという気持ちについても表そうとするようになる。考えたことなどもどんどん書くようになり、認識は深まっていく。

③感情の喚起と整序（きちんと順序立てること）としての機能

人間は、直接体験しなくても、聞いたり読んだりするだけで、涙を流したり、共感・共鳴したりする。人間は、欲求や感情を巧みに言葉で言い表すことによって、感情に秩序を与え、秩序だった行動を共有しているのである。

④言語文化の創造と享受としての機能

人間は、それぞれの言語共同体社会において、価値あるものとして、ときには規範的なものとして、言語による文化を共有している。言語行動様式もその一つであるが、言語文化の典型は、言語によって表現された言語作品である。

(三)文学を学ぶこと

一口に文学といっても、詩・俳句・短歌・小説等多数であるが、人間が文学を求める原点は、感動の共有にあると言ってよい。文学を読み、鑑賞するということは、読み手の生きる姿を多様にし、豊かにしていくことである。

(注) 文学：感情・思想を言語・文字で表現した芸術作品。詩歌・小説・戯曲・随筆・評論など。文芸。広くは、学問、学芸、詩文に関する学術を言う。

二 国語教育と国語科教育

(一) 国語教育

我が国の場合、「国語教育」という言葉は、一般に、日本人に対する日本語の教育を指して言う。つまり、日本人にとつての母語の教育のことである。

(二) 国語科教育：教科としての「国語」の教育

「国語教育」という語は、「国語」という教科を前提とするものであるが、それは国語科にとどまらず、慣用として、他教科や学校生活全体、さらには社会教育・生涯教育における、日本人にとつての母語＝日本語の教育を意味してきた。

「国語科教育」は、「学校教育法施行規則」「同別表」によつて規定された「国語」という教科における「国語教育」をさす学校教育用語である。

「国語」の力とは、「話す・聞く力」「書く力」「読む力」「言葉に関する知識」などを指す。これを身につけるには、学校での学習と日常生活での活用とのバランスのとれた状態が理想である。そして、その「国語」の力をよりよいものにしていくには、自分の言葉の使い方を見直すことが必要となる。そこで、意図的・計画的に言葉の自覚を促すことを目的とした「国語」の学習と、それを教えるための教育環境が大切となる。

国語科という教科の時間と、その他の教科の時間の関係にも目を向けてみよう。例えば、算数科、理科、社会科の場合は、教科書に載っている知識や方法を習得することになる。国語科の場合は、そのような内容の理解が最終目的ではない。そのような内容の理解の過程の中で、言葉の学習・言葉の使い方を学ぶことが大切な目的なのである。そこでは、言語感覚を養つたり、掘んだことを表現したりする力、伝え合う力を身につけること等がめざされていく。

復習のポイント

本講のポイントをまとめておく。↓ノート整理

二 国語科教育の目標と内容

キーワード： 目標、内容、国語科改訂の要点、四十五分間の構成、指導計画、学習指導案

予習のポイント

四十五分間という時間感覚について、考えをまとめておく。↓「おむすびころりん」（一年）を例に

一時間の授業を、はじめ・なか・おわりという構成で組み立てる場合、どのような内容を持つてくるとよいか。自分の経験や図書館資料の調査などをもとに、まとめておく。

おむすびころりん

むかしむかしのはなしだよ。
やまのはたけをたがやして、
おなかがすいたおじいさん。
そろそろおむすびたべようか。
つみをひろげたそのとたん、
おむすびひとつころがって、
ころころころりんかけた。
まてまてまてとおじいさん、
おいかけていたらおむすびは、
はたけのすみのあなのなか、
すつとんとんとびこんだ。

のぞいてみたがまっくらで、
みみをあてたらきこえたよ。
おむすびころりんすつとんとん
ころころころりんすつとんとん

これはこれはおもしろい。
ふたつめころんところがすと、
きこえるきこえるおなじうた。
おむすびころりんすつとんとん
ころころころりんすつとんとん
おなかがすいてることなんか、
わすれてしまったおじいさん。
うたにあわせておどりだす。
おむすびころりんすつとんとん
ころころころりんすつとんとん

とうとうあしをすべらせて、
じぶんもあなへすつとんとん、
ねずみのおうちにとびこんだ。
おじいさんころりんすつとんとん
おむすびたくさんありがとう。
おいしいごちそうさあどうぞ。
ねずみのおどりをみてください。
おれいにこつちをあげましょう。
おれいのこつちをてにもって、
おうちにかえっておばあさんと
おどったおどったすつとんとん。
こつちをふりふりすつとんとん

するとうとうしたことだろう。
こつちをふるたび、あれあれあれ、
しろいおこめがさあらざら。

きんのこばんがぎゅぐゅぐゅ。
それからふたりはいつまでも、
なかよくたのしくくらししたよ。
おむすびころりんすつとんとん
ころころころりんすつとんとん

一 国語科教育の目標

小学校の国語科教育の目標は、以下のとおりである。
「国語を適切に表現し正確に理解する能力を育成し、伝え合
う力を高めるとともに、思考力や想像力及び言語感覚を養
い、国語に対する関心を深め国語を尊重する態度を育て
る。」（「小学校学習指導要領 第2章第1節 国語」より）
目標達成のためには、言語活動を通して学ぶことが肝要で
ある。また、話すこと・聞くこと、書くこと、読むこと、各
領域の関連を図ること、さらには、国語科の道具教科として
の側面を考慮するならば、他の教科・領域との関連、とりわ
け総合的な学習の時間との関連を図ることも、国語科の目標
達成のためには、欠くことのできないものである。

二 国語科教育の内容

国語科の位置づけを見てみよう。国語科教育に関わる法制
的基準として、「日本国憲法」「教育基本法」及び「学校教
育法施行規則」（第2章 小学校・第2節 教科・第24条「小
学校の教育課程の編成」など）は当然として、「小学校学習
指導要領」（第1章 総則、第2章第1節 国語）を挙げるこ
とができる。

領域の設定については、現行の「小学校学習指導要領」の
場合、「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」「伝
統的な言語文化と国語の特質に関する事項」という3領域・
1事項である。

さらに、国語科の授業と教材について考えてみる。国語科の授業を行う場合、少なくとも①学習者、②教師(国語科教師)、③目標及び教育課程、④国語科教材、⑤指導過程の五項目の構成要素を挙げる必要がある。

④の国語科教材は、国語に対する関心を高め、国語を尊重する態度を育てるのに役立つことや、伝え合う力、思考力や想像力及び言語感覚を養うのに役立つことをはじめとして、「学習指導要領 国語編」の「第3 指導計画の作成と各学年にわたる内容の取扱い」に示された観点を大切にし、選定されなければならぬものである。今日、③目標及び教育課程、⑤指導過程の設計に当たっては、PISA型読解力の育成も視野に入れなければならない状況となってきた。

〔補足〕PISA型読解力

PISA型読解力とは、自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、効果的に社会に参加するために、書かれたテキスト(教材本文)を理解し、利用し、熟考する能力を指す。

その特徴は、以下の四点である。

- ①テキストに書かれた「情報の取り出し」だけではなく、「理解・評価」(解釈・熟考)も含んでいること。
- ②テキストを単に「読む」だけではなく、テキストを利用したり、テキストに基づいて自分の意見を論じたりするなどの「活用」も含んでいること。
- ③テキストの「内容」だけではなく、構造・形式や表現法も、評価すべき対象となること。

④テキストには、文学的文章や説明的文章などの「連続型テキスト」だけでなく、図、グラフ、表などの「非連続型テキスト」を含んでいること。

なお、PISA型読解力を伸張するために各学校で求められる改善の具体的な方向として、三つの重点目標が挙げられている。これらは、文部科学省からの要請である。「ア テ

キストを理解・評価しながら読む力を高める取組の充実」、「イ テキストに基づいて自分の考えを書く力を高める取組の充実」、「ウ 様々な文章や資料を読む機会や、自分の意見を述べたり書いたりする機会の充実」である。

復習のポイント

本講のポイントをまとめておく。↓ノート整理

三 国語科の教育課程

キーワード : たしかめ発問、つつこみ発問、指示、音読・範読、評価規準

予習のポイント

発問はヒントの出し方が大切ということについて、考えをまとめておく。↓「サクラソウとトラマルハナバチ」(五年)を例に

次の授業の流れをたどってみよう。そして、それぞれの教師の言葉は①主発問、②補助発問、③指示、④助言、⑤評価のどれにあたるか考え、あく力を入れてみよう。(解答は第三回の最後に示してあるので、後から答え合わせをしておこう。また、発問について文献等で調べ、まとめておくようにしよう。)

T1 今日のみんなで、この「サクラソウとトラマルハナバチ」の文章構成をつかみましょう。

↓本時の学習のねらいとすることに直結した問いかけであり、(ア)といえる。

T2 段落ごとに主に何について書かれているのかを整理すると、構成がわかりそうですね。

↓主発問を解決するために学習段階を細かくして、活動しやすくした問いかけであり、(イ)にあたる。
T3 それぞれの段落に番号をつけておくと便利ですから、段落に番号をつけましょう。

↓主発問解決のための具体的方法で、補助発問を達成するために(ウ)している。

T4 このワークシートで作業をしましょう。
↓ワークシート配付の後、(エ)している。

C1 先生、2段落は、サクラソウとトラマルハナバチの両方が書かれています。どっちについての段落ですか？

T5 この段落は、サクラソウとトラマルハナバチのどちらのことについて、よりくわしく書かれていますか？
↓一人一人の学習の状況や子どもの問いかけに応じて教師が声かけをしているもので、(オ)と言われる。多くは個別にされるが、時に全体指導の場でも行われる。

C2 僕は、2段落が、サクラソウのことが書かれている段落だっってわかったよ。

T6 サクラソウのどんなことについて述べられていますか。
↓※T5(オ)に同じ。

C3 受粉をするのはサクラソウだから、3段落は、サクラソウについて書かれていますと考えていいのかな。

T7 ここに「受粉の仲立ち」という言葉がありますね。これはサクラソウのことですか。それとも、トラマルハナバチのこと？
↓※T5(オ)に同じ。

T8 みなさんがそれぞれの段落の内容をとでも上手にまとめたので、文章全体の構成をしつかりと把握する準備が完了しました。次の時間は、この文章構成の特徴を考えてみましょう。

↓本時の学習の(カ)となる言葉で、個々の学習を認め、価値づけをする大切な言葉かけである。また、次時の意欲にもつながる。

一 発問とは

授業中に教師が、児童の思考をゆさぶるために問いかけることを「発問」と呼ぶ。発問のうまい教師は、子どもの考えを巧みに引き出す。多くの子どもから多様な答えを引き出し、それらの考えをつなげたり、討論させたり、新たな考えに導いたりする。発問が面白ければ、子どもの意欲も向上し、授業も盛り上がる。

二 授業の最初の方で

授業の最初には、今から学習する場面(ページ)や学習のめあてを確認するのが普通。

例えば、「昨日は○ページの○行目からの場面を勉強しましたね」とか、「前の時間は主人公の考えを知るために会話文に注目して読みましたね」とか。悪くはないが、そのような繰り返しだけではマンネリ化し、子どもの意欲が高まらない。もっと工夫が必要。

ちよつと上を行く発問とするために、「では、前の時間に学習したのはどの場面でしたか？」と問いかけたらどうだろう。「えーつと、この場面だったと思うなあ」とか「確か、主人公が○○する場面でした」のように子どもの思考が刺激され、必然的に会話が生まれる。

また、「前の時間に主人公の会話に注目したのは、何のためかな？」と問うことよって、「主人公の心情の変化を読み取るためです」のような答を引き出し、学習のめあてを確認することもできる。これらの発問を「たしかめ発問」と呼ぶ。

先ほどの予習であった「主発問」「補助発問」といった分け方もあるが、このような「たしかめ発問」そして後に出てくる「つつこみ発問」といった分け方もある。

三 授業の「ここぞ」という場面で

授業中の山場や、ここぞという場面で子どもたちにじっくりと考えさせたいとき、つまり授業に深まりを持たせたいときに使う発問を「つつこみ発問」と呼ぶ。実例に即して考えてみよう。杉みき子作「わらぐつの中の神様」（光村図書五年）のあるシーンである。（資料①参照）

少しくらい格好が悪くても、はく人がはきやすいように、あったかいように、少しでも長持ちするようにと、心をこめて、しっかりとしっかり、わらを編んでいきました。

【発問1】「おみつさんが、わらぐつを編むとき、どんなことに気を付けたでしょう？」

この発問1をした場合、何とか答えられなくてもないが、本文中に「気を付けた」という語句がないために、困る子どもたちが出てくる。せいぜい、「心をこめて編みました」、「しっかりとわらを編みました」という答えが返る程度であろう。

【発問2】「おみつさんは、どんなわらぐつに仕上げたいと思いますか？」

この発問2をした場合、本文中の語句を使って「はく人がはきやすいわらぐつです」「はく人が温かいわらぐつです」「少しでも長持ちするわらぐつです」と答えることができる。

【発問2】のように、本文中の言葉を使って答えることのできる問いを考えることが教師の技術であろう。叙述に即して心情を読み取らせる、ということである。

つつこみ発問によって子どもの読みを引き出すことに成功したら、次の段階では考えをまとめるための発問をする。

【発問3】「おみつさんがわらぐつに込めた思いとはどんなものでしょう。一文にまとめなさい」

このように発問し、先ほど得た考えを一文にまとめる活動に入らせる。「はきやすく、温かくて、じょうぶなわらぐつをつくりたいという思い」「買ってくれる人のために心をこめてつくりたい」などの一文が出てくる。主人公であるおみつさんのわらぐつづくりに対する思いや、優しい人柄がだんだんと具体的に浮かび上がってくる。

四 国語科の教育課程とは

上記の教科の一部分である国語科に関する教育課程が、ここで言う国語科の教育課程である。

意味するものは、「国語科の教育目標を効果的に実現するために、事前に計画される計画」ということである。各学校が、不断に改善していくことが求められる。

五 教育課程に影響力を持つもの

それは、やはり「学習指導要領」をにおいて他にはない、と言ってもよいだろう。

現行版は、平成二〇年三月に告示された。時代が求める学力は、これまでの「覚える」という学力から、「考える」という学力に大きく変わろうとしている。

それは、PISA型「読解力」に象徴されるように、知識の習得と再生という学力から、「受信↓思考↓発信」というプロセスの中に存在する学力への転換である。このことは、これまでの学力が、受容を中心に育成されてきたことからの転換に他ならない。

国語科においては、これまで、例えば読むことの指導では、素材中心にいわゆる読解を徹底的に行ってきた。これからは、「学習指導要領」に示された「内容」（指導事項）を、学力としていかに育成していくのか、ということが問われるよう

になる。「付きたい力」とか「育成すべき学力」が強調されるようになったことから、その状況を認めることができる。

上記の学力育成は、「付きたい力↓評価規準↓評価方法↓学習活動↓教材」という、これまでの素材中心や児童の学習活動中心の授業を見直し、授業を通して学力を育成する教育課程の充実を図ることによって実現するだろう。

これまで、多くの国語科の授業は、1時間を単位として行われ、授業研究においてもその対象は、1時間とすることが多く行われてきた。しかし、1時間を単位としたものでは、育成すべき学力の一部しか見ることができない。教材や単元全体を通して育成すべき学力を明確に位置付けていく姿勢が求められる。

そこで、これからの学校教育においては、教育課程の編成を、学校ごとに、児童の実態に合ったものにしていくことが求められる時代状況となった。

三

予習問題の正解

- ア① イ② ウ③ エ③ オ④ カ⑤

復習のポイント

本講のポイントをまとめておく。↓ノート整理

発展学習をしよう

例「わらぐつの中の神様」

…たしかめ発問・つっこみ発問の一例

◇たしかめ発問

おみつさんが「村中の人たちから好かれて」いたのは、どこからわかりますか。

反応例 △特別に美しいから大人気、など

○体がじょうぶで、気だてがやさしくて、いつもほがらかにくるくと働いていたから

◆つっこみ発問

「くるくると働」くほど働き者だということは、何かわかりますか。

△たくさんわらぐつを作るからなど

○「あかぎれの指」

← さらに、次の発問もワンセットにしていく

何をして、どのように働くと、そうなるのだろう。

…このように、発問を打ち重ねていくことができ、子どもの読み取りが深まる。

◎みなさんも、このように、どんどん考えていきましよう。

わらぐつの中の神様

杉みき子作
黒井健繪

雪がしんしんとふっています。

マサエは、おばあちゃんといっしょにこたつに当たりながら、本を読んでいます。

今夜は、お父さんはとまり番で帰ってきません。おふる好きのおじいちゃんは、「この寒いのに——。」と、みんなに笑われながら、さつきおふる屋さんへ出かけていきました。あとは、お母さんが台所で夕ご飯の後かたづけをしている音が聞こえるだけで、辺りはとても静かです。

風が出てきたらしく、まどのしょうじがカタカタと鳴りました。雪がサラサラと

雨戸に当たっては落ちていきます。

マサエは、ふと思いで出して、台所のお母さんをよびました。

お母さん、わたしのスキーぐつ、かわいてる。あした、学校でスキーの日だよ。」

お母さんが、水音を立てながら答えました。

「おや、あしただったの。それじゃ、もう一度見てごらん。さつき、新聞紙を丸めて入れといたから、あらかたかわいたと思うけど。」

マサエは夕方まで、友達と近くのおかでスキーをしていました。今日は一度しか転ばなかったの、スキーぐつもスポンも、そんなにぬれないつもりでしたが、帰ってきてみたら、やっぱりいつものようにぐっしょりになっていたのです。

「かわいてるといいけどな。あんなにおそくまで、すべってなきやよかった。」

マサエは、独りでそんなことを言いながら台所へかけて行って、しきいに立てかけであるスキーぐつから、しめっぽい新聞紙の玉を五つ六つ取り出して、手をつこんでみました。くつの中はじわりと冷たくて、せなかまでぶるっとなりそうです。

「うへえ、冷たい。お母さん、どうするう。」

「新しい新聞紙とかえてごらん。ひものところも、しっかりくるむようにしてね。あしたまでには、なんとかかわくだろう。」

「かわくかなあ。なんだか、まだびしょびしょみたいだよ。」

すると、茶の間のこたつから、おばあちゃんが口を出しました。

「かわかんかったら、わらぐつはいていきなさい。わらぐつはいいけど、あつたかくて。」

「やだあ、わらぐつなんて、みったくない。だれもはいてる人ないよ。だいいち、大きすぎて、金具にはまらないわ。」

マサエは、大きな声で言いながら、たんすのそばに重ねてある新聞紙を取ってきて、くるくる丸めては、せつせとスキーぐつの中につめこみました。ぎゅうぎゅう力を入れておしこむと、ぬれたビニル皮がぼっこりとふくらんで、まだいくらでも入りそうです。

おばあちゃんが、また言いました。

「そういったもんでもないさ。わらぐつはいいもんだ。あつたかいし、軽いし、すべらんし。そうそう、それに、わらぐつの中には神様がいなさるでね。」

「わらぐつの中に、神様だって。」

マサエは、新聞紙の玉をすっかりつめこんでしまつて、こたつへもどってきました。ぬれた物をいじつた手が、つうんどこおりそうです。

「そんな迷信でしよ、おばあちゃん。」

「おやおや、なにが迷信なもんかね。真正銘、ほんとの話だよ。」

おばあちゃんは、真面目な顔になって、眼鏡を外しました。

「それじゃあ、ひとつ、わらぐつの話をしてやるかね。」

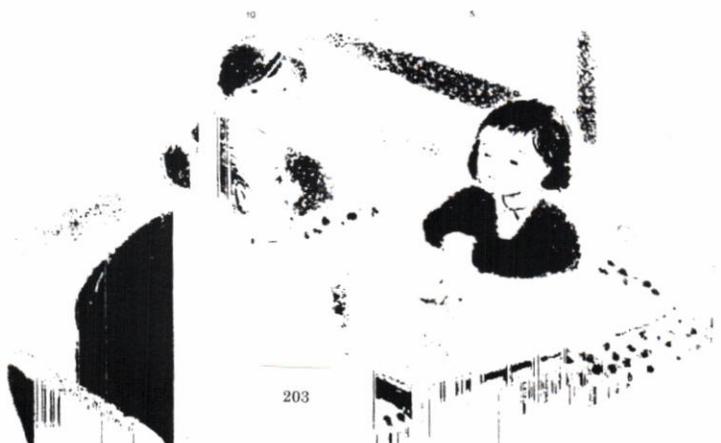
わらぐつの中に神様のいなつた話をね。」

そこへ、お母さんも台所をすませて、赤くなった手をふきふき、こたつへ入ってきました。

「どれどれ、わたしも聞かせてもらいましょうかね。——」

そういえば、おじいちゃんは、おふるおそいわね。混ん

金具



でるのかしら。」

「なあに、おじいちゃんは昔から長湯が好きでね。混もうと混むまいと、ゆっくり楽しんでるのさ。じゃあ、話そうかね。」

おばあちゃんはそう言って、雪の音にちよつと耳をすましてから、こんな話を始めました。

昔、この近くの村に、おみつさんというむすめが住んでいました。おみつさんは、特別美しいむすめというわけでもありませんでしたが、体がじょうぶで、氣立てがやさしくて、いつもほがらかにくるくと働いていたので、村中の人たちから好かれていました。

さて、このおみつさんが、ある秋の朝、町の朝市へ、野菜を売りに出かけました。もう冬が近いので、すれちがう人たちも、なんだか氣ぜわしそうに前かがみになって歩いていきます。おみつさんの足も、それにつられたように自然と速くなりました。町へ入るとすぐの四つ角に、げた屋さんがあって、大きなげたの形をした、すす



けた看板が出ています。その前を通るとき、おみつさんはふと足を止めました。入り口近くの台の上に、かわいらしい雪げたが一足かざってあるのが目についたのです。

白い、軽そうな台に、ぱつと明るいオレンジ色のはなお。上品な、くすんだ赤い色のつま皮は、黒いふっさりとした毛皮のふち取りでかざられています。見ただけで、わかいむすめさんの、はなやかな冬の上のおいが、目の前にうかん

でくるようです。おみつさんは、その雪げたがほしくてたまらなくなりました。「でも、きつと

高いんだらうな。」

うら返しになっているねだんの札を、あかぎれの指でそつとめくってみると、思ったとおり、とてもとても、おみつさんのこづかいで買えるねだんではありません。「負けてくれと言ったって、とてもためだらうしねえ——」。

おみつさんは、しばらくそこに立って、すい付けられたようにその雪げたをながめていました。

「いらつしやい。何をあげますかいね。」

おみつさんがあんまり長いこと立っていたので、店のおくからおかみさんが出てきて声をかけました。おみつさんは、真っ赤になって、口の中で何かもごもご言いながら、にげるように店の前をはなれました。

けれども、市で野菜を売っている間も、あの雪げたのことが、おみつさんの頭をはなれません。いつもは、余計な物など、ほしいと思ったことのないおみつさんなのに、どうしたことが、この雪げたばかりは、なんとしてもあきらめられないのです。

市の帰りに、おみつさんは、またあの店の前を通りました。他のお客にまぎれて、ちらりと目をやると、赤いつま皮の雪げたは、朝と同じ所に、ちゃんとぎょうぎよくならんでいます。「ねえ、わたしを買ってください。あんたが買ってくれたら、うれしいな。」

おみつさんには、雪げたがそうよびかけているように思われました。家に帰ったおみつさんは、思い切って、お父さんとお母さんに、雪げたのことをたのんでみました。「なんだ、雪げたなんて。そんなせいたくなんもん、わざわざ買うことはねえたらう。」

お父さんは、そう言って、相手にしてくれませんか。「物ねだりをしたことのないおみつのことだから、買ってやりたいのはやまやまだけどね。——まあ、おまえが町へよめに行くようなことでもなったらね——」。

お母さんは、言葉をにごしています。「姉ちゃんが買うんなら、おらにも買って。」

つま皮
熊やとろをよけるた
めに、げたのつま先
に付けるおおい。
ふっさり
ふさふさしている様
子を映す言葉。

小さい弟と妹がわいわい言いだしたので、おみつさんも、もう自分のねだりごころではなく、一生けんめい、子どもたちのため役に回らなくてはなりません。買った。

その夜、おみつさんは考えました。「うちのくらしだって、大変なんだから。買ってもらえないのも無理はない。そうだ、自分で働いて、お金を作ろう。そして、あの雪げたを買おう。」

おみつさんのお父さんは、わらぐつを作るのが上手でした。おみつさんも、いつもそれを見ているので、作り方くらいは分かります。おみつさんは、さっそく、毎晩家の仕事をすませてから、わらぐつ作りを始めました。

お父さんの作るのを見ると、たやすくできるようですが、自分でやってみると、なかなか思うようにはいきません。でも、おみつさんは、少しずつ格好が悪くても、はく人がはきやすいように、あったかいように、少しでも長もちするようにと、心をこめて、しっかりと作り、わらを編んでいきました。

さて、やっと一足作りあげてみると、われながら、いかにも変な格好です。右と

左と、大ききもちがうし、なんだか首をかしげたみたい、に、足首の上のところが曲がっています。底もでこぼこして、ちゃんと置いてもふらふらするようです。

その代わり、上からつま先まで、すき間なく、きっちり編みこまれていて、じょうぶなことは、このうえなしです。

「そんなおかしなわらぐつが、売れるかいなあ。」

うちの人はそう言って、笑ったり心配したりしましたが、それでもおみつさんは、朝市の立つ日になると、野菜を入れた大かごにそのわらぐつを結び付けて、元氣よく町へ出ていきました。

げた屋さんの前を通るとき、横目で見ると、あの雪げたは、まだちゃんとそこにありました。おみつさんは、その雪げたが、ほんのちよっぴり自分の手のとどくとこ



ろへ出てきたような気がして、楽しくなりました。

それから、まっすぐに朝市へ出てきたおみつさんは、いつものがんぎの下に、むしろを広げて野菜をならべ、そのはしっこにわらぐつを置きました。そして、野菜を買ってくれる人があると、

「わらぐつはどうですぬ。」

とすすめてみるのですが、こちらはなかなか売れません。くすくす笑ったり、あきれた顔をしたりして、

「いや、よかったですね。」

と断るのはまだいいほうで、なかには、

「へええ、それ、わらぐつかね。おらまた、わらまんじゅうかと思った。」

などと、あけすけなことを言う、口の悪い人もいます。「やっぱり、わたしが作ったんじゃ、だめなのかなあ。おみつさんはがっかりして、不細工なわらぐつを見つめました。

やがて、お昼近くなって、野菜はほとんど売れてしまったし、あきらめてもう帰

ろうかと思っていると、おみつさんのむしろの前に、わかい男の人が立ちました。

どうやら大工さんらしく、いせいのいいねじりはちまきに、大きな道具箱をかついでいます。

「あねちゃ、そのわらぐつ、見せてくれない。」

その声をかけられると、おみつさんは、やはりきまりが悪くなって、

「あんまり、みつともよくねえわらぐつで。」

と、赤くなりながら、おすおすとわらぐつを差し出しました。

わかい大工さんは、道具箱をむしろの上に置いて、そのわらぐつを手にとると、たてにしたり横にしたりして、しばらくながめてから、今度はおみつさんの顔をまじまじと見つめました。

「このわらぐつ、おまんが作んなったのかね。」

「はあ、おらが作ったんです。初めて作ったもんで、うまくできねかったけど。」

「ふうん。よし、もらっとこう。いくらだね。」

大工さんはお金をはらって、わらぐつのひもを慣れた手つきで結び合わせ、道具

がんぎ
雪の深い地方で、
きのひさしを長く出
し、その下を通路に
するために使われて
いる木の履程のこと。

不細工

慣れる



箱といっしょにひよいとかつくと、さっさと行ってしまいました。

おみつさんは、初めてわらぐつが売れたので、うれしくてうれしくて、わかい大工さんをおがみたいような気がしました。

その次の市の日までに、おみつさんは、また一つ、わらぐつを編みあげました。

前のよりは、いくらか形よくなりました。

「今度もうまく売れるといいけど——」。

おみつさんが、わらぐつを持って市に出て、この前のように野菜といっしょにならべておくと、今度はあまり待たないうちに声をかけられました。

「そのわらぐつ、くんない。」

ひよいと顔を上げてみると、まあ、どうでしょう。それは、この間もわらぐつを買ってくれた、あのわかい大工さんなのです。

おみつさんはおどろきましたが、言われるままに、またわらぐつを売って、お金を受け取りました。

その次の市の日にも、またあの大工さんが来て、わらぐつを買ってくれました。その次も、またその次も、おみつさんが市へ出るたびに、あの大工さんが必ずやって来て、不格好なわらぐつを買ってくれます。おみつさんは、いつのまにか、その大工さんの顔を見るのが楽しみになっていきましたが、こんなに続けて買ってくれるのが不思議でもあるので、とうとうある日、思い切ったずねてみました。

「あのう、いつも買ってもらって、ほんとにありがたいんだけど、あの、おらの作ってたわらぐつ、もしかしたら、すぐいたんだりして、それで、しょっちゅう買ってくるんなんじゃないんですか。もし、そんなんだったら、おら、申しわけなくて——」。

すると、大工さんは、にっこりして答えました。



「いやあ、とんでもねえ。おまんのわらぐつは、とてもじょうぶだよ。」

「そうですかあ。よかった。でも、そんなら、どうしてあんなにたくさん——」。

すると、大工さんはちよつと赤くなりました。

「ああ、そりゃ、じょうぶでいいわらぐつだから、仕事場の仲間や、近所の人たちの分も買ってやったんだよ。」

「まあ、そりゃどうも——。だけど、あんな不格好なわらぐつで——」。

おみつさんがきょうしゆくすると、大工さんは、急に真面目な顔になって言いませした。

「おれは、わらぐつをこさえたことはいけども、おれだって職人だから、仕事の上しあしは分かるつもりだ。いい仕事するのは、見かけて決まるもんじゃない。使う人の身になって、使いやすい、じょうぶで長もちするように作るのが、ほんとのいい仕事ってんだ。おれなんか、またわかそうだけど、今にきつと、そんな仕事のできる、いい大工になりたいと思ってるんだ。」

おみつさんは、こっくりこっくりうなずきながら聞いていました。自分といくら

も年のちがわなこの大工さんが、なんだかとてもたのもしくて、えらい人のような気がしてきました。

それから、大工さんは、いきなりしゃがみこんで、おみつさんの顔を見つめながら言いました。

「なあ、おれのうちへ来てくんないか。そして、いつまでもうちにいて、おれにわらぐつを作ってくんないかな。」

おみつさんは、ぼかんとして、大工さんの顔を見ました。そして、しばらくして、それが、おみつさんにおよめに来てくれるということなんだと気がつくくと、白いほおが夕焼けのように赤くなりました。

「それから、わかい大工さんは言ったのさ。使う人の身になって、心をこめて作ったものには、神様が入っているのと同じなんだ。それを作った人も、神様とおなじだ。おまんが来てくれたら、神様みたいに大事にするつもりだよ、ってね。どうだい、いい話だろ。」

おばあちゃんは、そう言ってお茶を飲みました。

「ふうん、それで、おみつさん、その大工さんのどこへおよめに行つたの。」
マサエが、目をくりくりさせてきました。

「ああ、行つたともさ。」

「それで、大工さん、おみつさんのことを、神様みたいに大事にした。」

「そうだねえ、神様とまではいかないようだったけど、でも、とてもやさしくしてくれたよ。」

「ふうん。じゃあ、おみつさん、幸せにくらしたんだね。」

「ああ、とっても幸せにくらしてるよ。」

「くらししてる。じゃ、おみつさんて、まだ生きてるの。」

「生きてるともね。」

「へえ、どこに。」

おばあちゃんは、にこにこ笑っています。マサエは、お母さんの顔を見ました。お母さんも、にこにこ笑っています。

「変なの、教えてくれたっていいでしょ。」

そこで、お母さんが言いました。

「マサエ、おばあちゃんの名前、知ってるでしょ。」

「うん。おばあちゃんの名前は、山田ミツ。——あつ。」

マサエは、パチンと手をたたいて、目をかがやかせました。

「おみつさんて、それじゃ、おばあちゃんのことだったの。あら、じゃあ、その大工さんて、おじいちゃん。」



おばあちゃんはうなずいて、おし入れのたなの上を指さしました。

「あの箱を持ってきてごらん。」

マサエは、すぐふみ台を持ってきて、たなの上から、ほこりだらけのボール箱を下ろしてきました。開けてみると、つうんとかびくさいにおいがして、赤いつま皮のかかったきれいな雪が、きちんとならんでいました。

「あら、きれいだ。かわいいね。」

「このうちへおよめに来るとすぐ、おじいちゃんが買ってくれたんだよ。だけど、あんまりうれしくて、もったいなくてね。なかなかはく気になれなかった。かざり物じゃないんだぞって、おじいちゃんに笑われたけど、そのうちにそのうちにと思っているうちに、年を取ってしまつてね。どうどうそれつきりはかずじまいさ。」

「ふうん。だけど、おじいちゃんがおばあちゃんのために、せっせと働いて買ってくれたんだから、この雪がたの中にも、神様がいるかもしれないね。」

「ああ、きつといなるだろうね。だから、はけなくなつても、こうして大事にしまつとくんだよ。」

そのとき、げんかんのたたきで、カッカツと雪けたの雪をはらう音がしました。

「おや、おじいちゃんのお帰リだよ。」

マサエは、赤いつま皮の雪がたをかかえたまま、

「おかえんなさあい。」

とさげんで、げんかんへ飛び出していきました。



四 子どもの発言を生かした板書のしかた

キーワード：板書、黒板、電子黒板、チョークの持ち方・使い方、筆圧、板書計画

予習のポイント

板書は誰のためのものかということについて、考えをまとめておく。

次の事例を読んでみよう。そして、板書で大切なことは何か、どんな見つけてノートに記しておこう。また、友だちと情報交換して、多様な考えを吸収しよう。

「宝物をしようかいしよう」（資料②参照↓次頁）の事例

子どもたちは、お互いのことを知るために、とっておきの宝物について、そう考える理由や根拠、事例等を挙げながら話したり、聞いたりする。更に、相手を意識した話し方も工夫していくだろう。この教材や教師のモデルにより、紹介の仕方や話し方のポイントを学び、それらを自分の発表に活用できるように指導したい。

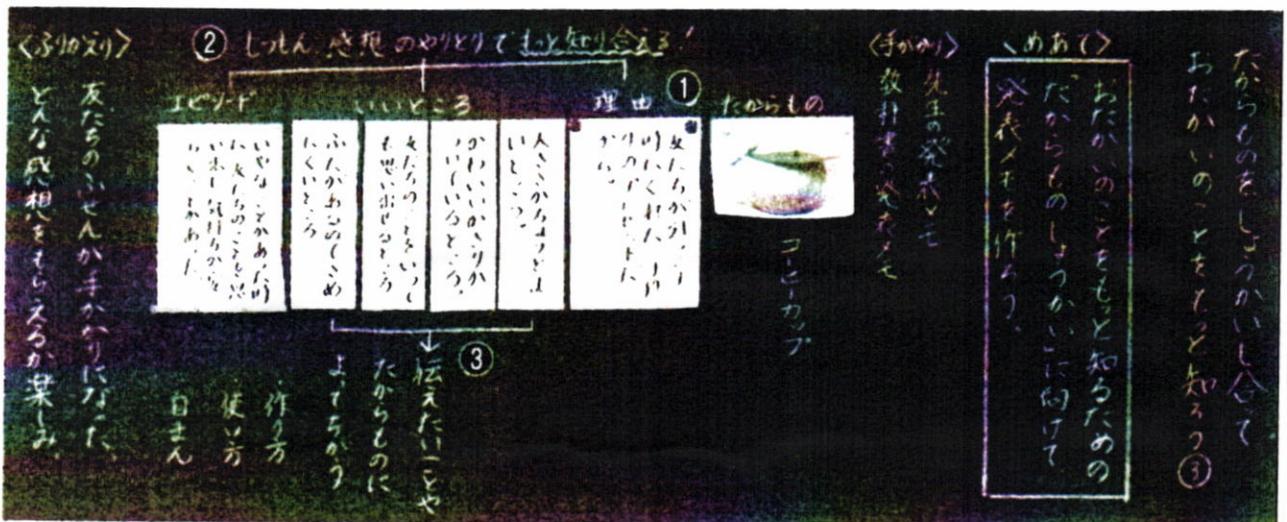
授業の展開としては、次のように進めることにした。

- 1 教師自作の「宝物の紹介」を聞き、学習のゴールをイメージするとともに、ねらいをつかむ。
- 2 これまでの同様な学習経験を想起しながら、学習の計画を立てる。
- 3 お互いのことを知るためにはどんな紹介の仕方がよいか、教師モデルや教科書の例をもとに出し合いながら大まかにつかむ。
- 4 自分の宝物の紹介に向けて、理由や事例などを挙げながら、発表メモをつくる。（本時）↓下の板書を注目！
- 5 7 略

たからものをしようかいし合って、おたがいのことをもっと知ろう

【教材名】「たからものをしようかいしよう」（教育出版3年上）

大分大学附属小学校 山田眞由美



宝物をしようかいしよう

これは、村上さんがさいしよに考えたスピーチです。

わたしの宝物は、この四つ葉のクローバーのしおりです。

はじめに、作り方を話します。まず、おし葉にするクローバーを見つけてみます。そして、二年生の時にやったように、数日間、本にはさんでおきます。おし葉がでたら、厚紙にはって、どうめいなシールでつみまします。あなをあげて、黄色のリボンをつけます。

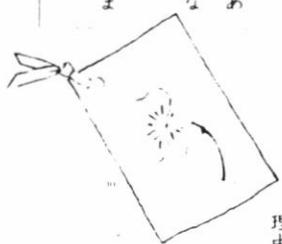
つぎに、宝物にえらんだ理由です。それは、クローバーをおばあちゃんといっしょに見つけたからです。散歩に行った時、いろいろな草花の名前や草花あそびを教えてもらいました。にわや野原の草が、とても楽しい仲間になったような気がしました。みなさんも、みまわりの物で楽しくあそんでみませんか。

村上さんは、このスピーチをする前に、

「スピーチメモ」を作って、話すことからや組み立てを考えていました。

村上さんのスピーチメモ①

- (1) 宝物——しおり
- (2) 作り方
 - 葉を本にはさんでおし葉にする。
 - 厚紙にはる。
 - どうめいなシールでつみんで、あなをあげ、リボンをつける。
- (3) 宝物にえらんだ理由
 - おばあちゃんに教えてもらった。
 - 草花は楽しい仲間。
 - みんなにすすめたい。



「かんじ」
宝物 もの

四つ葉 はは

理由 ょう

大事

ここが大事

スピーチメモを作るには

- 話したいことをきめたり、みしかい言葉でまとめる。
- くわしくつたえたいことについて、内容をせりりする。
- それが宝物である理由（できごとや人物、思い出など）
- 宝物のようす（色・形・とくちょうなど）
- もう一度、組み立てをたしかめる。



宝物しようかいなの、これでは作り方の説明みたい。

村上さんは、なぜこれが宝物なのかをもっとよくわかってもらえるように、もう一度メモを作りました。二つのメモとスピーチをくらべて、どこがかわったか、どんなところがよくなったか話し合ひましょう。

村上さんのスピーチメモ②

- ① 宝物——しおり
 - ② えらんだ理由
 - おばあちゃんに教えてもらった。
 - 自分で作った。
 - ③ 作り方
 - 葉を本にはさんでおし葉にする。
 - 厚紙にはる。
 - どうめいなシールでつみんで、あなをあげ、リボンをつける。
- 話し方のくふう
- よびかける言い方をする。
 - じつさいに作って見せる。

このしおりが、わたしの宝物です。どうしてだと思ひますか。

理由は、おばあちゃんに教えてもらって、自分で作ったからです。おばあちゃんには、ほかに草花をつかういろいろなあそびを教えてもらいました。草笛や、風車などです。

みなさんは、しおりを作ったことはありますか。ちよつと見てください。まず、このように数日間、厚い本の間にはさんで、おし葉を作ります。これを、厚紙にはって、どうめいなシールでつみみ、リボンをつけて、できあがり。

わたしといっしょに、いろいろな草花でしおりを作ってみませんか。自分だけの宝物が、できると思ひます。

一分間スピーチをしよう

朝の会などで、みじかいスピーチをしてみましよう。自分のことをもっとみんなに知ってもらえるように、話の組み立てを考えてみましよう。

「だいのれい」

● わたしの好きな言葉

など

感想

草笛

さあ、たくさん見つけたらどうか。ここからは、答え合わせをしていこう（もちろん、それ以上に見つけるよう期待する）。この教材の本時の板書で大切なことを挙げるならば、おおよそ次のようになる。（板書中の①②③と対応）

①教師モデルで発表メモの作り方を確認できる。

②理由やエピソードなども伝えることで、聞き手にとつても質問したり感想を述べたりしやすくなるので、学習の目的である「お互いのことを知る」につなげられる。

③教師モデルでは「いいところ」だが、教科書教材では「作り方」であることに触れ、ここは伝えたいことや宝物によって違うようになってよいことを考えさせられる。

一 太い線・細い線

柔らかいチョーク（石膏系→太い線が出せる）と、硬いチョーク（炭酸カルシウム系→細かい線になる）がある。その特質を知っておき、生かしていきたいものである。

筆圧をしっかりかけて、黒板に食い込むように書くのが望ましい。ピシッ、パシッといった音がするぐらい、最初の打ち込みを鋭くするとよい。

縦に向かって、あるいは横に向かって、まっすぐに書けることをめざそう。基本は、大きく、ゆっくり、丁寧にだが、必要に応じて速く書けるようにする。チョークを使った板書練習を、ふだんからなるべく多くしておこう。

二 黒板に話しかけていないか

話す時は必ず子どもの方を見て話をし、その後板書していく。板書が終わると、再び子どもの方を向いて話す。その区別をしっかりつけよう。

特別支援学校の教師なら、当たり前前の技術である。声が聞こえにくい子どもにとっては、教師の唇の動きが大切な手がかりとなるのである。

書くときと、話をするときとをきちんと区別していくことは、子どもの聞く態度を育てると同時に、子どもがノートを取る時間を確保できるのである。

三 筆順に留意を

板書する上で、正しい筆順を身に付けておくことも大切である。筆順は、字形を整えるためにも言える。

小学校で学習する一〇二六字の漢字については、今のうちに正しい筆順を確認しておこう。教師として自信を持って板書するために、基礎となることである。

ここで、特に筆順の間違いを頻繁に見かける次の漢字について、あなたも確かめておいてほしい。

片	業	右	左	用	乗	齒
延	発	局	必	情		

四 姿勢にも気を付けて

黒板の低い位置に書くときは、しゃがんで書くようにしよう。しゃがむは「かがむ（屈む）」であり、字形も整うし、字が教師の身体で隠れることなく、児童も見えやすい。その時に、利き手以外の手の使い方も大事である。なぜなら、利き手以外の手が遊んでいると、身体もふらふらして、安定感がなくなるからである。

五 板書計画はなぜ大事か

チョークで書かれただけの板書は、単調なものとなりやすい。イラスト（挿絵）・線・矢印・枠囲み等を入れ、変化をつけるとうい。フラッシュカード（短冊の形・模造紙に文字を書いた掲示資料）も効果的である。教師として、授業前に準備をすることで、授業のゴールである板書の全体像を構想しておくことは、メリットが多い。

何と言っても、一時間の授業の足跡が板書である。視覚的なツールの代表格が板書であり、工夫された板書により、児童もノートが取りやすくなる。

一般的な板書計画としては、三段階に分ける・レイアウトするのがよい。①導入で、本時のめあての確認と中心課題を考えるための場面設定をする。②展開で、中心課題を考えるための場面の読み取り・伝え合い等を位置付ける。(文学教材の読みの場合。)③まとめ(終結)で、学習のまとめと振り返りを記す。このような三段階を基本とする。

六 板書の実際

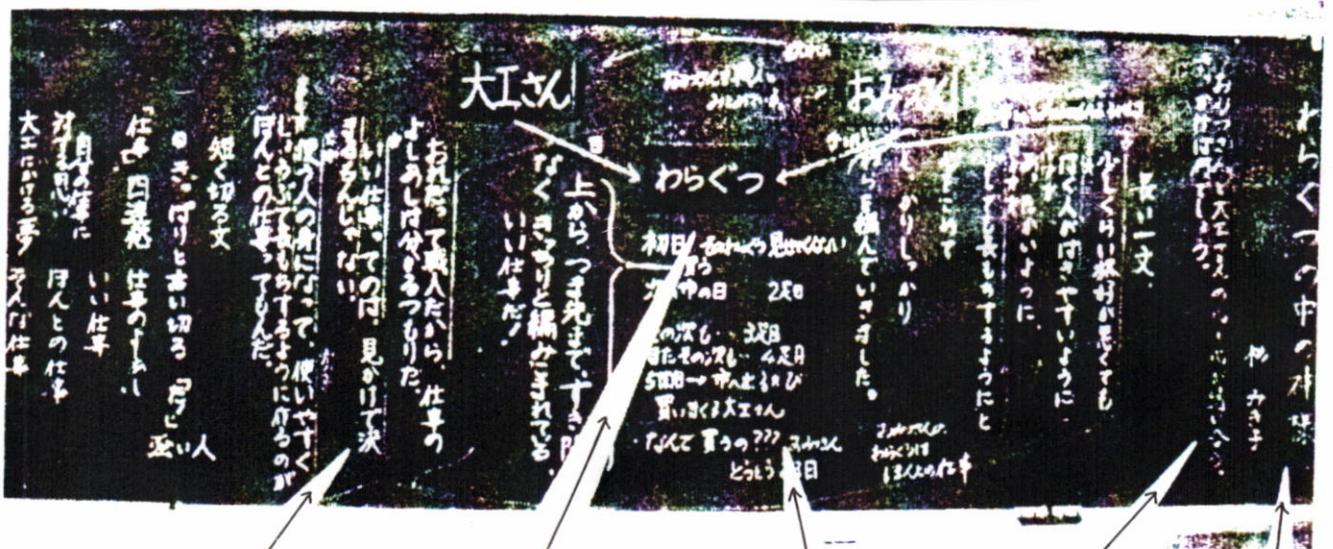
五年文学教材「わらぐつの中の神様」の場合で考えてみよう。(下の板書例を参照のこと。)

はじめに、教材名と著者名を書く。続いて、本時の学習のめあてである。

縦書きが中心だが、子どもの意見の中からキラリとひかる表現を横書きで速記メモする場合もある。また、右から左へ書くのが普通だが、以下の例のように、中央から書き始める場合も稀にある。

子どもの音声による発言内容を、効果的に教師が目に見える形にするといったリアルタイムな、ダイナミックな作業が板書である。授業中の発言を効果的にメモし、構造的に整理する。板書したことが、子どもの思考の手助けをするための視覚ツールになるように願いつつ。例えば、板書によって、順序、対比、因果関係等を示すようにすると、子どもたちの思考が動き出す。

なお、小学校で使うチョークには、白・黄・赤・青・緑・茶の色というバラエティがある。中でも、白・黄・赤が格別多く使われる。基本は、白で文字を書き、重要なキーワードは黄、最も重要な語句や傍線は赤、という使い分けが一般的である。



主人公の心情が表れている表現を抜き出し、黄や赤のチョークの線で関係を繋ぐ

本時はこの中央から書き始め、左側と右側に二人の登場人物の心情を対比させる形に整理している

子どもの意見の中から、キラリと光る表現を横書きで速記メモする

本時のめあて
教材名
著者名

復習のポイント

本講のポイントをまとめる。↓ノート整理・発展学習
 なお、電子黒板(デジタル教科書)の活用については、以下の読み物(記事:M社のPR誌より)を参照のこと。

読むこと教材(説明文)

「ウナギのなぞを追って」(四年下)
 画像と文章を関連させながら読むことで、読みを深める

デジタル教科書を効果的に活用しよう

デジタル教科書を導入したものの、どのような場面で使うとよいか悩むことはないでしょうか。今号からスタートする本連載では、授業のどんなところで「国語デジタル教科書」を使えばよいか、またそれによって、どのような効果が得られるのかをお伝えします。

四年下の教科書で学習する「ウナギのなぞを追って」は、子どもたちの知的好奇心をくすぐり、興味をもって読むことができる科学読み物です。子どもたちはまず、自分たちにとって身近な生き物であるウナギが、実は多くの謎に包まれていることを知って驚きます。そして、謎を解明していくドキュメント番組のような展開で書かれた文章に引き込まれていくという、とても魅力的な教材です。しかし、その一方で、時系列に沿って事実を整理したり、話題のまとめりに整理したりしながら読んでいくことができないと、子どもたちにとって難しく感じる教材でもあります。子どもたちが、最

指導目標

- ◎自分が興味をもったところを紹介するために、文章の内容を的確に押さえて要旨を捉えたり、事実と感想、意見などとの関係を押さえ、自分の考えを明確にしながら読んだりすることができる。【読(1)イ、エ】【伝(1)イ(ア)】
- 文章を読んで考えたことを発表し合い、自分の考えを広げたり深めたりすることができる。【読(1)オ】

指導計画(全8時間)

第1次 1時 学習の見通しをもち、学習計画を立てる。

デジタル教科書の活用場面①
 子どもたちの知的好奇心をくすぐる。

第2次 2時 目的に沿って、文章を深く読む。

- ・事実を時系列に沿って整理しながら読む。
- ・画像についての説明を考えながら読む。(グループで学び合い)

3時

デジタル教科書の活用場面②
 事実と考えの記述に気をつけながら、調査の道筋を読み取ったり、調査内容を捉えたりする。

4時

第3次 5時 最も興味をもったところを中心に文章を要約する。

デジタル教科書の活用場面③
 要約や紹介文を書く活動につなげる。

6時

興味をもったところについて、自分の考えと関連させながら紹介文を書く。

7時

紹介文を読み合っって感じたことを伝え合い、考えを深める。

8時

学習を振り返る。

横浜市立瀬ヶ崎小学校教諭

高崎智志



1974年生まれ。広告代理店勤務を経験した後、27歳で公立小学校教諭に。横浜市小学校国語研究会を中心に市内の国語教育推進に取り組む。平成24年度文部科学大臣優秀教員に選ばれる。

文章中の-----は、「国語デジタル教科書」に収録されている資料や機能です。

**デジタル教科書の活用場面①
子どもたちの知的好奇心
をくすぐる**

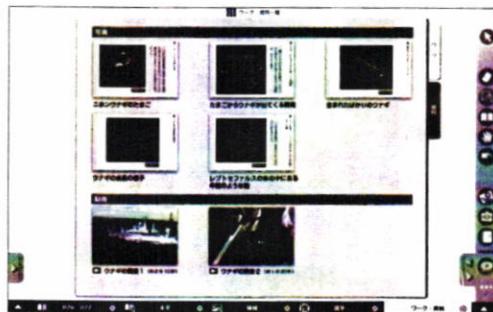
デジタル教科書には、資料として、画像や動画が収録されています。この教材では、「たまご」からウナギが出てくる瞬間「やウナギの成長の様子」など、文章だけではなかなかイメージしにくい箇所について、多くの資料が収録されています（※1）。特にウナギの調査を追った動画は、文章で読み取ったことを確認するための資料として有効です。まず、単元の導入として、本文を読

- ① 子どもたちの知的好奇心をくすぐるための手立て
 - ② 事実と考えの記述に気をつけながら、調査の道筋を読み取ったり、調査内容を捉えたりするための手立て
 - ③ 要約や紹介文を書く活動につながる手立て
- これらの手立てをより効果的なものにするために、デジタル教科書を活用していきます。

む前に、ワーク「はじめに」（※2）を使い、ウナギについて知っていることを出し合いました。「ウナギのたまご」の写真を見た子どもたちは、自分たちが知っているウナギとはなかなか結び付かない卵の姿に興味津々でした。さらに、「広い海の様子」の写真を見て、そもそもウナギが海で卵を産むことを知らないという子が多く、意外な事実に驚いていました。「ウナギは川にすんでいるイメージがあるけど、どうして海で卵を産むのか」「広い海はどこで卵を産むかなんて、どうやって見つけるのだろう。見つかるのかな」など、数々の疑問が生まれました。ウナギについての関心が高まったところで、文章を読む前に「ウナギの調査」の動画を見せ、内容のイメージをもたせるという方法も考えられますが、あえてこの動画は、単元の出口のところで見せることにしました。なぜなら、調査の様子は、言葉を手がかりにしながらいメージしてほしいと考えたからです。文章の中には、「周りに島一つ見えない海の真ん中」「あざやかなぐんじょう色の海」などの叙述が出てきます。これらの叙述をもとにしながら、子どもたちなりに海をイメージすることを大切にしたいと考えました。また、多くの時間と労力をかけ



▲※2 「ウナギのなぞを追って」のワーク「はじめに」

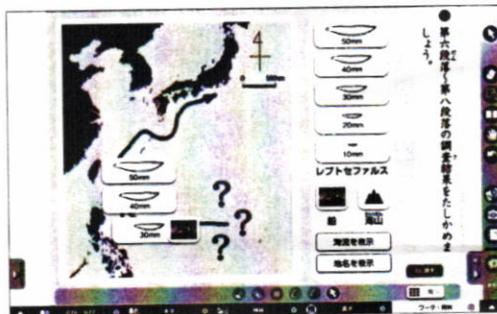


▲※1 「ウナギのなぞを追って」の資料一覧

て行う地道な調査の様子は、動画を見れば一目瞭然ですが、それでは文章を読む目的が薄れてしまいます。言葉を手がかりにして自分なりに読み取った後に、「ウナギの調査」の動画を見せることで、さらなる感動や知的好奇心が生まれ、他の科学読み物への関心を高めることができると考えました。

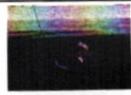
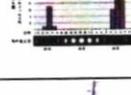
**デジタル教科書の活用場面③
事実と考への記述に気をつけながら、調査の道筋を読み取ったり、調査内容を捉えたりする**

この教材では、時系列に沿って、調査活動についての事実が書かれています。また、事実をもとに導き出した筆者の考えも書かれています。そこで、まずは時系列に沿って事実を捉えるために、ワーク「第六段落、第八段落の調査結果をたしかめましょう」を活用し、そこに描かれている地図や、さまざまな大きさのレポートセファルス、船、海山などのアイコンを使いながら、調査をした場所や日などを整理していきましました(※3)。子どもたちには同様のワークシートを配布し、読み取った事実を自分で確認することが



▲※3 「ウナギのなぞを辿って」のワーク「第六段落～第八段落の調査結果をたしかめましょう」

できるようにしました。調査を重ねるごとに、だんだんウナギの産卵場所が特定されていく様子を、ワークを活用して視覚的に整理していくことで、調査の道筋を比較的容易に捉えることができました。また、調査の内容を捉えるために、調査に関連する画像を示し、その画像についての説明を考えるグループ活動をいくつ入れました。調査に関連する画像をいくつか示し、グループ内で分担し、それぞれの画像についての説明を、教科書の叙述をもとにしながらワークシート(※4)にまとめました。そして、その後グルー

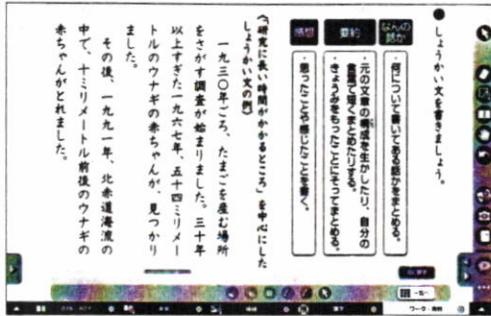
	
	
	
	
	

▶※4 ワークシート (教師が作成したもの) 左側に画像、右側に書き込み欄を設けている。

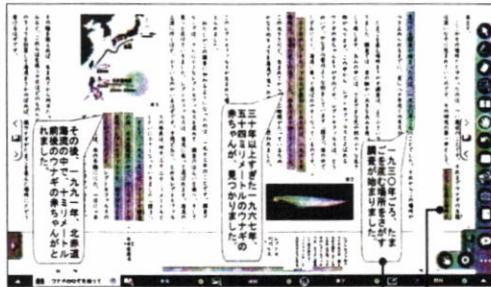
プ内で共有しました。この活動を通して、画像と文章を結び付けながらより深く読むことと、グループ内で調べたことを共有することで理解できなかつたところや疑問点を学び合いによって解決することを目撃しました。子どもたちは、自分が担当した画像に関する叙述をよく読み、まとめることができました。さらに、まとめたことをグループの友達と交流することを通して、内容の理解を深めることができました。関連する画像は、教科書に掲載されているものや、デジタル教科書の資料として豊富に収録されているものの中から、この文章の中心となる内容に関連するものを選びました。

デジタル教科書の活用場面⑥
要約や紹介文を書く
活動につなげる

まずは紹介文の形式を共有します。ここで大切なことは、紹介文の中に要約を位置づけるということです。つまり、紹介文を書くために要約をする、という目的をしっかりと捉えさせたうえで学習を進めます。そして、自分が興味をもったところについて紹介するために、「どうして興味をもったのか」ということを自分に問いかけながら、要約していきます。



▲※5 「ウナギのなぞを追って」のワーク「しょうかい文を書きましょう」



▲※6 「ウナギのなぞを追って」の教科書画面

※5の例文は、どの叙述に注目して要約しているのか、マーカーを引いて示す。そして、該当する例文を吹き出しに入れて貼付。

しかし、子どもたちにとって、要約は簡単なものではありません。そこで、「ワークショップ「しょうかい文を書きましょう」」(※5)を使って、ポイントを整理するとともに、要約の例文を示しました。そして、教科書画面を開き、例文がどんな叙述に着目しながら要約をしたのか、マーカー機能と吹き出し機能を使い、明らかにしてみました(※6)。子どもたちは、要約の手順を視覚的に捉えることができたことで、自分の要約に必要な叙述を選んだり、それぞれを関連付けたりしながら要約することができました。

デジタル教科書を活用して

デジタル教科書には魅力的な画像や動画が多く収録されています。しかし、これらの素材を有効に活用するためには何を、どの場面で、どのような形で提示するのかなど、授業のねらいに沿って意図的に活用していく必要があります。あくまでも子どもたちが言葉を介して理解していくことを大切にしながら、子どもたちの理解の助けになったり、さらに理解を深めたりするツールとして画像や動画を活用していくという視点が大切です。

今回の単元で取り組んだ要約は、苦手とする子どもが多い言語活動です。要約をするときに、子どもたちが悩むのは、どの文を選んだらいいのか、どうやって自分の言葉で短くまとめればいいのかという点です。要約の例文を示すだけではなかなか要約ができるようにはなりません。要約をする過程を、デジタル教科書を使って、視覚的に分かりやすく説明していくことで、子どもたちは、要約の手順を具体的に理解することができました。教科書の文章を示しながら、子どもたちと一緒に、リアルタイムで要約の過程を共有していくことは、デジタル教科書だからこそできるのではないかと思います。

〔五〕 場面の読み取りを大切にすゝる物語の授業

キーワード …… 音読、朗読、読解、解釈、場面分け、構造読み、心情の変化、クライマックス

予習のポイント

作者の意図や主人公の気持ちのつかませ方について、考えをまとめておく。

今まで、次のような経験がなかっただろうか。

場面ごとの読み取りの学習の中で、「主人公は〇〇しましたね。この時の気持ちは？」「では、この時の気持ちは？」と問われた。

単元全体の学習が終わったところで、「この作品の主題はなんだろうか」と問いかけられ、話し合った挙句、「いろいろ出たけれど、先生は、◇◇だと思ふ。」とまとめられた。

もちろん悪意があるわけではないが、はたして、それで（それだけで）いいのだろうか。

次の作品（資料③参照）を読んでみよう。

そして、右のような問題意識のもと、子どもたちにどのような活動をさせ、どのように考えさせればいいのか、自分なりのアイデアをノートに書き出しておこう。

また、友だちと情報交換して、多様な考えを吸収しよう。

白いぼうし

あまん きみこ 作
こころ 美保子 絵

「これは、レモンのおいでですか。」
ほりばたで乗せたお客のしんしが、話しかけました。
「いいえ、夏みかんですよ。」
信号が赤なので、ブレーキをかけてから、運転手の松井さんは、にこにこして答えました。
今日は、六月のはじめ。



信号

速達

夏がいきなり始まったような暑い日です。松井さんもお客も、白いワイシャツのそでを、うてまでたくし上げていました。
「ほう、夏みかんでのは、こんなにおうものですか。」
「もぎたてなのです。きのう、いなかのおふくろが、速達で送ってくれました。においまでわたしにとどけたかったのです。」
「ほう、ほう。」
「あまりうれしかったので、いちばん大きいのを、この車にのせてきたのですよ。」
信号が青にかわると、たくさん車がいつせいに走りだしました。その大通りを曲がって、細いうら通りに入った所で、しんしはおりていきま

アクセルをふもうとしたとき、松井さんは、はっとしました。「おや、車道のおんなすぐそばに、小さなぼうしが落ちていそ。風がもうひとふきすれば、車がひいてしまいうわい。」
緑がゆれているやなぎの下に、かわいい白いぼうしが、ちよこんとおいてあります。松井さんは車から出ました。

そして、ぼうしをつまみ上げたたん、ふわっと何かが飛び出しました。

「あれっ。」

もんしろちようです。あわててぼうしをふり回しました。そんな松井さんの目の前を、ちようは



車道
飛び出す

ひらひら高くまい上がると、なみ木の緑の向こうに見えなくなってしまいました。
「はあ、わざわざここにおいたんだな。」ぼうしのうらに、赤いししゅう糸で、小さくぬい取りがしてあります。
「たけやまようちえん たけの たけお」
小さなぼうしをつかんで、ため息をついている松井さんの横を、太ったおまわりさんが、じろじろ見ながら通りすぎました。
「せっかくのえものがいなくなっていたら、この子は、どんなにがっかりするだろう。」
ちよつとの間、かたをすぼめてつつ立っていた松井さんは、何を思っていたのか、急いで車にもどりました。
運転席から取り出したのは、あの夏みかんです。まるで、あたたかい

運転席

日の光をそのままめつけたような、見事な色でした。すっばい、いいにおいが、風で辺りに広がりました。

松井さんは、その夏みかんに白いぼうしをかぶせると、飛ばないように、石でつばをおさえました。

車にもどると、おかつばのかわいい女の子が、ちょこんと後ろのシートにすわっています。

「道にまよったの。行っても行っても、四角い建物ばかりだもん。つかれたような声でした。」

「ええと、どちらまで。」

「え。——ええ、あの、あのね、菜の花横町ってあるかしら。」

「菜の花橋のことですね。」

エンジンをかけたとき、遠くから、元気そうな男の子の声が近づいてきました。

「あのぼうしの下さあ。お母ちゃん、本当だよ。本当のちようちよが、いたんだもん。」

水色の新しい虫とりあみをかかえた男の子が、エプロンを着けたままのお母さんの手を、ぐいぐい引っぱってきます。

「ぼくが、あのぼうしを開けるよ。だから、お母ちゃんは、このあみでおさえてね。あれっ、石がのせてあらあ。」



菜の花

建物

辺り

客席の女の子が、後ろから乗り出して、せかせかと言いました。

「早く、おじちゃん。早く行ってちょうだい。」

松井さんは、あわててアクセルをふみました。

やなぎのなみ木が、みるみる後ろに流れていきます。

「お母さんが、虫とりあみをかまえて、あの子がぼうしをそうっと開けたとき——。」と、ハンド

を回しながら、松井さんは思います。「あの子は、どんなに目を丸くしただろう。」

すると、ぼかっと口を○の字に開けている男の子の顔が、見えてきます。「おどろいただろうな。」

まほうのみかんと思うかな。なにしろ、ちようが化けたんだから——。」

「ふふふっ。」

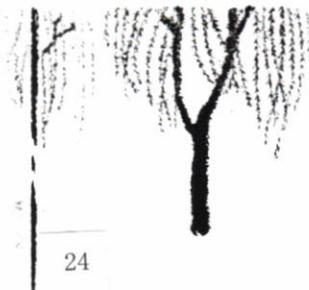
ひとりでにわらいがこみ上げてきました。でも、次に、

「おや。」

松井さんはあわてました。バックミラーには、だれもうつっていません。ふり返っても、だれもいません。

「おかしいな。」

松井さんは車を止めて、考え考え、まどの外を見ました。



そこは、小さな団地の前の小さな野原でした。

白いちようが、二十も三十も、いえ、もつとたくさん飛んでいました。クローバーが青々と広がり、わた毛と黄色の花の交ざったたんぼぼが、点々のもようになってさいています。その上を、おどるように飛んでいくちようをぼんやり見ているうち、松井さんには、こんな声が聞こえてきました。

「よかったね。」

「よかったよ。」

「よかったね。」

「よかったよ。」

それは、シャボン玉のはじけるような、小さな小さな声でした。

車の中には、まだかすかに、夏みかんのにおいがのこっています。

あまんきみこ
一九三一年、中四
に生まれる。作家
ひつじくものむこ
うに、「ちいちゃん
のかげふり」など
の作品がある。



登場人物の人からをとらえ、話し合おう

「白いぼうし」の登場人物について、どんな印象をもちましたか。「松井さん」の会話や行動、気持ちを表す言葉や表現に気をつけて読み、「松井さん」の人からを考えて話し合います。

登場人物の人からをとらえながら読もう

▼「白いぼうし」を読んで、場面と登場人物を整理しましょう。

- ・場面ごとに、登場人物をあげましょう。
- ・それぞれの場合で、だれが、何をしますか。
- ・中心となる登場人物は、だれですか。

▼「松井さん」は、どんな人からだと思いますか。それは、どんな会話や行動から分かりますか。ノートにまとめてみましょう。

考えたことを話し合おう

①「松井さん」の人からについて考えたことを発表しましょう。あなたがどのように考えた理由が分かるところも言ってみましょう。

わたしは松井さんはとても○な人だと思いました。それは、――。



▼「松井さん」が、話したり考えたりしているところを、「松井さん」になったつもりで音読してみましょう。どのように読むと、「松井さん」の人から表れるでしょうか。場面の様子や気持ちも考えながら読みましょう。

- ② 友達の発表を聞いて、思ったことや考えたことをノートに書きましょう。
- ・なるほどと思ったこと。
 - ・そうかなあと、ぎもんに思ったこと。
 - ・にているけれど、少しがっていること。

③ ノートに書いたことをもとに、話し合しましょう。

ぼくも、田中さんと同じ考えです。でも、そう思った場所はちがっていて、――。



・友達

自分の考えをもとに「白いぼうし」のさいこの一文(20ページ12行目)があるのとなおのとは、読んだ後の感じはどちらがうと思えますか。



□ 友達の発表を聞いて、どんなことに気がつきましたか。

一 イメージできるということ

小学校の物語文の指導では、「場面の様子を読み取る」「人物の心情を読み取る」など、いろいろな指導事項があるが、最も大切なことは、子どもが教科書に書かれている文字を読んで、物語の世界や登場人物をイメージできるようにすることである。例えば、白い紙に黒のインクで印刷された「海」という文字を読み、「青い海」や「嵐の海」などの映像を思い浮かべるといったことである。そして、そのような物語の中の世界をクラスの他の友だちと分かち合うことが大切なのである。そのような授業づくりをしていくことがポイントである。

二 お手本になる音読としての範読

音読で大切なことは、声の強弱や読み速の速さ、抑揚や間の取り方等があるが、教師が音読のお手本を示すこととしての範読（示範音読）を行い、それらを自然に表現して聞かせることが重要となる。

最も大切なことは、物語の内容をしっかりと掴んだ上で読むということである。そうしてないと、文を切るところや強弱、速さなどが不自然になってしまったり、そうなるや方も人物の気持ちや場面の様子を味わうこともできなくなる。先に述べた「物語の内容をしっかりと掴んだ上で読む」という意味での範読は、まさに教師自身が場面の様子をイメージしながら読んでいくことになる。

このように、範読は子どもたちにはいい影響を与え、そのイメージ形成に資するものでもあることから、教師の不断の努力が求められる指導技術である。

三 物語の読解の基本は場面の読み取り

先に述べた「物語の内容をしっかりと掴んだ上で読む」ということは、子どもも同様で、場面の様子をイメージしながら読むということに他ならない。

場面の様子をイメージするにあたっては、時間・場所・人物・出来事の観点を大切にする。それらは、場面の様子の様々な想像へと導いてくれる。

場面分けには一定のルールがあるので、参考にしてもらいたい。

○時間 ↓ 「ある日」「次の日」のように、少しでも時間の変化があれば別の場面として分ける。

○場所 ↓ 出来事が起こる場所や、登場人物が活動している場所が少しでも変化したら、別の場面に分ける。

○登場人物 ↓ 中心人物だけではなく、他の登場人物が登場したりすることにも注目して別の場面に分ける。

○出来事 ↓ 時間・場所・登場人物の変化に注目すれば、必然的に出来事も変わる。出来事に注目することによって、登場人物の考え方や気持ち、どのようなきっかけによって変化していくのかを読み取ることができるようになる。

様々な物語を読んで、これらの観点を自身でも見つける経験を積んでいくとよい。

四 物語を大きく分ける構造読みへ

物語文は、およそ次の四つに分けられる。

① 前話：物語の登場人物や、場所などの紹介として物語の冒頭部分に書かれる ↓ プロローグ

② ストーリー展開：出来事（ドラマ）の始まりから展開へ

③ クライマックス：ドラマの山場

④ 後話：物語の終末部分 ↓ エピローグ

物語を、右の構造にあてはめてみるとよい。もちろん、全ての物語がそれにあてはまるわけではない。

五 中心人物の心情の変化を読む

場面分けと構造読みができれば、物語の学習の半分は整ったことになる。ここからが、いよいよ本番である。物語文の学習の目的は、中心人物（主人公）の態度や考え方や気持ち、様々な出来事を通して変化していく様子を読むことにあると言ってよい。それを実現するためには、中心人物の態度や考え方、気持ちが大きく変化する場面の読み取りが重要になってくる。

中心人物の心情の変化を読み取らせるには、三つのポイントがある。

- ① 出来事：物語では何らかの出来事（ドラマ）が起こる
- ② 行動や会話：中心人物は、出来事によって様々な行動を起こし、他の登場人物と会話を交わす
- ③ 心情の変化：行動や会話によって人物の心情が変化し、その変化は、心の中で思っていることや感じていることとして表現される

六 登場人物について深く読み取らせる五つの観点

さらには、以下の五つの観点によって、人物像を深く掘り下げることが可能となる。

- ① 登場人物の生い立ち：両親とも健在か・みなしごか・謎なのか等
- ② 登場人物の人間関係：家族の関係はどうか・友達との関係はどうか等
- ③ 登場人物のプロフィール：氏名・年齢・性別・職業等
- ④ 登場人物の性格：言動や仕草・表情から想像する
- ⑤ 登場人物の姿形：人か動物か架空の生き物か等も含めて

七 物語の読み方指導の結末はどう締めくくるか

これまでの学習によって、教材文（物語）をじっくりと読み込むことができるはずである。最後に、読みの締め括りを

する。ここでは、主題にせまる感想を述べ合う授業をするところが肝要である。

周知のように、一つの物語を通して訴えているテーマを「物語の主題」と言う。物語の主題は、決して一つではない。読者の考え方や、経験、あるいは読み方（登場人物の誰に注目して読むか等）によって、主題は読者の数だけ出てくる。

物語を読んで、どの出来事や主人公の行動・会話・心情の変化に感動したかということについて、子どもたちそれぞれが自分の意見を述べるのが大切である。そのことが、物語文の学習を楽しくし、同時に一人一人の子どもが読み取った物語の主題を確かめる学習となる。

ある児童がまとめたAという主題は、A（Aダッシュ）という読みの過程を経て導かれたのだということを確認する学習が大切にされなければならない。

復習のポイント

本講のポイントをまとめる。↓ノート整理・発展学習

今回読んでもらった「白いぼうし」に即してまとめをしてみようといいたいだろう。

この教材文は、巧みな伏線、色や香りの表現が効果的に用いられている。いわゆるファンタジー作品である本教材文は、その伏線に着目して読む学習をすると面白い。結末の「種明かし」からつながりを確認する、伏線を追うというように、徐々に、物語の仕掛けとしての伏線を読む目を養っていききたいものである。

具体的には、通読後、児童から「女の子が白いちようではなにか？」という意見が出ると予想され、それをどのように生かすかが、指導者の腕の見せ所となる。指導者として、「女の子が白いちようだとは、どこにも書かれていないね。でも、みんながそう思うのはなぜだろう。」

きつと証拠があるはずだ。その証拠を探していこう。」と働きかけたでしょう。

すると、子どもたちは、どのような部分を見つけ、発表するのだろうか。受講生諸君なりに推察し、ノートに列挙してみてほしい。そして、発言を生かして、深い読み取りにどうつなげるか、構想を記録しておくとういだろう。

〔六〕 理科や社会科にならないための説明文の授業

キーワード … 説明的文章、論理的思考力、すらすら音読、形式段落と意味段落、キーワード、要点、要約、接続詞（つなぎ言葉）、指示語（こそあど言葉）

予習のポイント

説明文を読む場合、何に注目させ、どんなことを学ばせるのかということについて、考えをまとめておく。

次の教材文「すがたをかえる大豆」を読む場合で考えてみよう。

すがたをかえる大豆

こなかん
国分 牧衛

わたしたちの毎日の食事には、肉・やさいなど、さまざまなきりょうが調理されて出てきます。その中で、ごはんになる米、パンやめん類になる麦のほかにも、多くの人がほとんど毎日口しているものがあります。なんだか分かりますか。それは、大豆です。大豆がそれほど

食べられていることは、意外と知られていません。大豆は、いろいろな食品にすがたをかえていることが多いので気づかれないのです。

大豆は、ダイズという植物のたねです。えだについたさやの中に、二つか三つのたねが入っています。ダイズが十分に育つと、さやの中のたねはかたくなります。これが、わたしたちが知っている大豆です。かたい大豆は、そのままでは食べにくく、消化もよくありません。そのため、昔からいろいろ手をくわえて、おいしく食べるくふうをしてきました。

いちばんわかりやすいのは、大豆をその形のままいたり、にたりして、やわらかく、おいしくするくふうです。いと、豆まきに使う豆になります。水につけてやわらかくしてからにと、に豆になります。正月のおせちりょうりに使われる黒豆も、に豆の一つです。に豆には、黒、茶、白など、いろいろな色の大豆が使われます。

次に、こなにひいて食べるくふうがあります。もちやだんごにかけるきなこは、大豆をいって、こなにひいたものです。

また、大豆にふくまれる大切なえいようだけを取り出して、ちがう食品にするくふうもあります。大豆を一ばん水にひたして、なめらかなるまですりつぶします。これに水をくわえて、かきませながら熱します。その後、ぬのを使って中身をしばらく出します。しばらく出したしるににがりというものをくわえると、かたまつて、どうふになります。

さらに、目に見えない小さな生物の力をかりて、ちがう食品にするくふうもあります。ナットウキンの力をかりたのが、なっとうです。む

した大豆にナットウキンをくわえ、あたたかい場所に一日近くおいて作ります。

コウジカビの力をかりたものが、みそやしょうゆです。みそを作るには、まず、むした米か麦にコウジカビをませたものを用意します。それと、しおを、にてつぶした大豆にくわえてませ合わせます。ふたをして、風通しのよい暗い所に半年から一年の間おいておくと、大豆はみそになります。しょうゆも、よくにた作り方をします。

これらのほかに、とり入れる時期や育て方をくふうした食べ方もあります。ダイズを、まだわかなくてやわらかいうちにとり入れ、さやごとゆでて食べるのが、えだ豆です。また、ダイズのたねを、日光に当てずに水だけをやって育てると、もやしができます。

このように、大豆はいろいろなすがたで食べられています。ほかの作物にくらべて、こんなに多くの食べ方がくふうされてきたのは、大豆が味もよく、畑の肉といわれるくらいたくさんのおいしいようをふくんでいるからです。そのうえ、やせた土地にも強く、育てやすいことから、多くのちいきで植えられたためでもあります。大豆のよいところに気づき、食事に取り入れてきた昔の人々のちえにおどろかされます。

(光村図書 国語 三年下)

一 理科や社会科にならないための説明文の授業

国語科の教科書には、植物や動物の生態について書かれてあったり、社会問題や歴史的な事柄について説明してあったりする文章が掲載されている。これを、説明的教材(説明的文章教材)、あるいは単に説明文と言う。例えば、「ありの行列」(光村図書 三年上)では、昆虫のアリがなぜ行列を

作るのかについて、ある科学者が実験を通してその謎を解明していく様子が紹介されている。この内容をしっかり読んでいくと、アリが行列を作る理由が理解できる。昆虫好きの子どもにとっては楽しい教材であろう。

では、アリが行列を作る仕組みを理解することが、国語科の時間の目的なのであるか。どちらかというとそれは理科の時間に学ぶ内容ではないだろうか。

今回は、国語科の時間に説明文を学習する目的とその方法について考えてみたい。そもそも理科や社会科の教科書の本文を読むことと、国語科で説明文を読むことの違いは何だろうか。

理科・社会は内容教科で、理科的・社会的事柄や事象などの内容そのものを学ぶことが目的である。それに対して、国語は技能教科で、説明文の学習により、論理的な「読み方」「考え方」「書き方」を身に付けることが目的となる。説明対象の定義、特徴、価値、効果などを言語でどのように伝達しているかに注目させるとよい。

二 説明文の指導

(一) 説明文指導の第一段階はすらすら音読

児童に音読をさせるとして、その基本は教師の範読に耳を傾けさせることである。範読を聞かせる中で、子どもたちに新出漢字の読みを教科書に書き込ませたり、耳慣れない言い回しなどに注意をさせたりしながら、文章そのものに慣れさせていく。そのように導き、子どもたち全員がすらすらと読めるようになることをめざす。

(二) 説明文指導の第二段階は段落分け

説明文では、文章の意味のまとまりごとに行が変わる。この一まとまりの文章を、形式段落という。形式段落は、始まりが一マス空きで書かれており、目で見てすぐに分かる。音

読の前に、一マス空いているところに、①②③と、段落番号を書き込ませるようにする。

(三)形式段落を三つのまとまりに

教科書に載っている説明文は、そのほとんどが三部構成(はじめ・中・終わり)によって書かれている。「はじめ」を「序論」、「中」を「本論」、「終わり」を「結論」と言ったりもする。

形式段落が①から⑩までであったとすると、内容を捉えつつ、例えば、「はじめ」が①と②、「中」が③から⑧まで、「終わり」が⑨と⑩、のように見つけさせる。三つのまとまりそれぞれ性格であるが、「はじめ」には、「今から、この話題について書きますよ」といった話題提示の文章や、「どうしてこのようなことが起こるのでしよう」といった問題提起の文章が書かれている。「中」には、話題に関する詳しい説明や、問題提起に対する答えが書かれ、必ず具体的な事実がいくつか述べられる。「終わり」には、「中」の部分で書かれていることをまとめたり、筆者の考えが述べられたりして、文章全体を締めくくることが多いようだ。

やってみよう 1

先の「すがたをかえる大豆」を使い、実際に三つのまとまりに分けられることを確認してみよう。さらに、「この説明文はどんな説明文か、一文で説明しなさい」という教師の問いかけで、「この説明文は、〇〇のことについて、〇〇を例にして説明してある文章です」のようにまとめてみる活動もしてみよう。

(四)説明文教材指導の第三段階は接続詞

小学校で学ばせるべき接続詞の種類を確認しておきたい。それは、次の六つである。

1 同じ内容を付け足す場合 (そして、それから、さらに等)

2 ある事柄を詳しく説明する場合 (たとえば、なぜなら、また等)

3 順序よく説明する場合 (はじめに、つぎに等)

4 ある事柄と逆の説明をする場合 (しかし、けれども、だが等)

5 説明したいいくつかの事柄をまとめる場合 (ようするに、このように等)

6 話題を変える場合 (さて、ところで、では等)

(五)説明文教材指導の第四段階は要点整理

具体的な例が書いてある「中」の部分は、分かりやすくするために丁寧な説明がある。その文章を簡潔にまとめること、つまり、短くすると話の中心が見えてくる。このことを、「要約する」という。

要約するためには、段落ごとの要点をまとめる必要がある。重要語句(キーワード)を見つけることにより、段落の要点が見えてくる。段落ごとの要点を書き出して大まかに整理し、文章全体で主張している内容を見出すことを、「要旨」をまとめるという。

やってみよう 2

キーワードは、段落の中で重要な語句であり、繰り返し出てくる言葉である。「ありの行列」(既出)の教材文を使い、キーワード探し、要点のまとめをしてみよう。

復習のポイント

本講のポイントをまとめる。↓ノート整理・発展学習

例えば、次の事柄など、まとめておくとよいだろう。

参考にしてほしい。

▽理科や社会科の教科書の本文を読むことと、国語科で説明文を読むこととの違いを説明せよ。

▽形式段落に分けたあと、三部構成や四部構成にまとめるときの基準について説明せよ。

▽要点をまとめる指導をするときのポイントの説明せよ。
 ▽説明文の単元では、並行読書として色々な図書を読ませる場合もある。また、発展・応用の活動として、パンプレットづくりや、教材文の中の問題点をめぐってディベートをすることなども取り入れられている。このような事例を調べてみるのもよいだろう。

七

書けない子でも書けるようにする作文の授業

キーワード： PISA型学力、日記指導、生活作文、行事作文、きらりと光る作文のワザ、推敲と添削、評価

予習のポイント

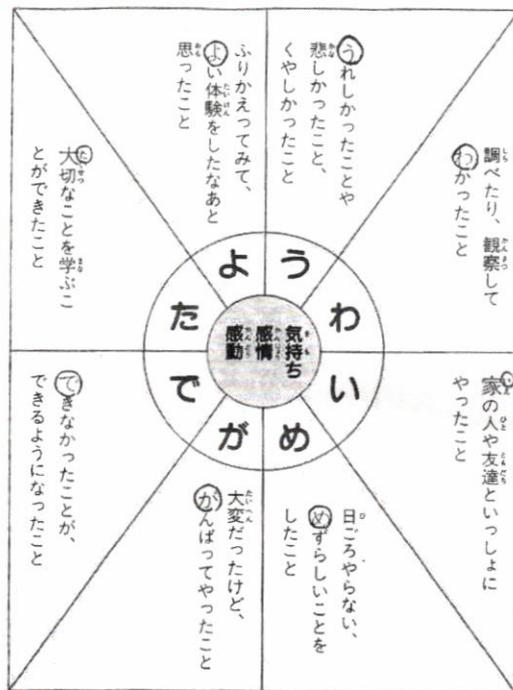
作文を書かせる場合、「先生、書くことがありません。」と言って来る児童がいるものである。どのように指導すれば、書けるようになるであろうか。かつて教わった先生の指導例など思い出し、指導のアイデアをまとめておこう。

次の資料A・Bも参考にして、児童が「書いてみたいな!」と思うようなアイデアを見つけてみよう。

日記や生活作文、口頭作文（話すことから始める作文）の道しるべになる資料である。

書くことが見つからなくて困ったときは、……

「うわい、芽がでたよ。」



日記は文字で写した心のスナップ写真

心のアンテナをびんとはって
 日々の体験や感動から
 いいテーマをつかまえて書きましょう

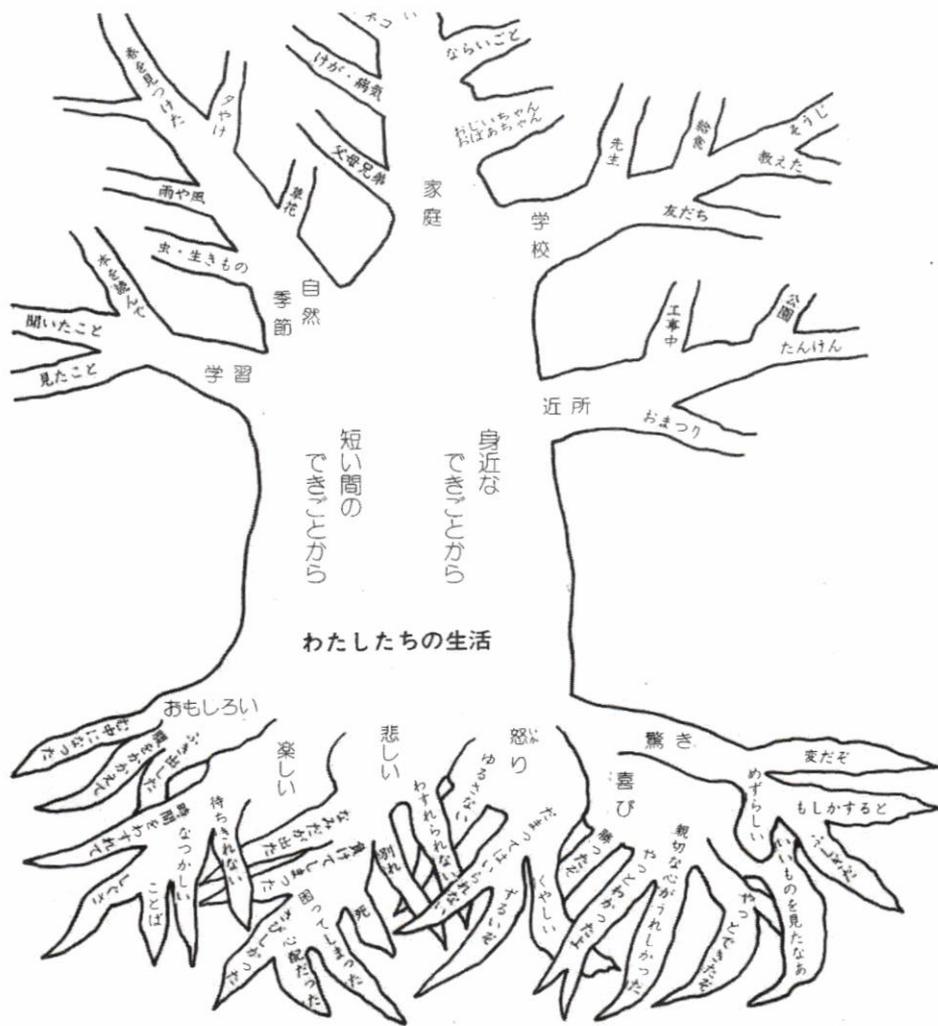
いつものこと
 どこでのこと
 だれとのこと
 なにをしたこと



きみは
 いくつ
 書いているかな

わたしたちの生活の木

書くこといっぱい
気持ちいろいろ



なんでもいらいんだよ
おはなしいっぱい
おはなしいっぱい
おはなしいっぱい

せんせい
あかね

せんせいと
おはなしいっぱい
しよつね

あく手
あつち
あつち

〈 以上、「作文と教育」誌より抜粋 ※ 同誌は附属図書館にもあります！ 〉

一 まず「書く」ことそのものが大事

作文に関して大切なことは、まず「書く」ことそのものである。

教師は誤字・脱字を指摘したり、ともかくABCをつけたりするのに躍起になりがちである。

しかし、よく考えてみよう。児童が何か書いてくれないことには、指導も評価も何もできたものではないではないか。PISA調査でも、日本の点数が低下した時、最も大きな原因は、自由記述問題の無答率だったそうだ。書かないことは点数がつかないのだ。「書く」ように仕向けるということが、作文指導の第一歩なのである。書いてこそ、評価もできるのである。

二 原稿用紙を渡して「はい、どうぞ」ではダメ

小学校の国語科の時間に、いきなり原稿用紙を配られ、「昨日の〇〇(行事名)のことを作文にしなさい」と言われた経験がなかっただろうか。「えー」と言いながら、とりあえず「楽しかった〇〇」と題名を書いて、「きのう、私はくをしました。」と書き始めたりしたことだろう。ところが、すぐそこで鉛筆が止まってしまふ。次は何を書こうかな、とモジモジしていると、先生がやってきて、「あら、まだそれだけなの」と言われ、何も返せない。このような授業では作文にマイナスイメージを植え付けるだけである。

工夫次第で、書く力はずくはずである。その指導法について、しっかりと検討していこう。

三 日記は作文のネタ帳としての役割を果たす

知つてのとおり、学校などで行事がある度に書く作文を行ってはいけない。書く力をつけるには、継続して書く活動をさせることが大切で、そこで日記が役立つこととなる。

スモール・ステップ法の重視、短作文(普通の、長めではない作文)で書く経験の尊重といった観点から提言したい。

以前は、宿題として日記を書くことが多かった。しかし、最近では、教師の多忙化が叫ばれるようになり、書かせっぱなしで終わる危険性も指摘されている。

確かに、毎日の宿題で日記を書かせるのは、児童にも教師にも負担が大きい。例えば月・水・金曜日は「日記の日」という具合に、一週間に二ないしは三回課すのが適当かと思われる。

教師がきちんと責任を持ってチェックできる体制で日記を書かせる。そうすると、タイトルにあるように、日記は作文のネタ帳としての役割を果たすようになるのである。それどころか、ある日や、何日かの日記を推敲したり、付け足しをしたりして編集すると、たちまちのうちに作文が仕上がるという可能性も出てくる。

四 日記指導とそのコツ

宿題にすると、どうしてもワンパターンな内容になったり、長続きしなかったりするケースが起きる。そこで、教師の工夫があるわけだが、自由題で書かせるだけでなく、教師から日記に書きたくなるような「テーマ」を与えるということも有効である。

子どもの自由だけに任せていると、どうしても出来事だけの日記になりがちである。例えば、次の四例のように、児童が書きたくなるようなテーマをともに考えて設定すると、書く意欲の向上につながる。

1 なりきり日記(物になりきって擬人法を意識して書く)

2 国語日記(国語の授業で面白かったことや分からないことを書く↓他の教科でもよい)

3 笑い話日記(自分の失敗談や家族の面白いエピソードを紹介する)

4 ありがとう日記（一日の中で友だちや家族に感謝したところなどを書く）

「キラリ日記のワザ」として、お褒めの書き方を提示する方法を編み出した教師もいる。使えるワザを、年表の形式にして残すのである。初期の段階では、自由に書かせる。ある期間を経て、日記の表現の中にキラリと光るものを見つけたら、翌日全員に紹介し、その後「キラリ日記のワザ」として、教室の適切な位置に掲示していくのである。

例えば、「いつ・だれが・何を・どうした」がしっかり書けている子がいれば必ずほめて、これを「キラリ日記のワザ1号」とする。日付も入れておく。会話文が日記の中にあれば、「会話を入れると日記がぐっと面白くなる」↓キラリ日記のワザ2号」というように、表現上の工夫を教師が見つけ、ほめることによって価値付け、全員が使える作文のワザとして一般化・共有化していくのである。

五 教科書の作文単元が日記の有効利用でより生き生きと子どもの日記そのものや「キラリ日記のワザ」から、一般の書くこと・作文の教科書単元で生かされる・応用できる技術を整理していくとよい。

「会話を入れる」や「5W1Hを使う」など、光る表現を使っていくのが一般的であろう。それだけでなく、書き手の思いを正しく相手に伝えるように、「読み返し」をして、推敲する技術も奨励したい。例えば、句読点の打ち方、段落替え・改行の一マス下げ、カギかっこの使い方、誤字・脱字のチェックなど、表記の形式面に注意を払うことの価値付け、ことある毎に伝えるとよいだろう。

やってみよう

次の二年生の男子が書いた作文の指導を考える。

以下の三つの視点から、どのように指導するか、アイディアを出し合おう。

さんかんび

二年 A

ぼくは、今日さんかんびがありました。算数のかけ算を勉強をしました。七の단을さいしよから言ったら分からなくなつてしひち二四と何とも言つたらみんながわらつたのでなきそうになりました。先生がいいんだよおちついてね。といったのでなかなかいでもんばりしました。いつもはすらすら言えるのにお母さんが来たからドキドキしました。帰ってお母さんといっしよ一のだんから九のだんまで言ったらまちがえずに言えたのでよかったです。

ア いい表現をほめる点

イ 表記面の改善点

ウ ↓ 誤字脱字や原稿用紙の使い方等

ウ さらに意欲づけの言葉を与えたら

みなさんが考えるところとして、およそ次のことが出るように思う。

ア 会話を取り入れて書いている。

イ 学校であったことと関連させ、帰宅後のことも書いている。等

イ 一段落構成でなく、複数の段落に分ける方がよい。

一番よいのは、終わりから四行目の「帰って…」のところを段落を変えること。

本文一行目の「ぼくは、」はなくてよい。

冒頭文は、「今日は、さんかん日がありました。」にするとよい。等

ウ なかないで、さいごまでよくがんばったね。Aくんのきもちが、よくつたわってきました。せんせいといっしょに、またれんしゅうしましょう。等

復習のポイント

本講のポイントをまとめる。↓ノート整理・発展学習

例えば、次の事柄など、まとめておくとういだろう。

参考にしてほしい。

▽先ほどの「さんかんび」という二年生の作文をもとに、

「小学校学習指導要領解説 国語編」第一学年及び第二学年の「書くこと」の解説と突き合わせて、さらにこのような指導をするとういのではないかという点を見つければ、ノートにまとめよう。例えば、「エ 推敲に関する指導事項」のところを見ると、書くことの表現過程に沿って、話題や題材の絞り方、事柄の順序、語と語及び文と文とのつながりの明確さなどを意識しながら、「文章を読み返す習慣を付ける」ことの大切さを強調している。また、書いた文を音読してみることも読み返す習慣を付けることにつながる、としている。「間違いなどに気付く、直す」ためには、語句の使い方などに注意しながら、一文一文を丁寧に読み返していく、読み返す際には、主語・述語のつながりや句読点の打ち方などの構文上の明確さや、長音、拗音、促音、撥音、助詞の「は」、「へ」及び「を」などの正しい表記、敬体や常体による文末表現の正しい使い方などに注意させることが大切だとしている点なども参

考になるはずである。

八 声に出して味わう古典の授業

キーワード …

伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項、昔話や神話・伝承、易しい文語調の短歌や俳句、長い間使われてきたことわざや慣用語・故事成語、親しみやすい古文や漢文・近代以降の文語調の文章、古典について解説した文章

予習のポイント

声に出して読みたい日本語（作品）について、あなたなら何を挙げるか、そのねらいなど、考えをまとめておく。

自分が好きな作品の具体的な箇所を挙げ、その理由を書いてみよう。

明治大学教授の齋藤孝は、その著『声に出して読みたい日本語』（草思社）で、「知らざあ言って聞かせやしよう」：歌舞伎の弁天娘女男白浪（白浪五人男）、「どっどど」：どどうど どどうど どどう」：宮沢賢治の『風の又三郎』、「祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響あり」：『平家物語』など、数多くの名文を挙げている。参考にして、自分でも過去に習った教材から発掘してみよう。

一 日本人としてのアイデンティティを重視

小学校で古典を学ぶ目的を理解し、指導の工夫を探りたい。小学校では、以前から平安時代等の短歌・江戸時代等の俳句・「附子（ぶす）」のような狂言や「寿限無（じゅげむ）」などの落語等が教科書に掲載され、それなりに古典に親しんできた。

加えて、平成二三年度からは、本格的に古典の指導が取り入れられるようになった。以前は中学校の教材であった「枕草子」「平家物語」等が、小学校の教科書でも見られるようになったのである。ここでは、小学校の古典の授業はどうあるべきかということを中心として、声に出して味わう古典の指導の意義について考えていきたい。

二 小学校で古典の指導が本格的にスタート

一・二年生では、昔話や神話・伝承などの本や文章の読み聞かせを聞いたり、発表し合ったりすることが取り入れられた。三・四年生では、易しい文語調の短歌や俳句について、情景を思い浮かべたり、リズムを感じ取りながら音読や暗唱をしたりすることや、長い間使われてきたことわざや慣用語、故事成語などの意味を知り、使うことを学ぶ。五・六年生では、親しみやすい古文や漢文、近代以降の文語調の文章について、内容の大体を知り、音読することや、古典について解説した文章を読み、昔の人のものの見方や考え方を知らることに取り組む。

小学校における古典の指導のポイントは、音読を中心に、たくさん作品を読み、音の響きや七五調のリズムを楽しむながら、内容の大体や昔の人のもの見方や考え方を知らることである。語句の解釈や古典文法、あるいは現代語文への翻訳などは重要でない。要は、古典嫌いの子を育てないように、楽しく授業し、より多くの作品に出会わせることである。

三 古典を言葉の学びにつなげる工夫

第一は、見せる工夫を取り入れることである。おおよそ、①から⑤まで考えられる。

- ①原文や現代語訳を大きく書いたものを提示する。
- ②絵巻物のように提示する。
- ③作品のイメージ（枕草子であれば朝焼けの空の映像）をス

ライドショーで提示する。

- ④イラスト等を使って分かりやすく解説する。
- ⑤動作化や劇化を取り入れる。

第二は、声・音声言語のメリットを生かすことである。次の五点が挙げられる。

- ①対話化などの掛け合い形式で読む。
- ②多人数による群読形式を取り入れて読む。
- ③台詞を工夫した演劇形式で読む。
- ④方言を取り入れて音読する。
- ⑤メロディやリズムなど、歌の要素を取り入れる。

四 実際の教材を見てみよう

ここでは、電子教科書の実際の中身を見て、学習のイメージを掴んでもらいたい。教室で提示するのは、五年生の古典学習の教材例（東京書籍版）である。みごとに子どもたちの興味を高める仕組みになっているのが分かってもらえると思う。

さらに、iPadにより、文部科学省のサイト中の『言語活動の充実に関する指導事例集』思考力、判断力、表現力等の育成に向けて『小学校版』（平成二三年一〇月、文部科学省）を開けて見てもらう。小学校五年の古文の音読を中心とした実践例は秀逸である。小さなことでもいいので、工夫点を見つけてもらいたい。のちに、小グループで交流するように時間を取るつもりである。

五 音読を大切に

出水市立出水中学校教諭である穂田美奈子氏は、伝統的な言語文化の学習において身に付けさせたい力を、小中学校の学習指導要領に示された指導事項やこれまでの先行研究を参考にしながら、次のように整理している。（「鹿児島県総合教育センター平成二四年度長期研修報告書」より）

- ① 昔話や神話などの読み聞かせを聞き取る力
- ② 易しい文語調の短歌や俳句について、リズムを感じ、音読・暗唱する力
- ③ 文語調の文章を音読する力
- ④ 文語のきまりや訓読の仕方を理解する力
- ⑤ 古典の文章の独特のリズムに気付き、味わう力
- ⑥ 現代語訳や語注などを手掛かりにして、作品の内容を理解する力
- ⑦ 作品に描かれた情景や登場人物の心情を想像しながら読む力
- ⑧ 作品を比べて読み、共通するものや違うものなどに気付く力
- ⑨ 時代背景を踏まえた上で古典を読み、社会や自然など、作品の世界を理解する力

これらのうち、特に小学校段階では、古典に慣れ親しむという観点から、とりわけ三番目にある「文語調の文章を音読する力」を大切にすることがあるだろう。

復習のポイント

本講のポイントをまとめる。↓ノート整理・発展学習
 例えば、今回の学習を踏まえ、次の「竹取物語」の教科書例を読み、効果的な指導のあり方をまとめておくとよいだろう。

竹取物語

今は昔、竹取の翁おきなといふものありけり。野山にまじりて竹を取りつつ、よろづよろづのことに使ひけり。名をば、さぬきのみやつことなむいひける。

その竹の中に、もと光る竹なむ一筋ありける。あやしがりて、寄りて見るに、筒の中光りたり。それを見れば、三寸ばかりなる人、いとうつくしうてゐたり。

【現代語訳】

昔、竹取の翁とよばれる人がいた。翁は、野山に分け入って竹を取っては、いろいろな物を作るのに使っていた。名前を「さぬきのみやつこと」といった。

ある日のこと、その竹林の中に、根元の光る竹が一本あった。不思議に思つて、近寄つて見ると、筒の中が光っている。それを見ると、手にのるぐらいの小さな人が、とてもかわいらしい様子ですわっていた。

【解説】

「竹取物語」は、千年以上も前に書かれた物語です。作者は分かっていません。この物語は、今は、「かぐやひめ」の名でも知られています。

物語の中の、現実には起こらないような不思議な出来事にくわくするのは、昔の人も、今のわたしたちも、同じなのでしょう。

【九】

討論や発表を楽しむ授業

キーワード：プレゼンテーション、ディベート、自己紹介、イメージマップ、KJ法

予習のポイント

子どもたちの日常生活における話し合い活動にはどのようなものがあるのか出してみる。それについて、国語科の授業ではどんな力をつけておくべきか、考えをまとめておく。

次の教材（光村図書二年下より）を参考にするとよい。

単元 すすんで考えを出し合おう 話す・聞く
みんなできめよう

「夕やけこやけ」のがっそう

話し合っつきめること

どんながっそうにするか。

・どんながっつきをつかうか。

・どんなくふうをするか

やくわり

・だれが、何をするか。

Cさんのグループは、はっぴよう会で、「夕やけこやけ」のがっそうをします。そのため、今、どんながっそうにしたらいかについて、話し合っています。

せとさんたちは、どのように話し合っているでしょうか。見てみましょう。

Aくん「今から、どんながっそうにしたらいいかを話し合います。」

Cさん「わたしは、秋にみんなでれんじゅうした、けんばんハーモニカをひきたいと思います。」

Dくん「ぼくは、ほかのがっつきも入れてみたいです。」

いろいろな音がするほうが、きく人が楽しいと思うからです。」

Cさん「どんながっつきがいいですか。」

Dくん「タンブリンや、トライアングルがいいと思います。」

Bさん「わたしは、歌も入れたらいいと思うんですが、どうですか。」

Cさん「わたしも、歌を入れるといいと思います。」

Dくん「それでは、がっつきは、けんばんハーモニカとタンブリンとトライアングルをつかう。歌も入れるというこ

とで、いいですね。」

▼話し合いをすすめている人はいますか。

▼しつもと答えはどれですか。

▼言っていることが分かりやすいところや、言い方がじょうずだなと思うところを見つけてみましょう。

▼あなたは、どんなところをまねしたいですか。

話し合うときは

・話し合いをすすめる人をきめる。

・考えたことをすすんで話す。

・話している人を見て聞く。

・さいごまで聞いてから話す。

・きかれたことに答える。

Cさんたちは、話し合いがおわった後、自分の話し方や聞き方についてふりかえりました。

Aくん「自分の考えは話せた。こんどは、友だちの話をしっかり聞けるようにしたいな。」

Cさん「聞いている人がうなずいてくれたから、話しやすかった。わたしもそうしよう。」

Cさんたちは、この後、やくわりをきめる話し合いをしました。
〈こんなことを話し合ってみよう〉

・はっぴよう会ですること・六年生をおくる会の出しもの・

クラスのお楽しみ会の計画

▼話し合いをしてみましよう。あなたのクラスでは、どんなことを話し合いできめますか。

▼話し合うときに、どんなことに気をつけたいですか。あなたのめあてを書きましょう。

一 現代はプレゼンテーションやディベートの時代

社会は目まぐるしく変わり、この十年ほどの間にプレゼンテーションやディベートなど、あるテーマについて調べた内容を口頭発表する形式の授業が小学校でも増えてきた。中でもプレゼンテーションについては、国語科以外の教科でも多く行われている。小学校の時から人を説得する力や討論する力を身に付けるために、教科書にも様々な教材が用意されている。

ここでは、プレゼンテーションやディベートのような言語活動で身に付ける力を理解し、どのように指導すればいいのかを考えよう。

調べたことを、模造紙に書いたり、パワーポイントを使ったりして発表（プレゼンテーション）する機会が増えてきている。高学年では討論をする単元が入っており、討論形態の一つとしてディベートに注目が集まっている。

これらの学習により、論理的な「思考力」、情報収集と取捨選択の「判断力」、分かりやすく発表する「表現力」が身に付くわけである。

やってみよう 1・自己紹介

次の手順で話し、あとで振り返りをしよう。

1. 私は、○○○○です。
 2. ○○から通っています。
 3. 自分にとって大切なものは、△です。
 4. なぜかと言うと、△からです。+α
 5. よろしく願います。
- ※3で具体物を出すならば、シヨウ&テルとなる。

二 プレゼンテーション学習活動

あるテーマについて、調べた内容を口頭で発表する表現活

動のことをプレゼンテーションという。基本的には、次のようなステップとなっている。

- ① テーマ設定（何について発表するか）
- ② テーマについての考察（テーマの中で特に興味のある事柄は何か）
- ③ リサーチ（テーマに関する資料を調べる）
- ④ 再構築（リサーチした内容を吟味して、発表に必要なものを取捨選択する）
- ⑤ 資料づくり（聞き手の理解を助けるために、目で見て分かる資料を作る）
- ⑥ 発表原稿づくり（資料に基づいて発表するための読み原稿づくり）
- ⑦ 発表練習（話し方・資料の示し方・簡単なスキットなどの練習）
- ⑧ パフォーマンス（本番）

三 ディベート学習活動

あるテーマについて、肯定派と否定派に分かれて討論する形式の話し合い活動のことをディベートという。

第一次は、個の考えを表出し合う過程で、「イメージマップ」を使った伝え合いをする。

第二次は、テーマに関する資料を収集し、それらを伝え合う過程で、「調べ学習計画書」を書いて伝え合う。

第三次は、情報を「分類・吟味・選択・関連」させ、論理を構築する過程である。その中でも、①集めた情報を吟味し、整理する（「調べカード」の伝え合い）段階、②情報を選択し、関連付ける（「ディベート立論マップ」を作成する）段階がある。

第四次は、ディベートマッチを行う過程である。①立論②質問③反論④最終弁論したのち判定、という流れが一般的。途中に作戦タイムが入る。（全体で四〇分程度）

やってみよう2・ミニディベート

二人組をつくる。後に示した立論原稿を読み、廃止を肯定する側か、廃止を否定する側か、どちらを担当するか決める。その後、次のように進める。

1. 肯定側の人はあえて否定側になる。その原稿を読んで主張する。同様に、否定側の人はあえて肯定側になり、その原稿を読んで主張する。

2. お互いの主張に質問や反論をしてみる。

3. ミニディベートが終わったら、お互いに感想を述べ合い、健闘をたたえ合う。

※指定の時間より早く終わった人たちは、振り返りをしておくようにしよう。

ディベートマッチの流れ

① 否定側立論タイム

② 肯定側立論タイム

★作戦タイム

③ 肯定側質問タイム

④ 否定側質問タイム

★作戦タイム

⑤ 肯定側反論タイム 否定側攻撃

⑥ 否定側反論タイム 肯定側攻撃

★作戦タイム

⑦ 否定側最終弁論

⑧ 肯定側最終弁論

自動販売機を廃止することに肯定側の立論

飲み物自動販売機は道路に置いてある冷蔵庫である。夏の炎天下、いつ来るかも分からないお客さんのために、自動販売機はジュースを二十四時間冷やし続けている。

日本中の自動販売機が使っている電力量は、年間七十八億キロワットにもおよぶ。これは、原子力発電所の原子炉一基が一年間に発電する電力とほぼ同じである。

ちなみに、日本の発電量の八十パーセントは火力発電である。その原料である原油のほとんどは輸入に頼っている。

だからこそ、日本は今すぐにも自動販売機を廃止して電気と資源の節約をすべきだ。

自動販売機を廃止することに否定側の立論

自動販売機を廃止すれば、自動販売機の製造会社、缶ジュースの製造会社、そして、消費者の三者が困る。

例えば、ある自動販売機製造会社は、売り上げの約半分が飲料用自動販売機である。廃止すれば、その会社はたちまち経営が苦しくなるだろう。

また、缶ジュースの自動販売機での売り上げは、年間三兆円である。そんなに売り上げの多い販売方法をなくしてしまうと、缶ジュースの製造会社はとても困る。

それだけではなく、缶ジュースを買う私たち、つまり、消費者全体が困る。

だから、自動販売機を廃止してはならない。

復習のポイント

本講のポイントをまとめる。↓ノート整理・発展学習

例えば、次の事例を調べ、大切な点をまとめておくかどうかとよいだろう。

▽インターネットで光村図書のホームページを開き、光村コミュニティ「わたしの授業」に入る。そして、六年の事例である「生き物はつながりの中にくプレゼンテーションで自分の考えを伝える」を見る(読む)。優れている点・問題点などを整理してみるとよいだろう。

一〇

漢字指導は国語科指導の「いろは」の「い」

キーワード：漢字学年配当表、筆順、部首、とめ・は

ね・はらいなど、漢字ドリル、漢字練習帳

予習のポイント

漢字などの文字を確実に習得させることについて、あなたが感じてきた授業での問題点や家庭学習（宿題）の在り方など、考えをまとめておく。

一 教育漢字は セン・ロック だ！

小学校六年間で学ぶことになっている漢字は一〇〇六字。各学年で学習すべき「配当漢字」で、読むことはその学年で、書くことは次の学年までに習得することになっている。

さて、セン・ロック、つまり一〇〇六文字も教えるのは大変だろうか。一年間の授業日数は約二〇〇日だ。六年間では一二〇〇日。一日一文字指導したとして、六年間ならば…、そう、全て教えることができる計算に。

二 現行の国語教科書で、漢字学習の単元を見てみよう

では、小学生たちは、国語教科書でどのように漢字を学習するのだろうか。講義者が電子教科書で示すので、気づいたことをメモしておこう。

（メモ）

三 漢字ドリル・漢字練習帳も重要アイテム

受講生の皆さんも、漢字ドリル・漢字練習帳に随分お世話になってきたことだろう。

漢字ドリルは、カラフルだし、イラストや豆知識も載せてあり、それはそれでいいとしても、あの味気ない漢字練習帳の存在は…。宿題で、新しい漢字を十回あるいは一行のマス全部に書いてくることが、などと言われたことがあるだろう。それで身についたのだろうか？

いやいや。苦痛だけしか残らなかった可能性も…。無意味な繰り返し練習からの脱却を図らねばならない。繰り返し練習がいけないと言っているのではない。意味のある反復練習ならば、確実に身につくのである。

漢字を書く学習とは、読み方、意味、なりたちや字の形、文章中での使われ方を知ると、俄然記憶に残るものだ。そのためにも、教科書の漢字単元でしっかり教え、漢字ドリルをこまめに使わせていく指導をしたい。

また、宿題で漢字練習をさせたならば、提出された漢字練習帳にしっかりと目を通し、花丸をつけてあげたり、褒め言葉やアドバイスを書いてあげたりして、ぬくもりのある評価をしてあげよう。

四 美しい字を書かせる、でいいのだろうか？

漢字指導の基本として、①筆順、②部首、③とめ・はね・はらいを挙げることができる。

はやく、効率的にということを求められる世の中だが、じっくり、丁寧に取り組ませることが肝要である。つまり、美しく、綺麗に書く、ということではないのである。丁寧に書く、が合言葉である。

筆順は、整った字を書くためのコツ。それを覚え、それに従って書かせる。部首の確認も忘れない。それは、あとになって役に立つ。「さんずい」の漢字を集めてみたら、そう、

水に関連したもののばかりだと子どもは気づくはずだ。とめ・はね・はらいに気をつけさせる。線の長い・短いを間違えないようにさせる。そうすることで、子どもたちは新しい漢字を受け入れていくのである。そうやってこそ、練習学習に向かってくれるはずである。

ちなみに、宿題では、漢字ドリルの「1ページ程度がよい」とベテラン教師たちは言っているようである。

五 色々の技術や知識を持つ

子どもが漢字を読み書きできるようにするためには、学習方法や、活用のさせ方の指導技術が必要となる。

例えば、「空書」↓「そらがき」を覚えよう。空書とは、腕・手・指を使って、大きな動作で空中に文字を書くことだ。筆順は、先にも触れたように、昔、筆で漢字を美しく書く際の効率的運筆法としてできたもの（右利き用）。その筆順を、教科書や漢字ドリルの解説だけでなく、教師によるダイナミックなパフォーマンスとしての空書で伝えようではないか。

部首を確認する学習。これは、ともすれば機械的な説明に終わり、効果を上げない場合がある。覚えていようで覚えていないのが漢字の部首。興味をくすぐる指導とは…。一例を挙げよう。単発でやっていると、それこそ味気ない。そこで、かためて、つまりグループピングして教えることを提案する。次の漢字を見てもらいたい。

一、二、三、四、五、六、七、八、九、十。

さあ、受講生の皆さん、全部の部首を言えるだろうか。最初の一つ、二つは教えてあげ、あとは子どもに推測させる。子どもは必死になって考えること請け合い！（答は、復習のポイントの後ろに。）

さあ、自信をなくしてはいけない！ 疑問に思ったら、すぐその場で調べよう。まさに、「イマ」が大事。その、「マメ」さが、差のつく指導技術を生むのである。

復習のポイント

本講のポイントをまとめる。↓ノート整理・発展学習
例えば、次の事柄など、まとめておくとよいだろう。
参考にしてほしい。

▽漢字を使いたくなる「日記」のテーマはないだろうか。
お坊さんが唱える「お教」を漢字だけで作ってみさせろ。「ミニ漢詩」に挑戦してみさせる…。皆さんも色々アイデアを出し、指導計画を作成してみるとよいだろう。

部首クイズの解答

- | | | | | | |
|---|---|-----|---|---|------------------|
| 一 | ： | いち | 二 | ： | に |
| 三 | ： | いち | 四 | ： | くにがまえ |
| 五 | ： | に | | | |
| 六 | ： | はち | | | （または、はちがしら） |
| 七 | ： | いち | | | |
| 八 | ： | はち | | | |
| 九 | ： | おつ | | | （または、おつによろ、つりばり） |
| 十 | ： | じゅう | | | |

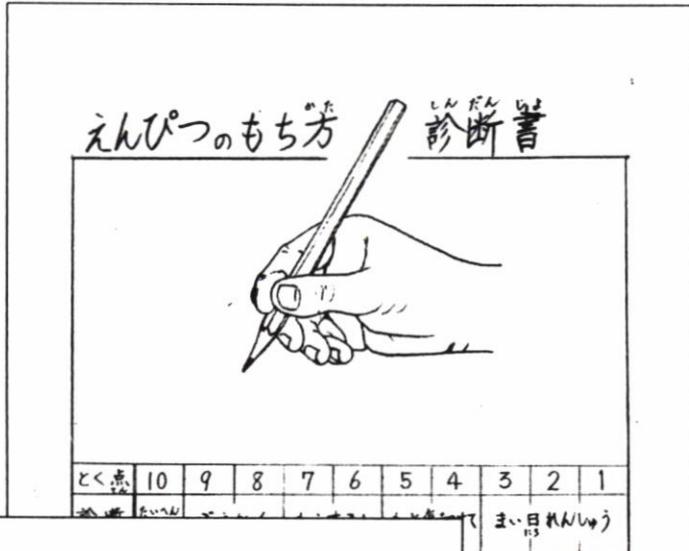
一 一 字の形と書く速さを意識する書写の授業

キーワード 美術（書道）でなく国語（書写）である、硬筆と毛筆、横画・縦画・はらいなど、始筆、運筆、鉛筆や筆の正しい持ち方、習字道具やその手入れのしかた

予習のポイント

文字を書くということ（書写の意義）について、また、逆に、もし国語科で書写の学習をしなくなったらどうなるのかということについて、考えをまとめておこう。

「えんぴつのもち方 診断書」



もし、このような指導を教師が全くしなくなったら…。その先には恐ろしい結果が待っていると、誰しも想像がつくのではないだろうか。

◎では、書写指導の「いろは」の「い」として、鉛筆の持ち方を取り上げよう。

えんぴつのもち方 診断書の書き方

とく点	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
診断	たいん	たいん	たいん	たいん	たいん	たいん	たいん	たいん	たいん	たいん
しん	だん	よい	ごうかく	もうすこし	ほとんども	まい	目れんしゅう			

平成29年 月 日 ()
 () さんへ

- えんぴつ の じくが おやゆび と ひたさしゆびの つげに きているので、えんぴつが 出すぎています。
- 力が はいりすぎて、ゆびが 白く なっているよ。

() 小学校 えんぴつのもち方 科 ()

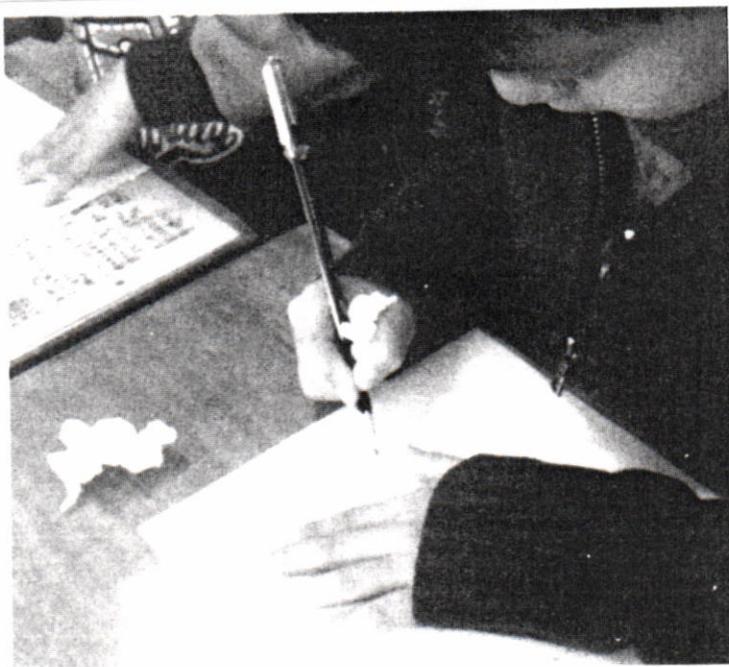
科 ()

ここに取り上げた方法によって、丁寧に指導してこそ、子どもたちの書写の能力がぐんぐん伸びるのである。

「えんぴつのもち方 診断書の書き方」
 診断のポイントや、書き方の例が示されています。

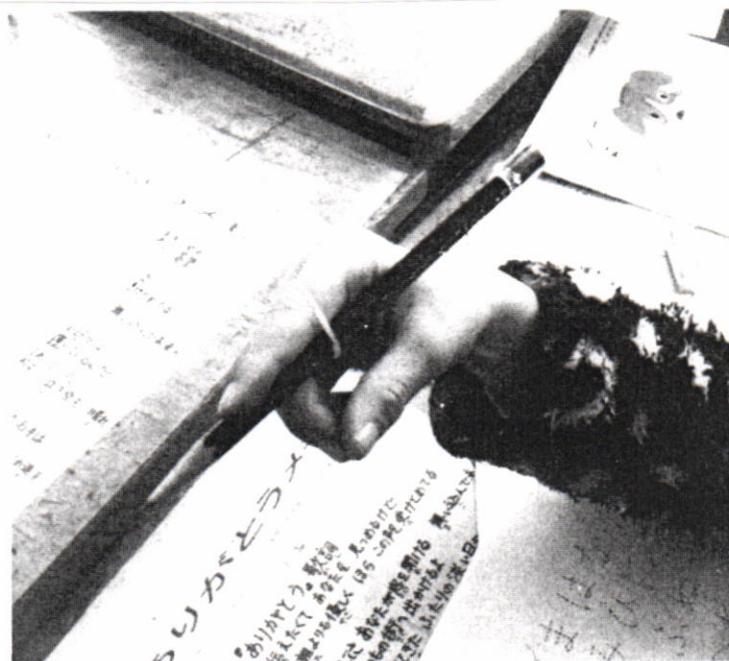
ちょっとした工夫

その①「ティッシュ丸める法」



ちょっとした工夫

その②「輪ゴム法」



折径
(折りたたんだ全長)

折径 2.5cm (JIS規格
で#8) くらいの輪ゴム
が適している。

では、せっかくだから、前二ページの解説をしておこう。低学年のうちに、筆記具の正しい持ち方を身につけておくことは、書写活動の基礎を養う上で重要となる。ここに、工夫することによって、めきめきといい字が書ける指導方法がある。紹介しよう。

まずは、児童の鉛筆の持ち方の実態を知ることが大切である。具体的な方法としては、児童一人一人が鉛筆で線をなぞる（文字を書くのもよい）姿を、教師がカメラで撮影していくというものである。一人当たり数秒の撮影時間であれば、三分から四分でクラス全員の様子を記録することができる。

次は、先ほど紹介した「えんぴつのもち方診断書」と「えんぴつのもち方診断書の書き方」の出番である。この診断書を使いながら、児童は相互に医者と患者になり、相手の筆記する姿を見て評価したり、見られていることを意識しながら鉛筆を持つ体験をしたりする。このとき、日常の実態を知るために、一番持ちやすく、書きやすい握り方を診断してもらうようにする。

診断をする児童は、握り方がよく見えるところに移動し、診断書に、正しい位置になっていない指や手の部分に×印でチェックを入れ、改善点を書き込む。教科書の写真や診断書のイラストとの違いを見つけて、点数制で評価する。

ここからは、正しい持ち方で書く指導となる。そうするため多くの補助具が市販されているが、お金をかけることなく、身の回りのもので代用する方法が以下のものである。その一つ目が、「ティッシュ丸める法」だ。教科書や「えんぴつのもち方診断書」に示されているとおり鉛筆を持つと、人さし指と親指のつけ根に空間ができる。この空間が必要な

のだが、多くの児童が、親指のつけ根に鉛筆の軸を置いてしまうので、そこにティッシュを丸めて詰め込み、鉛筆の軸が手前に倒れないようにする。児童の手の大きさに合わせて、適度にティッシュをちぎり、「ティッシュだんご」の大きさを調節する。（ティッシュは柔らかくて、児童に好評。以前、消しゴムをはさむ方法もあったが、硬い感触が気になり、集中力をそこなう結果が多かったようである。）

もう一つが、「輪ゴム法」である。正しい持ち方をしていると、鉛筆、人さし指の順に輪ゴムを通して、人さし指の第二関節と第三関節の間にまではめ込む。この方法は以前からあり、自然な形で書ける一つの方法である。ただ、輪ゴムは、折径二・五センチメートルくらいのものが理想で、折径六センチメートルくらいの一般的な大きさのものは、二重にしなければできないので児童には扱いが難しく、要注意。

おかしなもので、「ティッシュ丸める法」や「輪ゴム法」を使っていると、以前は寝たような状態だった子どもたちの鉛筆の軸が、しっかりと立つようになる。と、彼らの背筋もぴんと伸び、姿勢までよくなるようである。では、留意点を。

唱えるだけでは上達しない。

見ているだけでもいけない。

具体的な解決法を示すこと。

繰り返し練習し、継続できる機会と時間を確保して。

岡もこうしているうちに、小学校教員時代の記憶がよみがえってきた。身体の使い方の面である。

鉛筆を持たない手が遊んでいてはいけない。

その手でノートの下部分を軽く押さえると体も安定。

最後に目がノートに近すぎないかチェック。

眼とノートの間は三〇センチメートルくらいあけて。

少なくとも筆箱が一つ入るくらいはあけて。

一 書道と書写の違いは？

書道は、高等学校の芸術科の内の一つになる。

書写は小学校・中学校の国語科で、「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」に位置づけ、さらに「書写に関する事項」として、計画的・継続的に指導されるものである。

二 平仮名は、小学校に入る前に教えるべきか？

絶対してはならないということではないものの、例えば体系的な教育活動として就学前の段階で教えることについてはNoである。理由は、小学校の国語科の授業内で（それも一年生の時に）責任を持って教えるからである。一・二年生の時期に繰り返し、根気強く、しつかりと丁寧に指導する内容である。繰り返すが、代表的なものは平仮名であるが、片仮名も漢字なども、「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」の「文字に関する指導」で、計画的・継続的に指導されることになるのである。

三 平仮名の「い」を上手に書かせるには？

あなたが一年生の児童に指導するとして、どのような言葉かけをすればよいか、考えてみてほしい。もちろん、国語科の教科書・書写の教科書に従って教えるということは含むが、それらを使用しない他の指導場面でのこととして考えてみてほしいのである。以下、二つの例を挙げてみる。それらをヒントとして、皆さんもアイデアを出してみよう。

一つは、身体、それも両手を使う方法である。「ほっぺに両手を当てて。」「はい、その両手の形は？」と問い、ゆるやかにカーブした両手の形に注目させる。そして、「その形のように書いてみよう。」と導くのである。

もう一つは、字母（じぼ）を意識させる方法である。現在の所、「い」の字母としては「以」を想定するのが一般的であると考ええる。「以」の形を徐々に崩していく（板書あるい

は掲示資料などで示すとよい）と、「い」の形になると子どもたちに気付かせる。

皆さんはどのような方法を考えるだろうか。子どもたちにとって楽しく、印象に残る指導をしていきたいものである。

四 「永字八法」（えいじ はつぽう）を使おう

今に始まったわけではなく、古来日本には、毛筆で文字を書くにあたっての事前トレーニングとして、この「永字八法」があった。現代においても、子どもたちに継承するに値するものであると考える。

基本として練習する筆遣いとして、①点、②横画、③縦画、④はね、⑤右上がりの横画、⑥左はらい、⑦短い左はらい、⑧右はらい、が挙げられている。

より専門的に説明すると、上記のそれぞれが以下に対応する。①側（ソク）、②勒（ロク）、③努（ド）、④趯（テキ）、⑤策（サク）、⑥掠（リヤク）、⑦啄（タク）、⑧磔（タク）。もちろん、硬筆学習の事前トレーニングとしても使える。

五 指導例を検討しよう

次ページからの資料となるが、松本健作氏の提案は、皆さんにとって参考になる点が多いと思う。アイデアあふれる実践。いい点をまねながら、皆さん自身も新たなアイデアを創出していただきたいと考える。

復習のポイント

本講のポイントをまとめる。↓ノート整理・発展学習

例えば、次の事柄など、まとめておくとよいだろう。参考にしてほしい。

▽先ほどの松本先生の例を参考に、「小学校学習指導要領解説 国語編」の書写の内容も確かめつつ、さらにこのような指導をするとよいのではないかとということもノートにまとめよう。

硬筆指導の工夫(中学年編)

毛筆指導を硬筆に生かす工夫

元静岡市立服織小学校校長

松本健作



1951年静岡県生まれ。静岡県書写書道振興会副理事長、前静岡県書写書道教育研究会長。県内の小・中学校や書道教室で講師を務める。光村図書小学校「書写」教科書編集委員。

今号より、小学校「書写」教科書編集委員の松本健作先生に、硬筆指導について、三回にわたって連載をしていただきます。

松本先生は、子どもたちが意欲的に書写に取り組めるようさまざまな工夫をされています。

(光村図書 小学校 国語教育相談室 No.173 2016.9 24頁)

はじめに

小学校の硬筆指導は、鉛筆が主流ですが、フェルトペン、ボールペンなど硬筆

の筆記具は多種多様です。今回から始める「硬筆指導の工夫」では、学校生活や日常でいちばん多く使用している鉛筆を核にして、学習指導要領に示されている筆記具を選ぶ活動も取り入れながら(時には毛筆も)、硬筆の指導法を考えていきます。

指導は形から入る、ということをよく聞きますが、姿勢のことや鉛筆の持ち方ばかりを厳しく指導しても、なかなか身

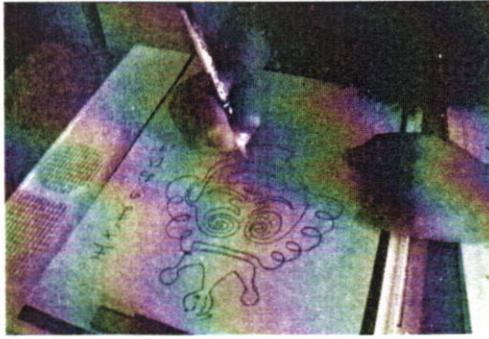
につくものではありません。本連載では、子どもに興味をもたせる授業を展開することで、正しく文字を書くこととする意識を高め、姿勢・執筆の改善につなげるとを旨とします。

今回は三年生を例に、「毛筆指導を硬筆に生かす工夫」についてお伝えします。学習指導要領の「指導計画の作成と内容の取扱い」にも示されているとおり、「毛筆を使用する書写の指導は硬筆による書写の能力の基礎を養うよう指導」すべきです。しかし実際は、今日は毛筆、次週は硬筆というように、硬毛を分断した指導をしていることが少なくありません。そこで今回は、毛筆と硬筆を関連させて

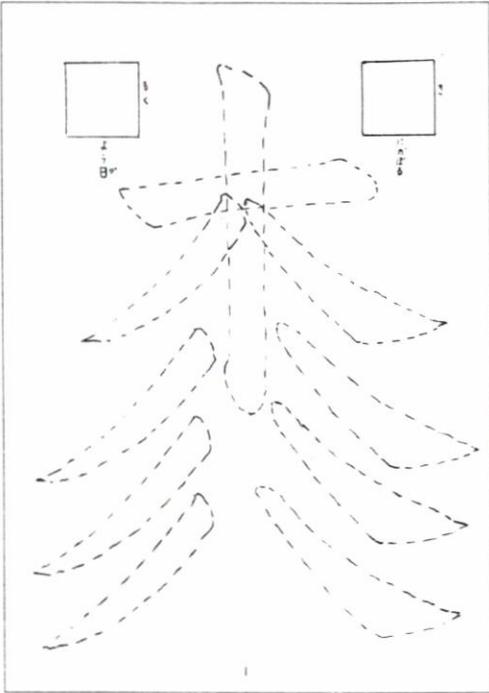
学習することで、左右の払いを習得していく事例を紹介します。毛筆が始まる三年生のときから、硬毛の関連をしっかりと図っていきましょう。

事例1 「王さまのおひげ」で左右の払いを習得する活動

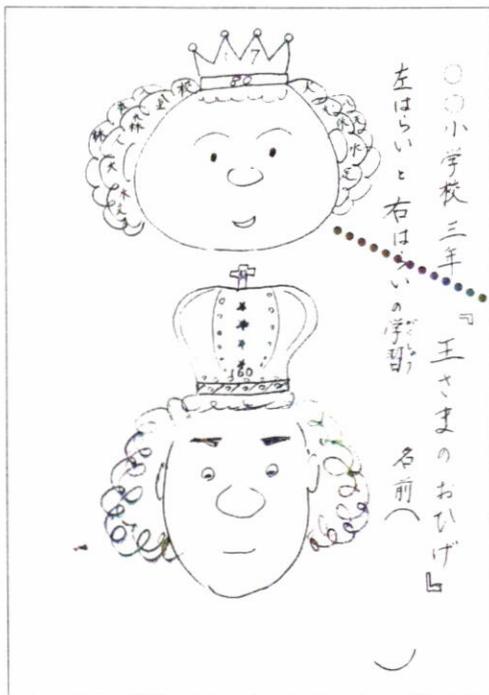
一時間の授業の中で、毛筆と硬筆を同時に指導する事例です。毛筆と硬筆の切り替えが素早くできるよう、ここでは、毛筆・硬筆両用の両面下敷き(毛筆用下敷きの裏が硬筆用になっているもの)を



▲※1 ワークシート①に、鉛筆でひと筆書きをする児童。



▲※2 ワークシート②



▲※3 ワークシート③

使用していますが、両面下敷きが入手できない場合は、毛筆用の下敷きの下に、硬筆用の下敷きを重ねるという方法でも実践可能です。

(1)黒板に「王さまのおひげ」と書きます。児童は、何が始まるのだろうかと思議そうな顔をし、授業への期待感を膨らませ、教師の次なる言葉や板書に注目します。

(2)次に、教科書22・23ページ（課題文字「木」を開きます。「王さまのおひげ」を書くことで、「木」の左右の払いの書き方を学習することが本時の目標であることを伝えます。

硬筆用の下敷きを用意させ、書写の準備運動として、ワークシート①を使い、鉛筆のひと筆書きをさせます（※1）。その際、左右のひげの先端がとがっていることを強調しておきます。

(3)ワークシート②（※2）の左上のますに、鉛筆で「木」を書きます。左右の払いの先がとがっていることを確かめるため、この後、毛筆で学んでいくことを伝ええます。そして、ワークシート③（※3）を配ります（下敷きは毛筆用に替える）。

(4)「木」の左右の払いは、王様のおひげに似ています。今度は毛筆（小筆）で、二人の王様に似合ったおひげを書いてあげましょう」と投げかけて、小筆でひげ

を書かせて、左右の払いの感覚をつかませます。

ひげの書き方の例（※4）にあるように、くねったひげでもOKということ自由に書かせます。書いたら、隣どうしでひげの先端がとがっているか確認し合いい、相互に批評します。

を書かせて、左右の払いの感覚をつかませます。

ひげの書き方の例（※4）にあるように、くねったひげでもOKということ自由に書かせます。書いたら、隣どうしでひげの先端がとがっているか確認し合いい、相互に批評します。



▲※4 ひげの書き方の例

第1学年の配当漢字80字のうち、左右の払いを含む漢字17字が、王様の髪の毛の中に書かれている。楽しみながら、既習漢字を意識させる工夫。



▲※5 ワークシート②を使用して、払いの練習をする児童。

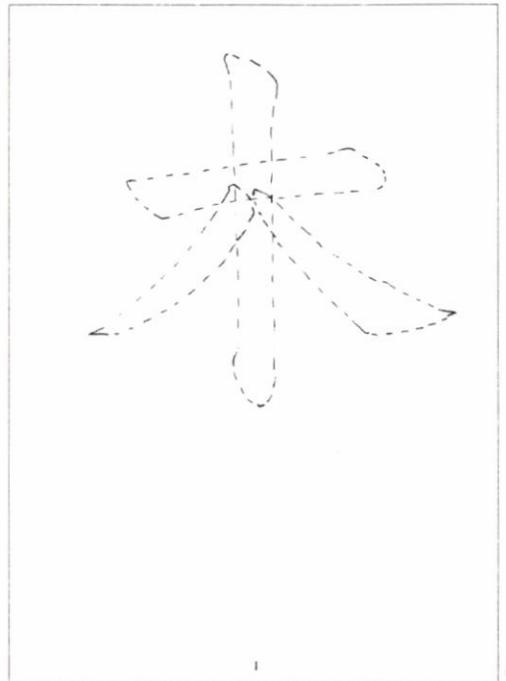
(5) 王様のおひげの書き方を全員で確認するために、数名の児童に黒板の前に出てもらい、水書板で再現させます。

左のひげも右のひげも、止まることなくササッスツと書くこと、先端をとがらせて書くことができているかを確認めたら、ワークシート②を使用して、払いの書き方を練習します(※5)。

(6) 教科書で、「左払い」「右払い」という用語を確かめ、左右の払いの書き方の違いを確認します。

〈左払い〉

・途中で止まらない。



▲※6 ワークシート④

・なめらかにサツと書く。
・始筆からだんだん筆圧をなくして細くなっていく。

〈右払い〉

・徐々に筆圧を加える。
・第一画の横画の終筆の真下あたりでいったん止まり、その後徐々に力を抜いて右の方向に払うように筆を運ぶ。

(7) 毛筆で「木」を書くときの基準(気をつけること)を話し合いで確かめます。

※授業終盤のまとめ書きの評価は、この基準をもとにするので、児童にも分かりやすい表現にします。

【基準】

① 左右の払いは、先端を細くする。

② 左右の払いは、筆圧に注意しながら払いの方向に気をつけて書く。

③ 右払いは、軽く止めてから右の方向に払う。

(8) 基準①②③に気をつけて「木」を毛筆で書きます。

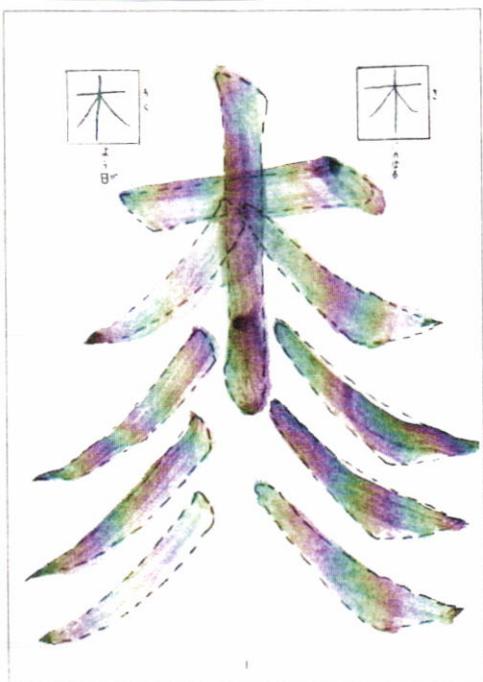
・かご文字になっている「木」(ワークシート④(※6))に、左右の払いが点線の枠の中に入るよう、筆圧に注意しながら書きます。

・ワークシート④を使用した後、半紙に一〜二枚書いたら(※7)、前後左右の友達と相互に批評し合い、次に書くときの留意点にします。



▲※7 ワークシート④を使用した後、半紙に「木」を書く。

◀※8 左上の「木」は、授業の最初に書いたもの。右上の「木」は、まとめ書き。左上の「木」に比べて、右上の「木」は払いが意識されている。



(9)下敷きを硬筆用に替えて、まとめ書きをします。ワークシート②の右上のますに鉛筆で「木」と書き、最初に書いたもの(左上のます)と比べながら、左右の払いの違いが表現されているか確かめます(※8)。

※時間があれば、左右の払いが連続する漢字を練習したり、プリントにして家で復習したりすると定着度は高まります。

(10)評価は、(7)の【基準】に沿って、授業の終わりに、本人がするか、隣席の友達どうしで行うと効率的です。

※評価の基準がはっきりしていれば、教師が評価するよりも、児童どうしでの評価のほうが関心度は高まります。

事例 ②

ひと筆書きで、 筆記具(鉛筆・小筆) に慣れる活動

国語科に位置づけられる書写は、技能教科の一つでもあります。道具に数多く触れ、道具を使いこなし、道具を正しく扱うことに慣れた者が上達の道を歩んでいきます。児童が無理なく道具を使いこなせるようにするために、次のような活動をします。

(1)ワークシート⑤に、鉛筆でひと筆書きをします。その際、かかった時間を計ります。

(2)小筆に持ち替え、(1)で使用した用紙に墨でひと筆書きをします。

※(1)と(2)の所要時間を比較すると、ほとんどの児童が鉛筆よりも小筆のときのほう



▲※9 ワークシート⑤に、鉛筆と小筆でひと筆書きしたものを。

が早く終了します(※9)。

この活動で注目したいことは、小筆を素早く動かそうとすると、垂直に近い角度で筆を握るようになるということです。小筆の穂先で線をたどっていくので、自然に筆の軸が立ってくるわけです(※10)。姿勢や執筆の正しいあり方を身につけるには、正しい状態をより長い時間維持することです。とかく、文字の組み立て指導や基本点画の書き方がかりが課題視されてしまう書写ですが、技能習得のいちばんの基本は、道具(鉛筆や筆)に慣れ、一体感をもって学習に臨むことです。三年生になり、硬筆と毛筆を利用して文字を習得していくこの段階では、今以上に姿勢や執筆にこだわった指導が重要になります。低学年のときよりも骨格、体格がしっかりしてきた学齢期だからこそその重点指導です。



▲※10 筆の軸がしっかり立っている。

キーワード：個人差の把握と指導、三段構えの作戦、

活動時間の感覚、できる子には別メニューも、個別指導コーナー、机間巡視の方法、グループ分け、伝え合いの計画

予習のポイント

国語科の、例えば、音読の学習活動に取り組ませる場合、一斉指導と個別指導で扱うとよい内容はどのようなことになるか、考えをまとめておく。

一 個人差の把握と指導の仕方について

先ほどの「予習」の内容と関わらせると、一斉指導では、当然のこととして「一斉音読」即ち「斉読」をさせることになる。教師には全員の声が把握できないので、その面での指導はできにくい。できるとすれば、姿勢だとか、口形の指導ぐらいである。

個別指導では、もつと指導のバラエティが広がっていく。例えば、ペア学習として、隣同士で音読を聞き合い、お互いにいいところやもつとこう読んだ方がいいところを伝え合わせる指導が考えられる。教師があるペアに張り付いて、子ども同士の伝え合いが終わった時点で、教師なりの指導助言をすると、さらに子どもはプラスの学びとなる。

そこで、今一度先ほどの「斉読」の指導に戻ってみよう。子どもたちだけに読ませ、教師が机間を巡り、個々の声を聞いてやれば、その都度その子に応じた指導ができる。

つまるところ、指導形態を問わず、個別の状況が把握できた時、それを受けて何らかの個別指導ができるのである。個人個人の読みの力は異なるので、その実態に応じた言葉かけが、子どもの人数分だけできることになる。個人差は、当然

生じる。決していけないことではない。それを的確にとらえ、今のレベルよりも伸びるように、伸ばしてあげるように、背中を押してあげるような言葉をかけることが大切である。

二 三段構えの作戦を

三段構えの作戦とは、次のABCの内容である。

A 学習活動にかける「時間の感覚」を日頃から持たせる(5分)の種類の感覚を持たせることである。時間感覚を身につけるということは、子どもだけでなく、教師にも必要なことである。子どもたちの学力を見極め、適切な難易度の学習課題と所要時間を設定する力である。何度も取り組ませる中で、初めは時間内にできなかった子が多くても、だんだん時間内にできる子が増えてくる。大切にしたいことは、時間内にクラスの全員が自分の考えをまとめるという課題をクリアし、皆で交流する学習への準備が整ったという成就感を味わわせることである。苦手な子でも頑張ればできるであろう時間設定をし、なおかつ、簡単にできしてしまう子が手持無沙汰にならない工夫を講じるようにすれば、このAの項目はクリアできる。

B はやく活動をすませる子には別の活動を用意しておく。個々に考えを作らせた後は、全体での伝え合い・交流に進む場合が多い。従って、はやく活動をすませた子には、「分かったことは何か」「自分が考えた道筋」を、言葉だけでなく、表や図などを用いて説明できるようなノート作りをさせる。じゃあ、君が考えた筋道を後で説明してもらおうから、ノートにまとめておいてね」のような賞揚の言葉と指示を出す。後の発表でも使えるので、本人にとっても、その他の子にとってもプラスになるのである。

C なかなか活動が進まない子には特別なヒントを与える。もちろん、そういったタイプの子には、具体的な支援が

いる。「○段落から筆者の考えを抜き出して線を引く」活動では、しゃがんで優しく「一緒に読んでみよう。」から始め、ヒントを与えたり、「ひとりで引けそうかな。最初は先生と一緒にやってみようか。」などと言ったりして、徐々に高めていくとよい。このような児童が複数名いる場合は、「個別指導コーナー」を設けて対応する。

三 机間巡視を行う際のポイントを押さえよう

およそ、次の点を念頭に置くようにしよう。

- ・個々の様子を観察し、遅れている子には指導や支援を
- ・全体の進み具合を観察し、必要に応じて全体への助言を
- ・あらかじめ効率よく個別指導していく計画を立てておく
- ・考え方や表現の違いを分類し、グループ分けをしておく
- ・(前項を受けて)全体での伝え合いの計画を立てておく

四 事例検討①

書けない子どもはどのようなパターンで書けないのか、予想される実態を挙げてみよう。

- ・学習意欲がない場合や、集中することができないために、他のことをしている
- ・何を書いているのか、問いの意味が分かっていないために、鉛筆が止まっている
- ・書いてはいるのだが、書いていることがあまりにも問いとかけ離れている
- ・書いては消し、また書いては消しして、前進がない

このようなタイプの子たちに、具体的にどのような指導・支援をするか、学習指導要領解説における「書くこと」の指導内容を参考に、前もって十分に構想しておきたいものである。

五 事例検討②

ある言語活動の後に、伝え合う活動を用意する場合、机間巡視をして考えておくべきことは何だろうか。

- ・誰を最初に指名して発表させるか、次に誰を指名すれば意見が対立して面白くなるか
- ・グループになってミニ討論をさせるとしたら、どうグループ分けするか
- ・表現が素晴らしい児童の意見をどのように取り上げればいいのか
- ・ユニークな考えの児童を、どの場面で活躍させるか
- ・個別指導で考えさせておいた児童の登場のさせ方ももちろん他にも挙げられるだろう。おおよそ右のようなことを、必要に応じて行っておくと、後の活動が格段に質の高いものとなるに違いない。

復習のポイント

ヒント：先の事例検討①②に追加するとよいものを自分なりに考え、ノートにまとめよう。

一三

先生の言葉遣い

キーワード：教育話法、不安を取り除く言葉、誤答への対応、日常の全てがお手本

予習のポイント

みなさんは、これからどんどん授業の参観をする機会がある。それはどのように役に立つだろうか。授業研究会への参加もできるとしたら、どのような学びができるのであろうか。いずれも、国語科の授業であるとして、考えをまとめておく。

一 先生の言葉遣いと教育話法

先生の言葉遣いとなると、話が広くなる。丁寧に、共通語で、発音やアクセントを正しく、などの条件が課せられよう。誰であろう教育者としての言葉遣いなのだから。

では、次のように絞っていいこう。教育話法である。教育話法とは、学校での教師の話し方のことである。誠実で人間味豊かに語りたいものである。故人となられたが、鳴門教育大学元学長の野地潤家（のじ・じゅんや）先生は、かつて、教育話法として求められる十項目を挙げられた。以下のものである。

- ①熱心であること（真摯性・熱意性）
- ②教養の高いこと（教養性・人格性）
- ③明朗であること（明朗性）
- ④清らかであること（清明性）
- ⑤優しいこと（慈悲性）
- ⑥ユーモアに富むこと（ユーモア性）
- ⑦親しみやすいこと（親和性）
- ⑧公平であること（公平性）
- ⑨親切であること（親切性）
- ⑩すぐれていること（卓越性）

野地先生には、岡が小学校教員の時代にも、大学教員になつてからも、何度かご指導いただく機会があった。その時その時、野地先生は、まさに教育話法を体現されていた。その折に、私は、これら十項目は、子どもに対する時だけでなく、保護者に対する時も、地域の方々に対する時も、常に心しておかねばならぬことであると確信した次第である。

二 不安を取り除く言葉

子どもの不安を取り除く言葉とはどのようなものであろうか。また、逆に、不安にさせる言葉とはどのようなものであろうか。小学校から中学校、高等学校にかけて、多くの先生

からご指導を受けてきた皆さんである。おおよそ察しが付くことであらう。

子どもの不安を取り除く言葉とは、例えば、自信のない子や引つ込み思案な子でも、しっかりと自信を持って話せるようにするための、教師が工夫した言葉かけであらう。逆に、不安にさせる言葉は、誤答を許さないような、責めるような言葉ではあるまいか。間違いだつて決めつけ、発表者の自尊心を傷つける恐れが大いにある。このような言葉を、注意深く排していかねばならない。

三 誤答への対応

子どもの誤答は、頻繁に出てくるに違いない。どのように対応するとよいのだろうか。

誤答を、即座に「間違いで、直しようがないもの」として処理すべきではないことは、皆さんも理解できるだろう。正しいか正しくないかの判定は保留しておき、もう一度本人に考えを聞いてみるとか、それについて皆で考えてみるとかさせるとういだろう。

意図的に間を取り、じっくりと誤答に向き合うようにしたい。そして、検討が終了したら、わざと、「先生のいい方が分かりにくかったかな？」などのフォローもしていくとよい。誤答と言っても、勇気を振り絞って挙手をし、発表がなされた答えである。発表者の尊厳を大切にしようではないか。

皆さん、教師の言葉をはじめとして、日常の全てがお手本となるのである。子どもにとつて。

復習のポイント

本講のポイントをまとめる。↓ノート整理・発展学習

そろそろ、この授業も終わりが近づいてきた。皆さん

の方から、「期末試験では、どんな問題が出ますか？」といった質問も出てくる。次のものは、過去の試験問題の例である。参考にしてもらえれば幸いである。

1. 板書のしかたについてたずねます。()内に最も適当な言葉を書き入れなさい。

板書するときには、筆圧をしっかりとかけ、黒板に食い込むように書くのが望ましい。板書しながら話すのはよくない。話しをするときは、子どもの方を見るのが基本。書くときと、話しをするときとをきちんと区別して、子どもの()を育てるのである。

書くときの姿勢にも留意したい。黒板の低い位置に書くときは、しゃがんで書こう。文字としても整うし、児童も見えやすい。()以外の手の使い方も大事である。なぜなら、それが遊んでいると、ふらふらして、安定感がなくなるのである。

2. たしかめ発問とつっこみ発問について学んでもらいました。左記の中から、つっこみ発問であるものを見つけ、()に○を書き入れなさい。なお、○の数は一つとは限りません。

()「わらぐつの中の神様」で、前の時間に学習したのはどの場面でしたか？

() おみつさんは、どんなわらぐつに仕上げたいと思っていますか？

() このページで、大工さんが言った会話部分はどれですか？

() 前の時間に、おみつさんの会話を注目したのは、何のためかな？

() おみつさんがわらぐつに込めた思いとはどんなものでしょう。一文にまとめなさい。

3. 討論や発表の授業のうち、プレゼンテーション学習活動についてたずねます。次の()内に位置づくものとして、アからカまでのうち最も適当なものを選びなさい。()の中に、その記号(ア)カ)のうちの一つずつ)を書き入れること。

調べたことを、模造紙に書いたり、パワーポイントを使ったりして発表・プレゼンテーションする機会が増えている。それにより、論理的な「思考力」、情報収集と取捨選択の「()」、分かりやすく発表する「表現力」が身につく。

プレゼンテーション学習活動では、()を設定し、その中で特に興味のある事柄は何かを絞り込む。そして、資料をリサーチしていく

のである。さらに、リサーチした内容を吟味して、発表に必要なものを取捨選択する。

プレゼンテーションのための資料づくりでは、聞き手の理解を助けるために、目で見ても分かる資料を作る。そして、()づくりをし、練習してパフォーマンス・本番に備えるのである。

ア テーマ イ 発表原稿 ウ 着想

エ 書写力 オ 朗読メモ カ 判断力

4. 説明文教材指導についてたずねます。その指導の第一段階はすらすら音読、第二段階は段落分け、第三段階は接続詞、第四段階は要点整理でした。では、そのすらすら音読の指導をする場合、どのようにしていくべきでしょうか。次の枠内に記してください。(枠は省略)

5. 「話すこと・聞くこと」で、近年ではダイベートの単元が設定されている教科書が増えていきます。次の文章は、このダイベートの内容・意義を説明したものです。()内に位置づくものとして、アからカまでのうち最も適当なものを選び、()の中に、その記号(ア)カ)のうちの一つずつ)を書き入れてください。

ダイベートは、ある()について、肯定派と否定派に分かれて討論する形式の()活動である。()能力、情報処理能力、論理的思考力、討論する・あるいは説得する力が身に付くという意義がある。

ア 話し合い イ 習慣 ウ 問題解決

エ テーマ オ 仮説実験 カ 理解

6. 本講義で、あなたがとても参考になったと思われることを、この下の枠内に記してください。この試験の1番から5番で扱った内容以外のことを書くようにしなさい。(枠は省略)

【四】 学んだ実感を味わわせるポートフォリオ評価

キーワード …… 学力テスト、ポートフォリオ評価学習活動、複数の目による評価、指導と評価の一体化

予習のポイント

学力を評価するとはどういうことであろうか。テストで測れる力はどうなるもので、テスト以外の方法を挙げらば、それで測れる力はどうなるものであろうか。自身の経験も振り返りながら、なるべく国語科の学習を例に、考えをまとめておく。

一 学力テストをどう生かすか

学力テストのことを、わかりやすく、ペーパーテストと呼ぼう。ペーパーテストで国語の学力を測ろうとする場合、評価しやすい側面と、評価しにくい側面のそれぞれがあることに気づくだろう。

評価しやすい側面としては、「文字の読み書き」「言葉の意味」「文法」等のような基礎的知識である。それが悪いと責めるわけではない。漢字の場合、ドリル的な練習をし、書き取りテストを繰り返し、きちんとその読み書きをマスターできる。ペーパーテストは、その目的をしっかりと押さえる時、有効な手段となる。しかし、それが評価の全てではない。

さて、評価しにくい側面としては、様々な文章を読んで自分の考えを持ったり、その考えを他者に分かりやすく表現したりする力が例として挙げられる。パフォーマンスを見て判断せねばならない評価もある。自分の考えを、一枚のポスターを使ってプレゼンテーションさせ、質疑応答を経て、振り返りレポートにまとめ、提出させる。その一連の成果物によって評価をしていく場合もある。そこで、次のポートフォリオ評価(学習者の参加を伴う多角的な評価)に繋がっていく。

二 ポートフォリオ評価

ひとまとまりの学習単元が終わった後、学習全体を振り返りながら、ワークシートや作文などの学習成果物を整理し、自己評価や相互評価をしたり、新たな課題を発見したりする学習活動のことをポートフォリオ評価と捉えよう。

点数だけでは表せない学力を知る手立てとなり、評価活動そのものを学習活動として行うことによって、子どもたちは自分がこの学習によって何を学んだのか、学んだことをどう活用したのか、もっと工夫できることはなかったのか、今後の課題は何か等を確認し、それらの学びを教室のみんなと共有することができる。

本格的に導入する場合、次の三種類のポートフォリオを作っていくとよいだろう。

ア 学習成果ポートフォリオ

短期ポートフォリオ (working portfolio) である。学習者はこのポートフォリオを、現在課題となつていく学習成果を保存するために使う。学習者が管理し、何の中に入れて、何を取り除くかは、学習者が決める。

イ 展示ポートフォリオ

中期ポートフォリオ (showcase portfolio) である。展示ポートフォリオは、学習者の一番よい学習成果か、ある時間のある特別な例 (パフォーマンスを含む) を示す学習成果を、教師と学習者とが展示したいと思つた時に、使用する。展示ポートフォリオは、学習成果ポートフォリオから選ばれた学習成果が納められる。蓄積ポートフォリオ

ウ 長期ポートフォリオ

(cumulative portfolio) である。このポートフォリオは、学習者とともに進級する。学習者の学習成果の総合記録というよりも、むしろ長い期間にわたる成長を示すために、それぞれの学年における学習の進み具合を示すいくつかの学習成果の例が保存される。

ポートフォリオ評価は、①診断的評価(事前評価)、②形成的評価(事中評価)、③総合的評価(事後評価)を、具体的な学習成果の保存という形において、実現しようとしたものであるということができよう。また、ポートフォリオに納められている用紙などに記入された自己評価や他者評価のコメントの例を基に、あらかじめ設定していた評価規準と照らし合わせながら、位置付け、意味付けて、再び子どもに返すこと(フィードバック)は、大変有効である。

三 複数の眼による評価

自己評価によって、子どもたちは学習過程を振り返りながら、できたことやできなかったことを評価カードに書き込んでいく。これだけでも学びの実感が得られる。

それだけでなく、教室で友だち同士が評価コメントを書き合う、あるいはうまくできている点・こうすればもっとよくなる点を伝え合うといった他者評価（相互評価）によって、さらに学びが深まる。保護者に参加してもらうのも、場合によっては有効である。

四 評価と指導の一体化をめざして

教師にとって大切なことは、その時々々の学びの足跡を評価の観点（評価規準）に沿って位置付け、意味付け、学習者に返していくこと（フィードバックすること）である。

例えば、ある児童の「読むこと」の学習（高学年・文学教材の場合）を評価し、その結果を基に、次のように言葉かけすることが考えられる。「あなたは、友だちのいいところを見つけて力が伸びてきたね。それから、他の物語との共通点を見つけてくれたのは素晴らしいよ。読み比べる力がついてきた証拠です。登場人物同士の人間関係が読み取れたということは、また一つ読み取りのワザが増えたわけですよ。発表の時の声は、ちよつと小さかった気もするけれど、内容は素晴らしいから自信を持ってね。発表練習する時に、友だちに聞いてもらったり、鏡を見て表情を確かめながら練習したりすることをお勧めします。」このように言葉かけすれば、児童の力が確実に伸びるに違いない。

復習のポイント

本講のポイントをまとめる。↓ノート整理・発展学習
また、引き続き、講義全体を振り返り、まとめを確実にしていこう。視点を換え、前述のような、あなた自身に

よる「国語科教育法」の学習ポートフォリオづくりをするのもよいだろう。

一五

まとめ

キーワード … 教材研究（シート）、単元観、児童観、指導観、指導目標、評価規準、指導計画、本時の学習、板書計画、発問・指示のメモ、教科書会社の指導書・サイト、先行実践の収集、推敲、模擬授業、事後の教材研究（総括）

予習のポイント

これまでの内容を見渡し、残された疑問点などを整理しておく。自分なりの見解をまとめておく。

最終講では、教材研究の方法・学習指導案を作成する手順等のおさらいをしたい。

学生による授業評価・まとめの試験も行う。

復習のポイント

最終講での取り組みを基に、全体のまとめをしていこう。

マニュアル
重要 ①

(目標標準の評価における国語科学習指導事例)

国語科学習指導案

(教育実習生)

指導者 ○ ○ ○ ○

1 日時 平成〇〇年〇月〇日 (〇) 〇校時 〇〇教室

2 学年 第〇学年 〇組 男子〇名, 女子〇名, 計〇名

3 単元名 「地球環境について考えよう」
教材名 一秒が一年をこわす, ホタルにすむ水辺,
「子ども環境会議」を開こう

児童・生徒のやる気を引き出す。また単元の目的が分かる単元名の設定をする。

4 単元について

○ 単元観

- ・本単元が, 「学習指導要領」のうち, どの内容を受けた単元かを明記する。
- ・指導要領の①学年の発達段階に応じた指導内容②具体的な指導のポイントを把握して書く。
- ・教材の価値や言語活動を通してつきたい言語能力は何かを書く。

○ 児童観

- ・つきたい力にかかわる既習事項, 定着状況を書く。
- ・つきたい力にかかわる課題を明記する。
- ・児童の実態については, 数値等を使い具体的に表すと良い。

文章表現としては「…することができるようにするために, ワークシートを活用する。」等の表現が望ましい。

○ 指導観

- ・児童観を生かした学習内容・方向を書く。
- ・授業改善のための工夫や提案したいことを具体的に書く。

○ 研究主題とのかかわり

- ・研究の柱と対応させた項を起こす。

これは, めったに入れることはない!

単なる学習活動を示すにとどまらないようにする。どんな言語能力を育てようとしているのかを, 指導要領の指導事項とのかかわりで明確に示す。

5 単元の目標

- 進んで地球環境に関連する本を読んだり, それについて自分の考えをもち, 積極的に話し合おうとしたりしている。 (国語への関心・意欲・態度)
- 地球環境に関連する本を選び, 自分の考えを深めたり広めたりするために読むことができる。 (読むことア)
- 環境について書かれている文章の内容を, 的確に押さえながら要旨をとらえたり, 事実と感想, 意見の関係を押さえ, 自分の考えをもちながら読んだりすることができる。 (読むことイ エ)
- 「子ども環境会議」で, 自分の意図が伝わるように効果的な組み立てや資料提示を考えて話したり, 自分の立場や意図をはっきりさせて話し合ったりすることができる。 (話すこと・聞くことア ウ)
- 辞書を引く習慣をつけ語句に対する理解を深めるとともに, 論理的な文章の効果的な文章構成について理解することができる。 (言語事項ウ (ウ) オ (オ))

6 単元の評価規準

単元の目標との整合性を図る。

基本的には「主領域」「主領域への関心・意欲・態度」「主領域と関連して指導すべき言語事項」の3観点があるが、本事例のように、前半、確かに読みとることを学習し、後半、それをもとに話し合う学習というように、指導のねらいが明確に区別できれば、それぞれの領域ごとに評価規準を設定する。

ア 国語への関心・意欲・態度	イ 話す・聞く能力	ウ 書く能力	エ 読む能力	オ 言語についての知識・理解・技能
① 進んで地球環境について書かれている本を読み、自分の考えを広めたり深めようとしている。 ② 環境問題について、自分の立場を明確にして、積極的に話し合いに参加しようとしている。 ③ 文章の読み方、課題追求、解決の仕方等を今後の言語生活に生かそうとしている。	① 「子ども環境会議」で自分の意図が伝わるように、組み立てを工夫したり、資料提示をしたりして話している。 ② 自分の立場や意図をはっきりさせ、環境問題解決のために話し合っている。		① 地球環境に関連した本を選び、内容や筆者の意図を押さえて読み、自分の考えを深めたり広げたりするために活用している。 ② 教材文の内容を的確に押さえながら要旨をとらえている。 ③ 書かれている内容について、事実と感想、意見の関係を押さえ、自分の考えをもちながら読んで	① 辞書を利用して、わからない言葉を調べ、語句の働きに気がついている。 ② 意見と事実の書き分け方、論理的な文章の構成の仕方を理解している。

ねらいの焦点化を図るため、つけたい言語能力の主領域を意識する。話すためにプレゼンテーション原稿を書く活動は「話すこと・聞くこと」のねらいを達成するための、読みを深めるために話し合う活動は「読むこと」のねらいを達成するための手段として、それぞれとらえる。

学習指導要領、国立教育政策研究所作成の参考資料の「評価規準及びその具体例」を踏まえて設定する。

7 指導計画 (全16時間)

次	学習活動(時数)	関	話	書	読	言	評価規準	評価方法
1	単元名や教材名から、地球環境について考えるという単元全体の学習の見通しをもつ。(1)	○					ア①「子ども環境会議」を開くという見通しを持って学習に取り組もうとしている。	授業中の態度や様子や観察
2	「一秒が一年をこわす」「ホテルのすむ水辺」を読み、地球環境についての筆者の考えを読み取り、自分の考えを話し合う。(6) 本時5/6				◎		エ②③ ・叙述に即して内容を的確にとらえ筆者の主要を読み取っている。 ・筆者の意見や感想をとらえ、それについて自分の考えを持っている。 オ①② ・わからない言葉を辞書で調べている。 ・意見と事実の書き分け方、論の展開の仕方を理解している	授業中の発表内容 ワークシートの内容
3	二つの教材文の読みを受けて、身の回りにある環境問題についての自己課題を決定し、「子ども環境会議」を開くために課題解決をする。(6)	○				◎	ア①進んで地球環境についての図書を探して読もうとしている。 エ① ・図書資料を活用して自分の考えを深めたり広げたりしている。	授業中の態度や様子や観察 ワークシートの内容

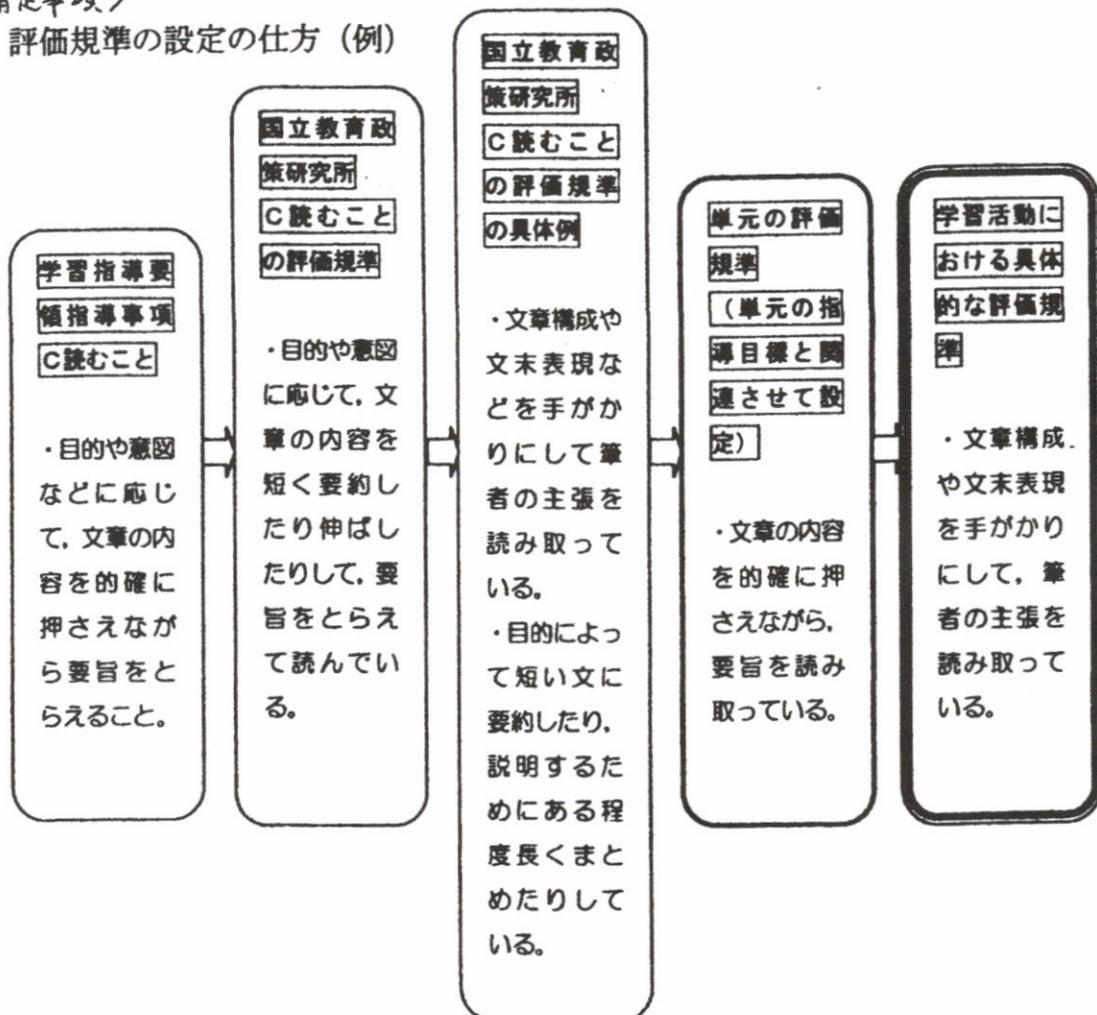
「評価規準」を単元の中に具体的に位置づける。指導に生かす評価をするために、重点的に扱う観点を明らかにし、◎で示す。

			○					イ① ・自分の意図が伝わるように、話の組み立てや提示資料を工夫している	プレゼンテーション資料の内容
4	「子ども環境会議」を開き、自分たちに今できることを話し合う。(2)		○					ア② ・自分の立場を明確にしなが ら、積極的に話し合いに参加しようとしている。 イ①② ・意図が伝わるように組み立てを 考えて話したり、自分の立場や意図をはっきりさせなが ら話し合ったりしている。	授業中の態度や様子の観察 授業中の態度や様子の観察
5	学習のまとめをする。(1)		○					ア③ ・単元の学習をふりかえり、今後の言語生活に生かそうとしている。	自己評価カードの内容

関心・意欲・態度は単元の最後まで評価したい。

〈補足事項〉

評価規準の設定の仕方(例)



8 本時の展開

(1) 本時の目標

「ホテルのすむ水辺」の筆者の主張を読み取ることができる。

(2) 観点別評価規準

◎読む能力 エ② 文末表現を手がかりにしたり、指示語の示す内容を的確に押さえたりして、筆者の主張を読み取っている。

(3) 学習の展開

本時の目標を達成できたかどうか、評価する規準として「単元の評価規準」を本時レベルに落とすことができるだけ具体的に示す。評価規準はB（おおむね満足できる）段階で表す。

学習活動	指導上の留意事項 (◇) (◆「努力を要する」状況と判断した児童への指導の手立て)	評価規準	評価方法
<p>1 本時のめあてをつかむ。</p> <p>筆者が私たちに言いたいことや考えてほしいことを見つけよう。</p>			
<p>2 文章全体から筆者の主張を述べている段落を見つける。</p> <p>努力を要する児童のための手立てを具体的に書く。</p>	<p>◇前時の読みとりをふりかえらせる。</p> <p>◆要点をまとめたワークシートや段落構成をまとめた掲示物を参考にさせ、意味段落としてのまとまりを意識させる。</p>		
<p>3 10, 11段落から、筆者の主張を読み取り、筆者が言いたかったことについて話し合う。</p>	<p>◇個々の考えを持たせるためにラインを引かせる。</p> <p>◆筆者の考えや事実・事例を表す文末表現の事例を掲示物で示し、文末表現に注目させる。</p> <p>◇指示語の内容を押さえた上で、筆者の主張について班で交流し、考えを深めるようにさせる。</p>	<p>評価回数は1~2回が望ましい。</p>	
<p>4 本時のまとめをし、次時の見通しをもつ。</p>	<p>本時の目標を概ね達成できたと判断できる児童の姿を具体的な文章にする。</p>	<p>エ②文末表現を手がかりにしたり指示語の示す内容を的確に押さえたりしながら筆者の主張を読み取っている。</p>	<p>教科書へのライン発表の内容</p>

作成例 重要 ②

1. 日時 平成〇年〇月〇日(〇)第〇校時
2. 学級 第1学年〇組(男子〇名・女子〇名)
3. 単元名 くらべて よもうー「じどう車くらべ」ー
4. 単元について

(1) 単元観

児童が、入学後に初めて触れた説明文。それが、教材文「いろいろなくちばし」であった。文章構成としては、「問いかける」と「答える」ということがセットになったものである。

この「じどう車くらべ」では、「話題・問題提起→問題に対する説明」を、自動車の「しごと」と「つくり」の関係づけ(因果関係→自動車の機能と構造を関係づけて考える)で述べる構成に発展している。いろいろな自動車がどんな「しごと」をしているか、そのためにどんな「つくり」になっているかを読み手に問いかけ、疑問・着眼点の芽が息吹くようになっている。その芽を大切にしながら、自動車の説明が「しごと」についてと「つくり」についてのまとまりからなっていることに気付かせたい。特に、「そのために」という言葉が果たしている役割を児童に気付かせるように促すはたらきかけを大事にする。

「小学校学習指導要領(国語編)」との関連については、次のことが挙げられる。本単元は、第1学年及び第2学年の「読むこと」領域の目標であるところの「書かれている事柄の順序や場面の様子などに気付いたり、想像を広げたりしながら読む能力を身に付けさせるとともに、楽しんで読書しようとする態度を育てる。」を受ける。そして、自動車の「しごと」と「つくり」に関係に目を向けながら読み、そこで学んだことを生かして他の自動車を説明する文章を書くということが、学習内容の中心となる。また、同じく「読むこと」の内容であるところの「(1)ア 語のまとまりや言葉の響きなどに気を付けて音読すること。」や「(1)イ 時間的な順序、事柄の順序等を考えながら内容の大体を読むこと。」「書くこと」の内容であるところの「(1)ウ 語と語や文と文との続き方に注意しながら、つながりのある文や文章を書くこと。」とも密接な関わりがある。

(2) 児童観

本学級の児童の多くが国語を好きで、気づいたことをどんどん発言している。しかし、1年の2学期となったが、はっきりとした発音で話したり音読したりすることはまだ十分にできているとは言えない。本単元の学習で、さらなる向上の一步を踏み出してほしいと願っている。

先に触れた「いろいろなくちばし」の学習では、大部分の児童が、挿絵や文から様子を読み取ることや、「問い」と「答え」の基本的な構成について理解することができた。だが、大切な言葉に傍線を引く活動では、自信を持って探ることができない児童が数名いた。その児童は、音読でも、まだ一文字ずつの拾い読みの段階である。言葉のまとまり(単語)を意識した音読ができるようにすること、本教材文の基本的な構成に気付かせ、視点をしっかりと持つことができるようにすること、といった面での支援に力を入れる。根気強く学習に取り組ませ、できたことの小さな積み重ねを大事にするようはたらきかけていきたい。

(3) 指導観

第一次では、おおよそ次のように指導を進める。まず、挿絵を見ながら、知っている自動車について話し合い、興味・関心を高めさせていく。問いかけのまとまりの部分からは、「しごと」と「つくり」の二つを読み取っていくことを押さえ、読み取りの視点を明確にする。また、単元の最終では、「じどう車ずかん」を作ること知らせ、本単元の学習の大きな読みのめあてを持たせるようにする。

第二次になると、文章の構成がそれぞれの自動車の「しごと」とそのための「つくり」になっていることを確認し、「しごと」から「つくり」の順番で読み取りの活動を繰り返す。それによって事柄の順序というものを意識させたい。文表現では、主語と述語の関係をしっかりと掴ませ、内容を正しく読み取ることができるようにする。それをもとにして、「じどう車カード」を書く活動につなげ、理解の深まりをめざす。

第三次は、前次で学んだことをもとにして、「はしご車」の「しごと」と「つくり」を考えて書く活動から入っていく。その際に、「そのために」という表現を使うようにし、その効果を確かめさせたい。のちには、児童それぞれが好きな自動車を選び、「しごと」と「つくり」などを図書室の図鑑で調べ、自分ならではの「じど

「う車ずかん」を作るように指導を進める。

5. 単元の目標

- 図鑑や絵本に興味を持ち、乗り物に関する様々な本を進んで読もうとする。【C読むこと(1)カ】
- はっきりとした発音で教材文を音読するとともに、「しごと」と「つくり」の関係を考えながら、内容の大体を読み取ることができる。【C読むこと(1)ア・イ】
- 教材文の構成を参考にして、簡単な組み立てを考え、自動車の「しごと」と「つくり」を説明する文章を書くことができる。【B書くこと(1)ウ】
- カタカナの語を、正しく読んだり書いたりすることができる。【伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項(1)ウ(ア)】

6. 単元の評価規準

ア 国語への関心・意欲・態度	イ 話す・聞く能力	ウ 書く能力	エ 読む能力	オ 言語についての知識・理解・技能
・自動車の「しごと」と「つくり」の関心に興味を持ち、「じどう車カード(ずかん)」を作るために、絵本や図鑑を読もうとしている。	—	・教材文の構成を参考にし、自分が選んだ自動車について、簡単な組み立てを考え、「しごと」と「つくり」を説明する文章を書くことができている。	・自動車の「しごと」と「つくり」の関係について考えながら読んでいる。	・片仮名で書く語を、正しく読んだり書いたりしている。

7. 単元の指導計画 (全9時間)

次	学習内容 (時数)	評 価					評価規準	評価方法
		関	話聞	書	読	言		
一	自動車に対する興味・関心を高め、「じどう車ずかん」を作ることを知り、学習のめあてを持つ。(1)	◎			○		・自動車の何について説明している話が捉えている。	発言・ノート
	問いかげのまとまりを読み、学習課題を作るとともに、新出の片仮名や漢字を学習する。(1)				◎	○	・問いかげの語や、文のまとまりを考えながら、声に出して読んでいる。	音読・ノート
二	バスや乗用車の「しごと」と「つくり」を読み取る。(1-本時)				◎	○	・バスや乗用車の「しごと」と「つくり」の関係を考えながら、内容の大体を読み取っている。 ・語や文としてのまとまりを意識しながら、声に出して読んでいる。 ・学習したことをもとに、バスや乗用車の「じどう車カード」を書いている。	発言・ノート 音読 カード
	トラックの「しごと」と「つくり」を読み取る。(1)				◎	○	・トラックの「しごと」と「つくり」の関係を考えながら、内容の大体を読み取っている。 ・語や文としてのまとまりを意識しながら、声に出して読んでいる。 ・学習したことをもとに、トラックの「じどう車カード」を書いている。	発言・ノート 音読 カード
	クレーン車の「しごと」と「つくり」を読み取る。(1)				◎	○	・クレーン車の「しごと」と「つくり」の関係を考えながら、内容の大体を読み取っている。 ・語や文としてのまとまりを意識しながら、声に出して読んでいる。 ・学習したことをもとに、クレーン車の「じどう車カード」を書いている。	発言・ノート 音読 カード

三	はしご車の「しごと」と「つくり」について説明する文章を書く。(1)			○		・「しごと」と「つくり」の順序を考えながら、はしご車について、簡単な組み立ての説明する文章を書いている。	ノート
	自分の好きな自動車について図鑑で調べ、説明する文章を書く。(2)	○	◎			・自動車の「しごと」と「つくり」について、書きたい自動車を決め、文章を書こうとしている。 ・「しごと」と「つくり」の順序を考えながら、好きな自動車について、簡単な組み立ての説明する文章(ずかん)を書いている。 ・片仮名で書く語を、正しく読んだり書いたりしている。	行動観察・ノート ノート・カード(ずかん) 発言・ノート
	作った図鑑を発表し合う。(1)				○	・友だちの「しごと」と「つくり」の関わりに気を付けて促している。	発言・ワークシート

8. 本時の展開

(1) 本時の目標

○バスとじょうよう車の「しごと」と「つくり」を読み取り、「じどう車カード」にまとめて書くことができる。

(2) 観点別評価規準

○バスや乗用車の「しごと」と「つくり」の関係を考えながら、内容の大体を読み取っている。
○語や文としてのまとまりを意識しながら、声に出して読んでいる。
○学習したことをもとに、バスや乗用車の「じどう車カード」を書いている。

(3) 準備物等

○児童…教科書、ノート、筆記用具 ○教員…教科書、掲示資料、じどう車カード、名表

(4) 学習の展開

学習活動	指導上の留意事項	評価規準	評価方法
1. 音読で気をつけることをふりかえる。 2. 本時の学習のめあてを確認する。	・「おおきく ゆっくり ていねいに」の合言葉から、姿勢、口形、発音・発声(音量)、速さ、間などに気をつけることを確認する。 ・全員で音読し、意識付けを図る。		
3. 「バスとじょうよう車」について書かれたまとまりの部分を音読する。	バスとじょうよう車の「しごと」と「つくり」をみつけよう。 ・教材文を、合言葉を意識して読ませる。特に、間に気を付けて読んでいる児童を認め、他へ広げる。	・語や文としてのまとまりを意識しながら、声に出して読んでいる。	音読
4. 「しごと」と「つくり」を見つめる。	・クラベル君というゲストが登場するという設定にし、児童の興味・関心を高める。 ・「しごと」と「つくり」という語そのもの、そののちに、それが指している内容を見付けさせる。 ・発表させながら、順次、音読して確かめるように働きかける。また、色分けして線を引くように指導する。	・バスや乗用車の「しごと」と「つくり」の関係を考えながら、内容の大体を読み取っている。	発言・ノート
5. 「しごと」と「つくり」について考え、まとめたことを書く。	・「じどう車カード」を配付したのち、書き方の要領を指示する。 ・はじめての活動であるため、ここでは、スピードを揃えて書くようにさせる。 ・カードの絵や自由記述部分(かんそう)は、児童それぞれの思いに任せようとする。	・学習したことをもとに、バスや乗用車の「じどう車カード」を書いている。	カード
6. 本時の学習をふりかえる。	・本時のめあてについて自己評価させた後、数名の児童に発表させる。さらに、教員から、総括的なことばをかけて、児童の頑張りを認めるようにする。		
7. 次時の見通しを持つ。	・次時は、トラックについて読み取る学習をすることを伝え、期待を高める言葉かけをして終了する。		

最重要

ただし8からあと
は3年次で!

この十箇条に従って、
手堅く授業づくりをしよう。

国語科授業づくりのための十箇条

1. 指導する教材(単元)を精読し(できれば視写がよい)、難語句やわかりにくい事柄などを調べ、記録しておく。
2. 教材研究シート(別紙・当該領域のシート)に従い、調べて埋めていく。
3. その教材が「小学校学習指導要領・国語編」のどの箇所に該当するか見極め、その部分を深く理解する。該当するところの「同上 解説」の部分も押さえ、引用・要約するなどして、項目列挙の形でメモしておく。
さらに、「評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料【小学校 国語】」(国立教育政策研究所編、同所ホームページからもダウンロードできる)の該当部分を参考に、これも項目列挙の形でメモしておく。
4. 過去の指導例(先輩の指導案、インターネットで入手できる指導案など)がないか調べ、あればコピーを取り、参考にしていく。
5. 教科書会社のホームページを開き、この教材に関係する箇所をダウンロードした後、目を通し、保存しておく。
6. この段階で、自分自身がこの教材で教えたいこと・育てたいことを何点か確定し、メモしておく(それを、子どもたちが「学びたいこと」「習いたいこと」へと持っていくのである)。
7. 上記1～6までの事柄から取捨選択し、学習指導案の形式に落とし込む(まだ不十分なところがあれば埋めていく)。→形式は別紙・学習指導案例参照。
8. 学習指導案の完成後、リハーサルし、問題があれば修正しておく。
9. 教材文コピー、掲示物、ワークシート、板書計画図、台本(発問等のメモ)等を作成しておく。(研究授業では、指導案とともにこれらを配付する。)
10. 授業実践(教育実習Iでは模擬授業)をし、その後の授業研究協議会で出た成果や課題をもとに学習指導案全体に見直しをかけ、必要があれば再度修正しておく。(これが、事後の教材研究である。)

光村図書教師用指導書より

指導目標

- ◆ 知識を得るために、事柄の順序を考えながら内容の全体を読み、文章の中の大事な言葉や文を抜き抜くことができる。
- ◆ 事柄の順序に沿って、簡単な構成を考え、句読点を使ってつながりのある文を書くことができる。
- ◆ 片仮名で、長音、拗音、促音を表記することができる。
- ◆ 読(イ・エ・カ、書(イ・ウ・オ、伝(イ(イ)オ・ウ(ア

◆ 十一月月上旬 12時間 (読16、書16)

じどう車くらべ

指導計画例 ↓ 巻頭 P10 参照

くらべて よもう
よむ

導入として挿絵をき、かけに町でよく見かける車や自分の好きな車について発表させ、いろいろな車があることに気づかせる。

いろいろな じどう車が

どうろを はしっています。

それぞれの じどう車は、

どんな しごとを していますか。

理由や条件を示す言葉
その ために、

読み取りの視点②
どんな つくりになっていますか。

「じどう」と「つくり」を読み取って比べる

問題であることに気づかせる。



一

読み取りの視点1・2と対応して読むようにさせる
 「は」しています」の文型に慣れる

物でない
 バスや じょうよう車は、
 人を のせて はこぶ
 しごとを して います。

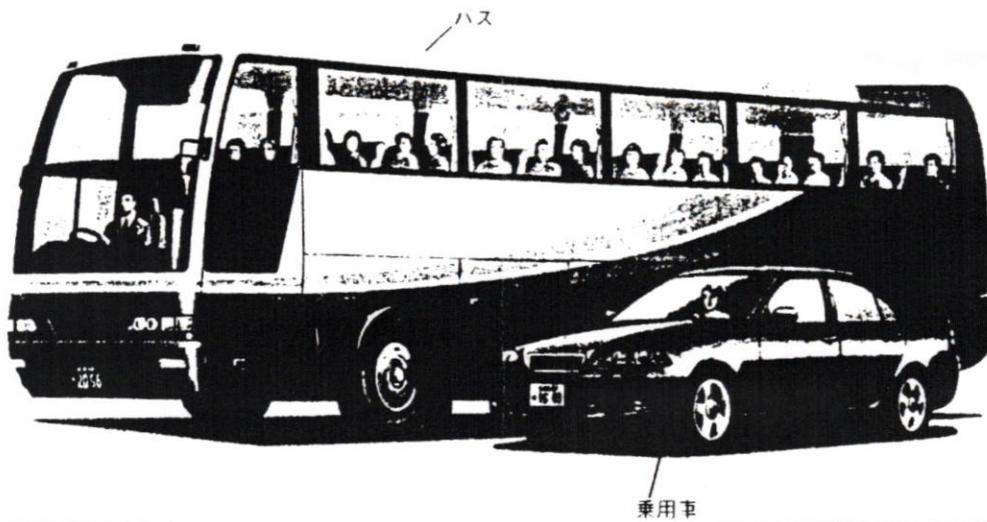
しごととをつくりを関連つけて読み取らせる
 その ために、

ぎせきの ところが、
 ひろく つくって あります。

目的
 そのの けしきが
 よく 見えるように、

工夫
 大きな まどが

「そのために、」あります」の文型に慣れる。



車●一輪車の形を
 滑いたもの、しや
 じどう車
 ひと
 人●人が立って
 る姿を揺から見
 もの

▲バス
 ▲ス

しこと

トラックは、
 にもつを はこぶ
 しごとを して います。

その ために、

※運転する人の座るところ。

つくり1

うんでんせきの ほかは、
 ひろい にだいに なって います。

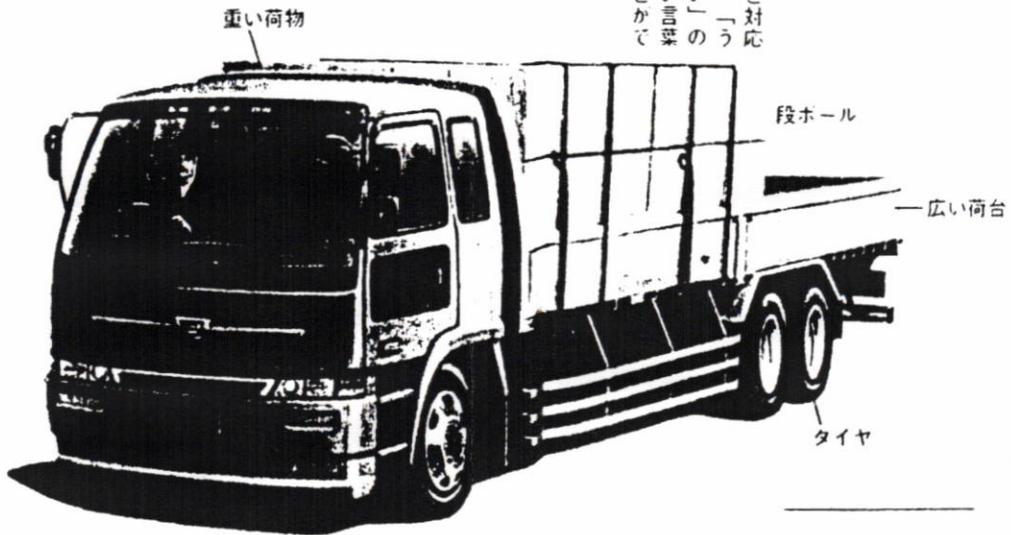
※荷物を盛せる台。

つくり2

おもい にもつを
 のせる トラックには、
 タイヤが たくさん
 ついて います。

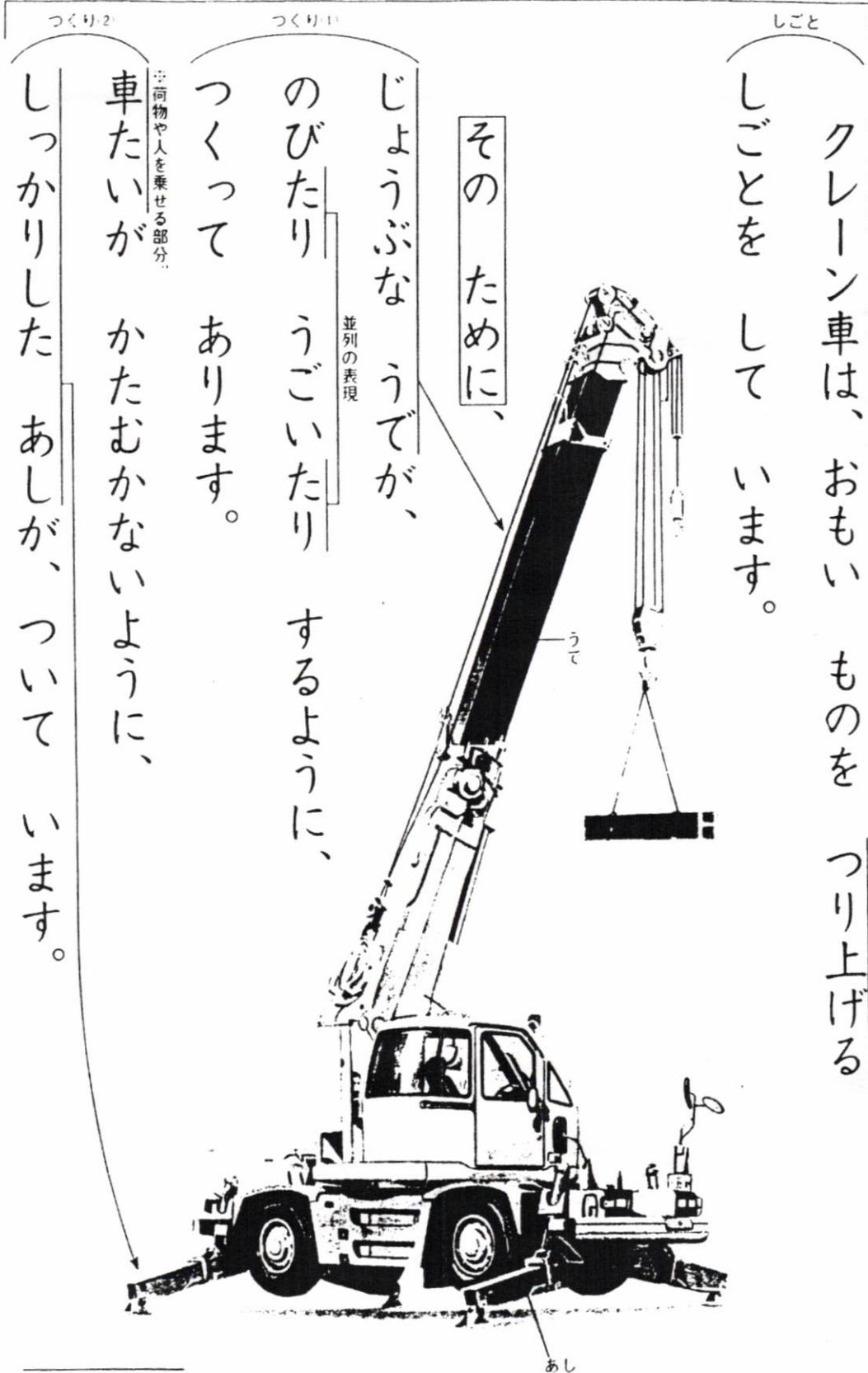
挿絵を見ながら文と対応
 させていくことで、「う
 んでんせき にだい」の
 ような使い慣れない言葉
 も理解していくことがで
 きる。

右ページと左ページとを比べさせても
 よい。
 ・どちらも初めにしことが書いてある。
 ・「そのために」というしこととつくり
 をつなぐ言葉がある。
 ・つくりはどちらも二つずつ書いてある。



トラック
 ▲タイヤ

二



町で作業の様子を見たことのある児童に話をさせ、イメージを膨らませ興味をもたせる。

クレーン車は、おもいものを つり上げる

しごとをして います。

そのために、

じょうぶな うてが、

並列の表現

のびたり うごいたり するように、

つくって あります。

※荷物や人を乗せる部分

車たいが かたむかないように、

しっかりした あしが、ついて います。

クレーン
つり上げる

じどう車の しごとと つくりを、ノートに かきましよう。

この形式は一例である。しごととつくりが分かるように
 児童がまとめやすい方法で出けるとよい。

バスやじょうよう車

しごと 人をのせてはじぶしごとをしています。

そのために、

ざせきのところが、ひろくつくってあります。

そとのけしきがよく見えるように、大きなまどがたくさんあります。

つくり

支援
 ノートにうまく文字を入
 れられない児童にはワー
 クシートを用意しておく。

はしご車は、かじの ときに
 はたらく じどう車です。 挿絵や自分の知っていることなどをもとに、はしご車の
 どんな しごとを して いますか。
 その ために、どんな つくり
 になって いるでしょうか。 児童の発言を「しごと」と「つくり」に分けながら拾い
 上げ、板書に短い言葉で整理していく。

たくさん挙かった意見を説明の文にまとめる際には、「しごと」に合わせた「つくり」か
 どうかを考えさせ、「そのために」でつなぐことができ「つくり」に絞っていく。

例
 はしご車は、かじのとき、たかいたちにいる人をたすけるしごとをしています
 そのために、
 ビルの上までとどく、なかいしこがついています。
 車たいかかたむかないように、じょうぶなあしもつ
 いています。



気がつくことをどんどん挙げさせる。
 意見が出にくいようであれば、図鑑や絵本などはしご車の
 ページを見せ、どんな自動車なのかつかめるようにする。



小賀野 実(ひかりのくに)

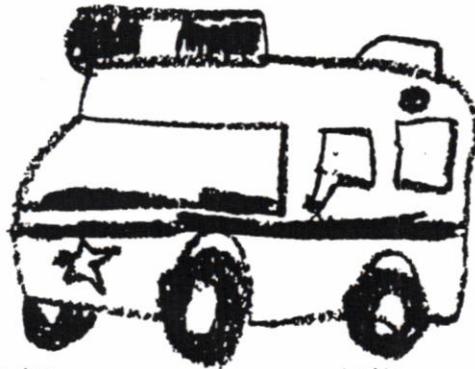


高島 鈴雄(成美堂出版)

うしろに、人を
ねかせる、ところが
ある。



本によってはしごととつくり
に分けて書かれていないもの
もあるので、こたわりすきず
に書かせる。児童が自分の
知っていることや経験をよく
ことも認める。



つくり

しごと

そのために、うんてん
せきのうしろは、人を
ねかせることができる
ようになっていきます。

きゅうきゅう車は、け
がをした人や、びょうき
の人を、びょういんへはこ
ぶしごとをしています。

ほかに、どんな じどう車が ありますか。
しごとと つくりを ぶんしように かいて、
せつめいしましょう。 えも かきましよう。

この単元に入るころから車に興味をもたせるために図書館
の絵本や図鑑をまとめて借りておき教室で自由に閲覧でき
るようにしておくことよ。

調べた中から好きな車を選んでしごととつくりを文章に書
き、絵も描いてまとめさせる。二つくらい書き、P27のは
しごととまとめて表紙をつけると自分だけの自動車図鑑か
できる。

シヨベルカー

車 一「」百百巨車
人ノ人 ひと じどう車

トラツク

・文章の中から必要な部分を抜き抜いている。
・調べるために本を返って読んでみる。
【五】教科書のモデル文にならない、「そのために」を使って「しごと」と「つくり」を関連させて出している。
【言】教科書に提示された片仮名を正しく書いていく。

シヨベルカー

クレーン

平仮名との長音表記の違いを確認させる。

のばす おんの かきかた
クレーン
（おねえさん）
伸ばす音の書き方が違っている。

ちいさく かく かたかな
トラツク
（はらっぱ）
（としよかん）
どちらも小さくかく

かたかなを、よんだり かいしたり しましよう。
新出片仮名は丁寧に取り上げ、促音・長音・拗音の書き方を平仮名と比較して押さえる。

よかつたなあ

まど・みちお

よかつたなあ 草や木が
ぼくらの まわりに いてくれて
目のさめる みどりの葉っぱ
美しいものの代表 花
かぐわしい実

よかつたなあ 草や木が
何おく 何ちよう
もつと数かぎりなく いてくれて
どの ひとつひとつも
みんな めいめいに違っていてくれて

よかつたなあ 草や木が
どんなところにも いてくれて
鳥や けものや 虫や 人
何が訪ねるのをでも
そこで動かないで 待っていてくれて

ああ よかつたなあ 草や木がいつも
雨に洗われ
風にみがかれ
太陽にかがやいて きらきらと

NOTE

教材研究シート(詩・短歌・俳句)

作成日

年 月 日()

氏名

項目	記 録
作 者	<p>作者は、どんな人か。</p>
韻 リズム	
連	<p>何連から構成されているか、連の特徴は何か。</p>
季 語	
句 切 れ 切 れ 字	
表 現 技 法 表現の特色	<p>どのような表現技法が用いられているか。…倒置法、比喻、擬人法など</p>
そ の 他	

1. 教材について

「よかったなあ」（まど・みちお）の掲載教科書は、東書4上である。

「よかったなあ 草や木が」から始まる場所の、いわゆる四連からなる詩である。「草や木」が「ぼくらのまわりに来てくれて／何おく何ちょういてくれて／どんなところにも来てくれて」と各連は続く。子どもたちを、この詩の内容の深さに近づけたいもの。まどさんの自然観や生命観に触れさせたい詩教材である。

2. 作者について

本名は、石田 道雄。1909年、山口県徳山町（当時）に生まれた。台湾の台北工業学校を卒業。台北工業学校在学中に詩や短文を書き始め、友人と同人誌を作るほどに。戦前、台湾で総督府に勤めながら、児童誌「コドモノクニ」「綴方倶楽部」等に詩を投稿した。「コドモノクニ」に投稿した詩が、当時の有名詩人・北原白秋の選で特選になり、童謡を創り始めたことは、彼の転換点と言える。北原白秋には、詩、童謡を学び続ける。戦後、まどさんは帰国し、婦人画報社に就職。子ども向けの雑誌「チャイルドブック」の編集に携わるように。この頃から、幼児雑誌やラジオなどに、童謡を盛んに発表するようになった。

「ぞうさん」「ふしぎなポケット」「やぎさんゆうびん」等の童謡が有名である。野間児童文芸賞をはじめ、芸術選奨文部大臣賞、路傍の石文学賞特別賞、日本児童文学者協会賞、巖谷小波文芸賞を、最近では国際アンデルセン賞他多くの受賞が。

まど・みちおというペンネームについては、ある所で次のように語っている。「本名は石田道雄ですが、若い時にペンネームのつもりで付けたんですね。付けた途端に嫌になりまして（笑い）。ところが、恩師の北原白秋先生が「いい名前じゃないか」と仰ったので、それじゃこのままでいいだろうと。それからずっと使っているわけです。まどというのは、家でも何でも、外に通じる窓がなかったらどうにもなりませんね。窓を通じて外の景色を見たりします。そんな感じで付けたんです。」との話は、誠に興味深い。

3. 作品について

一連では、草や木、みどりの葉っぱ、花、実に感謝している。二連では、草や木がどれ一つとして違っていてくれて、数限りなくいてくれて、よかったなあと感謝の気持ちをいっぱいにして語っている。

三連では、草や木が、いたるところに生育していてくれて、よかったなあ、と感謝。人間だけでなく、鳥やけものや虫にとっても、よかったなあ、と感謝するのである。三連では、草や木（植物）と動物とを対比している。草や木は、人間だけでなく、鳥にも、獣にも、虫にも、地上のいたる所、あらゆる所に生育していてくれて、「いらっしやい！」と歓迎してくれるようだ。本当にあり難いことだと深く思っている。四連では、三連までをまとめ、改めて「よかったなあ」の前に「ああ」の感嘆詞をつけて強調して言い、更なる深い感謝の気持ちが表明される。

もし、地球上に草や木がなかったとしたらどうか。子どもたちに問うたら、どんな答が返ってくるだろう。草や木は、人間や鳥や獣や虫たちの食用となるだけでなく、住居にもなり、生活の足場となり、心潤し、安らかにしてくれる存在。子どもなりの言葉で表現するのではないか。

四連では、草や木が、いつも、「雨に洗われ、風に磨かれ、太陽に輝いて」という順番になっており、イメージがまざまざと浮かぶよう工夫されている。何時もきらきらと輝いて生育していてくれて、よかったなあ、ああほんとによかったなあと喜び、これからもそうあって欲しいという願いも込め、気持ちを存分に表している。大自然（草や木）への賛歌と言える詩だ。

4. 授業づくりについて

音読を軸として授業を展開するとよいだろう。「よかったなあ」「いてくれて」のような、繰り返しの表現が特色。「目の覚めるようなみどりのはっぱ・かぐわしい実」のような、独特な表現に子どもたちは興味を持つだろう。第四連の「ああ」から始まる場所の、ある種の感動を表す読み方を工夫することに違いない。他に、心に残る言葉を発表させてみると、草や木に対する作者の考え方を創造していくのではあるまいか。

授業の展開としては、例えば、次のようにしてみるのもいいのではないか。

音読を繰り返し、詩の大体を理解する。

「詩を読みましょう。何を書いた詩か、考えましょう。」「気に入った言葉や好きになれそうな言葉はありましたか。」と問いかけてみたい。

音読させ、感想を発表させる。好きな言葉を挙げて、発表させるのも有効。次のようなよさが生まれる。

- ・「いてくれて」という表し方から、作者の考え方に気づく。
- ・作者の草や木の見方に着目。気がついたことは何ですか、と問う。すると、「草や木の色が美しく、匂いがかぐわしいと書いている。草や木は美しいんだね。」「草や木は沢山ある。皆違っているのがいいのだから言ってるみたい。」「草や木が待っていてくれる。人みたいに書いているよ。（疑人表現への気づき。）」
- ・「きらきらと」の意味を考えるのも面白い。四連は、次のようになっている。

ああ よかったなあ 草や木が
雨に洗われ
風にみがかれ
太陽にかがやいて きらきらと

この連では、何を「よかったなあ」と言っているのか問うと、「きらきらとかがやいている」ことが導き出される。「きらきら」から、草や木はどうしたら輝くのかを考えさせることもできる。答えはすぐに出てこないかもしれないが、また音読を繰り返すと、雨や風の力で輝く、太陽の力を借りて輝く、と見つけていくのでは。大切なことは、草や木も、自ら輝くことなのだ。

- ・詩を音読し、出てきた思いを生かすために、ノート記述を大切にしたい。

◎あなた自身の気づきメモを大切にネ!!

「国語科教育法」課題…学習指導案の作成・提出要領

★まず iPad で各自が「学内LAN」→「学生用メニュー」→「講義資料等」→「岡利道授業関係3(3)学習指導案例(文学・詩・ふしぎ)」と進み、「ふしぎ」の学習指導案(Word版)をパソコンでダウンロードして保存のうえ編集していくようにしましょう。【以下、★印の指示に従って作業して下さい。】
★全体的に、のところだけ各自の考えによって書き換えもらうこととします。のところ以外は、変更しなくてもいいこととします。

国語科 学 習 指 導 案

指導者 教育実習生 初教育者

1. 日 時 平成24年7月23日(月) 第4校時
2. 学 級 第4学年1組 (男子10名・女子10名) ★各自の学生番号と名前に書き換える。
3. 単元名 詩を読もう 「ふしぎ」「よかったなあ」
4. 単元について

(1) 単元観 ★「よかったなあ」の教材の特質については、自分なりの教材研究を踏まえて書き換える。

本単元は、場面の様子を思い浮かべながら、詩を声に出して読むことをねらいとしており、「ふしぎ」(金子みすゞ)、「よかったなあ」(まど・みちお)を取り扱う。言葉の響きやリズムを味わい、楽しんで詩を読もうとすることや、情景や作者の思いを想像しながら、場面の様子が分かるように工夫して音読することができるようになることを目指す。「ふしぎ」は、全体が四連構成になっている。第一連から三連まで不思議に思う事柄を挙げ、第四連では第一連から三連の自然の神秘を当たり前だと決めつけてしまう人々に対する不思議を詠っている。難解な語句が少なく、内容理解がしやすい。また、音数が揃えられ、リズム感を生み出している。語りかけてくるような口調や、豊かなものとのらえ方が、子どもの感性を育てることに適していると考えられる。「よかったなあ」も、全体が四連構成になっている。第一連では草や木の存在への感嘆、第二連では草や木の数と多様性への感嘆が詠まれている。第三連では草や木が至る所に存在することへの感嘆、第四連では草や木が太陽などの大きな自然の恵みを受けて存在することへの感嘆が詠われている。擬人法と反復が駆使されており、自然への感謝の気持ちが強調されている。視覚や嗅覚に関わるものも取り上げられており、感覚を働かせて読むことができる。

また、「小学校学習指導要領(国語編)」との関連では、「C読むこと」の内容(ア)(ウ)とのつながりが深い。

(2) 児童観

本学級の児童は、男子10名、女子10名、計20名で構成されている。児童は快活であり、興味・関心のあることにひたむきに取り組んでいる。本学級では朝の会で詩を音読するようになっており、児童の中にはすらすらと暗唱ができる児童も多い。また、金子みすゞやまど・みちおの詩集が学級文庫に数冊置いてあり、両詩人の詩を好んで読む児童が多い。したがって、詩を読む学修に関して抵抗がある児童は少ないと考えられる。

国語科の授業で、これまでに詩に触れることは何度もあった。しかし、詩の中に隠れている表現技法や文の構成を意識し、気持ちの変化や情景に気付き、それらをはっきりととらえて音読する力は十分に育っていない。また、聞き手を意識した音読をすることに苦手意識を感じている児童が多いため、それを補うような働きかけが必要となっている。

(3) 指導観

指導にあたっては、詩が持つ独特のリズムを感じ、場面の様子を考えながら声に出して表現することができるように、音読の仕方を工夫させたい。本時では、まず音読の時間を取る。ノートに書き写した詩の行間に、自力で読み取ったことを、二つの観点を基に書きこませる。構成、表現技法、リズムなど、気づいたことを書きこむことで、読み方の工夫が可視化される。そして、分かったことから、作者が詩で伝えたいことを考えさせる。それらを基に、どのように音読すれば相手に伝わりやすいか考え、二人組になり、発音の仕方、抑揚のつけ方、声の大きさ、連ごとの区切りに気を付けるようにして音読をさせたい。最後に、自分の音読を振り返らせることで、今後の課題をより意識づけたい。

5. 単元の目標

○内容の中心や場面の様子がよくわかるように音読することができる。

【学習指導要領の内容項目 C(1) ア】

○場面の移り変わりに注意しながら、作者の性格や気持ちの変化、情景などについて、叙述を基に想像して読むことができる。

【学習指導要領の内容項目 C(1) ウ】

★繰り返しになりますが、のところ以外は、変更しなくてもいいです。

6. 評価規準

ア 国語への関心等	イ 話す・聞く能力	ウ 書く能力	エ 読む能力	オ 言語についての知識等
①内容の中心をとらえたり、連の関係を考えたりしながら、楽しく読んでいる。	—	①何が述べられているのか、作者は何を見ているのかを考えながら、詩を書き写している。	①内容の中心や場面の様子がよくわかるように音読している。	①詩のリズムを感じ取りながら、情景を想像することができている。 ②倒置法や連など、構成や詩の表現技法について初歩的な理解をしている。

7. 指導計画 (全2時間)

次	学習内容 (時数)	評 価					評価規準	評価方法
		関	話聞	書	読	言		
一	○「ふしぎ」を読もう。 (1-本時) ★(1)にする。 「一本時」は取る。	○		○		・内容の中心をとらえたり、連の関係を考えたりしながら、詩を楽しんで読んでいる。(ア①)	行動観察 発言	
						・何が述べられているのか、作者は何を見ているのかを考えながら、詩を書き写している。(ウ①)	行動観察	
						・内容の中心や場面の様子がよくわかるように音読している。(エ①) ・詩のリズムを感じ取りながら、情景を想像することができている。(オ①)	行動観察 ワークシート ノート	
二	○「よかったなあ」を読もう。 (1時間) ★(1-本時)にする。 今回はここが本時。	○		○		・内容の中心をとらえたり、連の関係を考えたりしながら、詩を読もうとしている。(ア①)	行動観察 発言	
						・内容の中心や場面の様子がよくわかるように音読している。(エ①)	行動観察 ノート	
						・倒置法や連など、構成や詩の表現技法について初歩的な理解をしている。(オ②)	ノート	

8. 本時の展開

★ウ①は、第二次にも入れるようにする。

(1) 本時の目標

○場面の様子を思い浮かべ、作者の思いを想像しながら音読することができる。

(2) 観点別評価規準

- ・内容の中心をとらえたり、連の関係を考えたりしながら、詩を楽しんで読んでいる。
- ・何が述べられているのか、作者は何を考えているのかを考えながら、詩を書き写している。
- ・内容の中心や場面の様子がよくわかるように音読している。
- ・詩のリズムを感じ取りながら、情景を想像することができている。

(3) 準備物等

児童：教科書 ノート

教師：教科書 掲示資料(詩を書いたもの) ワークシート

★ウ①も入れて、次のように四つにする。

- ・内容の中心をとらえたり、連の関係を考えたりしながら、詩を読もうとしている。(ア①)
- ・何が述べられているのか、作者は何を見ているのかを考えながら、詩を書き写している。(ウ①)
- ・内容の中心や場面の様子がよくわかるように音読している。(エ①)
- ・倒置法や連など、構成や詩の表現技法について初歩的な理解をしている。(オ②)

(4) 学習の展開

学習活動	指導上の留意事項	評価規準	評価方法
<p><導入 5分></p> <p>1. 詩の学習に入る構えを作る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・題名と作者を知る。 <p>2. 本時の学習を確認する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・学習規律が整っていることを確認したのち、授業に入るようにする。 ・今日学ぶ詩の題名と作者を知らせる。 ・本時の学習のめあてを提示した後、音読させ、意識化を図る。 		
<p>場面の様子や、作者の思いが聞き手に伝わるように音読をしよう。</p>			
<p><展開 30分></p> <p>3. 詩を音読する。</p> <p>4. ノートに視写をする。</p> <p>5. 個人で音読をする。</p> <p>★「よかったなあ」に変える。</p> <p>6. 「ふしぎ」を読んで気づいたことをノートに書き込む。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>・「わたしはふしぎでたまらない、～が。」と、繰り返しになっている。</p> <p>・音数が揃っていて、リズム感がある。</p> <p>・雨が銀に光って見えるのは、すてきな。</p> </div> <p>7. 場面の様子を考える。</p> <p>○分からない語句の確認をする。</p> <p>○何連構成か。</p> <p>○表現が工夫されていると思ったところを発表する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・倒置法、反復、リズム（音数） <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>○話者が一番ふしぎでたまらないこととは何かを考える。</p> </div> <p>○どのように工夫して音読をするかノートに書き込む。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・教師の音読を目をつむって聞かせる。教師の音読は、極端な変化をつけないようにする。 ・ノートに視写する際は、行間は1行、連と連の間は2行、あけるよう指示する。 ・教師は詩を黒板に書き写す。 ・作者になり切り、個人で音読をするようにする。 ・見つける観点として次の二つを提示する。 <ul style="list-style-type: none"> ①書き表し方で工夫されていると感じたところ。 ②いい言葉だと思ったところ。 <p>★子どもが「よかったなあ」を読んで気づくであろうことを書く。</p> <p>★オ②に書き換える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・倒置法や連など、構成や詩の表現技法について初歩的な理解をしている。(オ②) <ul style="list-style-type: none"> ・分からない語句を挙げさせ、児童どうして意味を考えさせる。必要に応じて教師が説明を加える。 ・4連構成であることを確認する。 ・児童がノートに書いた気づきから、文の構成やリズムなどに関するものを発表するように促す。 ・新たな気づきは、赤ペンでノートに書き込ませる。 ・発表することで、全体で意見交流をする。 ・自然の移り変わりを当たり前だという人々の考え方が、一番のふしぎだということに気付くようにする。 <ul style="list-style-type: none"> ・一人で作業させる。思いつかない場合は、友達と話し合ってもよいことを伝える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・内容の中心をとらえたり、連の関係を考えたりしながら、詩を楽しく読んでいる。(ア①) ・何が述べられているのか、作者は何を見ているのかを考えながら、詩を書き写している。(ウ①) 	<p>行動観察</p> <p>発言</p> <p>行動観察</p> <p>行動観察</p> <p>ノート</p>

★横のラインを揃える。ずれないように注意！

<p>8. 学習したことを思い浮かべながら音読する。</p> <p>・ワークシートに、どのようなことに気を付けて音読するのかを書き込む。</p>	<p>・二人ずつに分かれ、音読の聞き合いをさせる。</p> <p>・作者の思いを思い浮かべながら音読をするよう促す。</p> <p>・自分なりに工夫するところを言ってから音読をするように促す。</p> <p>・音読を聞くごとに、ワークシートにメモを取るようになる。</p> <p>・音読が終わったら、コメントをもらうようにする。</p>	<p>・内容の中心や場面の様子がよくわかるように音読している。(エ①)</p>	<p>行動観察 ワークシート</p>
<p><終結 10分></p> <p>9. 本時の学習を振り返る。</p> <p>10. 次時の見通しを持つ。</p>	<p>・本時の学習のめあてに対する振り返りをワークシートにさせ、数名の児童に発表させたのち、それにつなげて、教師から認めや励ましの言葉をかける。</p> <p>・次時にはまど・みちおの「よかったなあ」を学習することを告げる。</p>		

★書き換える。

・次時は新しい単元に入ることを伝える。

板書計画図

七月 十九日 (木)

ふしぎ

金子みすゞ

めあて 場面の様子や、みすゞさんの思いが聞き手に伝わるように音読をしよう。

ふしぎ

金子みすゞ

わたしはふしぎでたまらない、
黒い雲からふる雨が、
銀にひかっていることが。

金子みすゞ

わたしはふしぎでたまらない、
青いくわの葉たべている、
かいこが白くなることが。

金子みすゞ

わたしはふしぎでたまらない、
たれもいじらぬ夕顔が、
ひとりではらりと開くのが。

金子みすゞ

わたしはふしぎでたまらない、
たれにきいてもわらってて、
あたりまえだ、ということが。

金子みすゞ

↓何に対するふしぎ？

☆作者が一番ふしぎに思ったこと

自然のうつり変わりをあたりまえだといって
わらう人たちが、一番ふしぎである。

☆ふりかえり

★今回は、これは作成しないこととします。

第3編 評価に関する事例

この資料からです。
HPでも見られます。

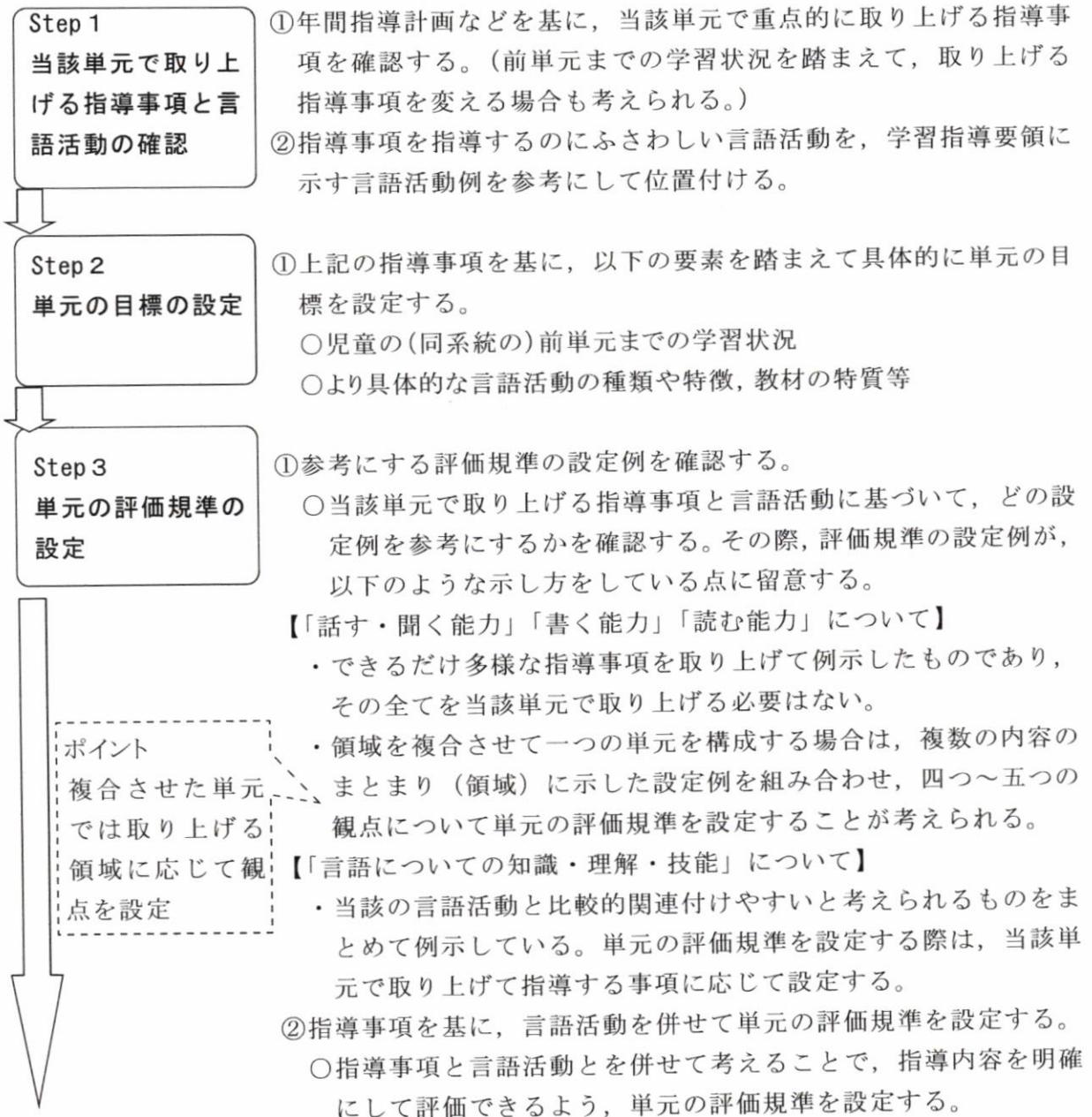
1 評価規準の設定について

(1) 評価規準の設定における基本的な考え方

第2編で示した国語科の評価規準の設定例は、主に単元の評価規準を設定する際の参考となるように作成している。

評価規準を設定する際は、児童の発達の段階を踏まえ、単元の指導の狙いを明確にするとともに、当該単元に位置付ける言語活動などに応じて適切に設定することが大切である。また単元によっては、複数の内容のまとまりに示した設定例を組み合わせるなど、実際の指導に対応した評価規準を設定するよう留意する必要がある。

(2) 評価規準の設定例等の活用





Step 4
指導過程の構想と
具体的な評価規準
の設定

ポイント
設定例の配列を
参考に、学習過
程も柔軟に構想

(例) 第3・4学年「書く能力」指導事項イ(構成に関する指導事項)・言語活動例イ(疑問に思ったことを調べて報告する文章)
→「調査の目的や方法、調査の結果とそこから考えたことなど、
調査を報告する文章のもつ構成の特徴を踏まえて、文章の構成を考えている。」

下線部のように、どのような言語活動を通して指導するかを踏まえて指導すべき内容を明確化し、具体的に設定する。

- ①単元の指導過程を構想する。
 - 学習の過程が、児童にとって自ら学び、課題を解決していくものとなるようにする。評価規準の設定例は、機械的に指導事項ア、イ、ウ……の順序に並べたものではなく、指導事項の順序を柔軟に組み替え、学習の過程をイメージできるように示している。指導過程の構想に当たっても、この点に留意する。
- ②単元の評価規準を基に、指導過程における評価規準をより具体的に設定する。
 - 単元の指導目標や指導過程、言語活動の特徴や観点の特質などに応じて、具体化の仕方は例えば以下のように、多様に考えられる。
 - ・各々の単元の評価規準をそのまま指導過程に位置付ける。
 - ・単元の評価規準を分割して細分化し、指導過程に位置付ける。
 - ・単元の評価規準を、学習過程に即してより具体化して位置付ける。 など

次ページより、この事例をクローズアップします!

2 各事例のポイント

事例1 「自分の宝物を紹介しよう」 単元の指導計画から総括までの手順(第2学年)

単元の評価規準の設定から当該単元における観点別の評価の総括に至る一連の手順を示した事例。「A 話すこと・聞くこと」の話題設定や取材及び聞くことの指導と評価の在り方を取り上げて例示した。総括については、複数のパターンを例示した。

事例2 「シリーズ作品を読んで、好きなところを紹介しよう」

年間を見通した指導と評価の重点化(第2学年)

年間の見通しの中で、前単元の指導と評価を踏まえ、単元で付きたい力を重点化して指導し評価する事例。年間の各単元の評価の重点を示す一覧を例示した。また、シリーズの本や文章を読むことを通した指導により、学習状況を効果的に評価する手立てを例示した。

事例3 「説得力のある意見文を書こう」 思考・判断する状況の評価方法の工夫(第6学年)

児童が思考し判断している状況の評価するための評価方法の工夫に関する事例。「B 書くこと」の意見文を書く指導において、児童が自分の考えを吟味する学習を支えるワークシートを基に効果的に評価する例を示した。

事例4 「食べ物のひみつを伝えよう」 領域間の関連を図る指導と評価(第3学年)

領域を複合した単元の評価のポイントを示した事例。「B 書くこと」と「C 読むこと」とを複合させることにより、双方の領域の指導の効果を高める単元構成の特徴を踏まえて評価を進める事例を示した。

国語科 事例 1

単元名 自分の宝物を紹介しよう

第2学年「A 話すこと・聞くこと」

キーワード：

単元の指導計画から
総括までの手順

1 単元の目標

- (1) 自分が大切にしているものの中から一番紹介したいものを選んで発表しようとすることができる。
- (2) 紹介したい宝物を選び、必要な事柄を挙げて話したり、大事なことを落とさずに紹介を聞き、感想を述べたり質問したりすることができる。
- (3) 主語と述語とを照応させて話したり、言葉には意味による語句のまとまりがあることに気付いたりすることができる。

2 単元の評価規準

国語への関心・意欲・態度	話す・聞く能力	言語についての知識・理解・技能
<ul style="list-style-type: none">・自分が大切にしているものを様々に想起し、一番紹介したいものを選んだり、その特徴や選んだ理由をはっきりさせたりして紹介しようとしている。・友達が紹介する大切な物について聞きたい、質問してみたいという期待や願いをもって聞こうとしている。	<ul style="list-style-type: none">・自分が大切にしている物の中から、友達に一番紹介したい物を選んでいる。(話題設定ア)・紹介する宝物のよさを考え、その特徴が伝わるように、必要な事柄を挙げている。(取材ア)・相手が紹介したい事柄の大事なことと、自分が聞きたい事柄の大事なことを落とさずに聞き、友達の宝物について質問したり感想を述べたりしている。(エ)	<ul style="list-style-type: none">・気持ちを表す語句や色、大きさ、形を表す語句など、意味による語句のまとまりがあることに気付いて話している。(イ(ウ))・主語と述語とを照応させて話している。(イ(カ))

3 指導と評価の計画(8時間)

(1) 前単元までの学習評価を踏まえた本単元の計画

本単元では、小学校学習指導要領に示す第1学年及び第2学年の「A 話すこと・聞くこと」の言語活動例「エ 知らせたいことなどについて身近な人に紹介したり、それを聞いたりすること。」を通して、指導事項「ア 身近なことや経験したことなどから話題を決め、必要な事柄を思い出すこと。」「エ 大事なことを落とさないようにしながら、興味をもって聞くこと。」及び〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕(1)の「イ(ウ) 言葉には、意味による語句のまとまりがあることに気付くこと。」「イ(カ) 文の中における主語と述語との関係に注意すること。」を指導するものである。

前単元で児童は、物を作る手順を説明するスピーチの学習を行った。その際、話す順序を考えて話したり、話し手が知らせたいことを落とさずに聞いたりすることができるようになってきた。しかし、伝えたい思いを膨らませて話題を選び、その特徴に応じて材料収集を工夫したり、自分が聞きたいことを明確にして聞き、感想を述べ合ったりするまでには至っていない。そこで本単元では特に、話題の選定及び話題の特徴を踏まえた材料収集、自分の聞きたいことを明確にして聞くことに重点を置いて指導することとする。

(2) 本単元の指導と評価の計画 (全8時間)

次	時間	狙い, 学習活動[指導のポイント (○)]	評価規準 ([]) 評価方法 (・)
一	1 ・ 2	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;">◎宝物紹介スピーチをする学習の見通しをもち、自分のとっておきの宝物を選ぶことができる。</div> <p>①教師のモデルの紹介スピーチを聞き、宝物を紹介する学習の見通しをもつ。</p> <p>②自分が大切にしている物を様々に挙げ、その中から友達に一番紹介したい宝物を選ぶ。</p>	<p>○教師のモデルを提示することで、自分の話題を選ぶ際の手掛かりとする。</p> <p>○話題が決められない児童に対しては、いつも使っている物や身の回りにある物の中から大切にしている物を思い出すなど、発想の具体的な視点を提示し、話題を選べるようにする。</p> <p>[関] 自分が大切にしている物を様々に思い出し、紹介したいという思いを膨らませて学習の見通しを立てようとしている。</p> <p>・様々に発想する姿を教師や児童相互の対話を通して加点的に評価する。</p> <p>[話・話題設定ア] 自分が大切にしている物の中から、友達に一番紹介したい宝物を選んでいる。</p> <p>・大切にしている物を様々な視点から思い出して書けるような学習カードを用いて評価する。</p>
二	3 ・ 4 ・ 5	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;">◎宝物の特徴などに注意してスピーチの材料を集め、紹介の準備をすることができる。</div> <p>③紹介したい宝物の特徴を短い文で書き出す。</p>	<p>○自分の宝物の特徴や気に入っているところ、大切にしている理由などを思い出してカードに書くようにする。</p> <p>○特徴や理由などが思い出せない児童には、宝物をよく見るよう声がけしたり宝物になったきっかけを思い出</p> <p>[話・取材ア] 紹介したい宝物について、それはどのような物か、なぜ大切にしているのか、気に入っているところはどこかなどを考えている。</p> <p>・どんな宝物か、宝物になった理由は何か、どこが気に入っているかなどを書き出したり、並べ</p>

		させたりする。	替えながら話す順序を考えたりできるカードを用いて評価する。
	④紹介したい宝物について、話す事柄をカードに書いて整理し、カードを並べ換えて話す順序を決める。	○紹介したい宝物について、もう一度見たり動かしたりしながらその特徴などを確かめるようにし、さらに追加したい特徴があるときには、色の異なる追加取材用カードに記入し、発表メモとして用いるようにする。	[言イ(ウ)] 気持ちを表す語句や色、大きさ、形を表す語句など、意味による語句のまとまりがあることに気付いて話す言葉を考えている。 ・カードの記述の状況を基に評価する。
	⑤声に出しながら、「宝物紹介」のリハーサルをする。	○宝物紹介の準備をしながら、友達のどんな紹介を聞いてみたいかにも意識を向けられるように声がけする。 ○二人組でリハーサルを行い、宝物の素敵などところについて感想を述べたり、もっと聞きたいところについて、質問したりできるようにする。	[関] 自分の思いを伝えるために、紹介の仕方を工夫しようとしている。 ・リハーサルの状況とカードの記述を基に評価する。授業において積極的に友達に聞いてもらおうとする姿が見られるかどうか、また追加取材用カードに書き加えられた内容により強く伝えたいという思いが表れる記述があるかどうかなどを中心として、伝えようとする思いの膨らみを評価する。
三	6 ・ 7 ・ 8	◎宝物紹介スピーチを聞き合い、質問や感想を述べることができる。	
	⑥宝物紹介の進め方を確認する。	○友達が紹介する宝物の素敵などところについて、「どこが」、「どのように」よいと思うのか、もっと聞きたいことはどのようなことかなど、感想や質問を述べるポイントを確認する。	[関] 友達が紹介する宝物について、もっと知りたい、質問してみたいという願いをもって聞こうとしている。 ・児童の聞こうとする姿勢や質問しようとする態度を積極的に評価する。
	⑦一人ずつ全員に向けて宝物を紹介する。一人の紹介が終わったら、宝物紹介についての感想や質問を述べる。	○全員が自分の宝物を紹介できるようにするとともに、質問や感想を述べる機会を十分に確保する。 ○児童から出てきた感想や質問の仕方について、話し手と聞き手の双方にとって大	[話エ] 宝物の特徴や大切にしている理由など友達が話したい大事なことと、自分が聞きたい友達の宝物についての大事なことを落とさないように聞き、もっと知りたいと思ったことなどについて質問したり、友達の宝

	<p>事なことを落とさずに聞くようにする点から助言していく。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・児童から出てきた、感想を述べたり質問をしたりするための言葉（語彙）を板書し、ほかの児童も使えるようにする。 	<p>物について感想を述べたりしている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・主にスピーチを聞く児童の質問や感想によって評価する。繰り返しの学習の中で高まりが見られた場合は、その状況を積極的に評価する。 <p>[言イ(カ)] 主語と述語とを照応させて話している。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・主にスピーチをする児童の状況から評価する。
--	---	---

※指導過程における評価規準は、単元の評価規準との対応が分かるよう、[] 内に観点名を簡略化して表記したものや指導事項等の記号を記載している。（例えば「話エ」は、「話す・聞く能力」の観点の、指導事項エに対応する評価規準であることを示す。）

4 観点別評価の進め方

特に、ここに注目して下さい!

本事例では、「A 話すこと・聞くこと」の指導事項ア及びエに重点を置いて指導に当たった。音声言語である「話すこと・聞くこと」の指導と評価では、指導の重点を明確にして指導し、記録に残す評価を意図的・計画的に蓄積して観点別評価を進めていくことが大切である。

(1) 取材についての指導と評価

ここでは、「話す・聞く能力」のうち、単元の重点である取材についての評価を取り上げ、児童の学習状況とそれに対する教師の働きかけを述べる。

① 「おおむね満足できる」状況について

本事例で、取材についての指導過程における評価規準は、以下のとおりである。

<p>[話・取材ア] 紹介したい宝物について、それはどのような物か、なぜ大切にしているのか、気に入っているところはどこかなどを考えている。</p> <p style="text-align: right;">(第二次 第3教時)</p>
--

この評価規準に照らして、例えば次のような児童の状況を「おおむね満足できる」状況と判断した。

<p>【Bの状況】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分が紹介したい宝物の特徴や気に入っているところを複数見付けている。 ・宝物になったきっかけや大切にしている思い出について考え、その中から友達に伝えたいことを選んでいる。

② 効果的な指導の手立て

このような「おおむね満足できる」状況となるような指導の手立てとして、次のようなことが考えられる。

例えば、自動車などは動き方に特徴があり、ぬいぐるみなどは感触に特徴がある。そうした特徴を捉えるときには、見た目の特徴だけでなく、実際に宝物を動かしてみたり、触れてみたりしながら気に入っているところを様々な視点から見付けることができるようにすることが大切である。

また、宝物になったきっかけや大切にしている理由は、家族との思い出や自分の体験と強く結び付いている場合がある。そのときの出来事の経過や気持ちを想起させて、自分が紹介したい内容を具体的にもつことができるようにすることも効果的である。

(2) 聞くことについての指導と評価

次に、聞くことの指導と評価の工夫を取り上げる。聞くことについての指導過程における評価規準は、次のように位置付けている。

[話エ] 宝物の特徴やその理由など友達が話したい大事なことと、自分が聞きたい友達の宝物についての大事なことを落とさないように聞き、もっと知りたいと思ったことなどについて質問したり、友達の宝物について感想を述べたりしている。 (第三次 第6～8教時)

① 話すことと同時的・一体的に行う聞くことの指導と評価

具体的な形として表れにくい、聞くことの指導においては、何らかの表現に結び付けることで見られた状況の評価し、その妥当性をより高いものにしていくことが求められる。そのため本事例においては、紹介を聞いて質問や感想を述べる言語活動を通して、話すことと聞くことを同時に指導し、そこで見られた状況の評価できるようにしている。

② 聞くことの学習の過程を明確にした指導と評価

本單元では、話し手にとっての大事なことのみならず、聞き手である自分にとっての大事なことを落とさないように聞き、質問したり感想を述べたりすることを指導し評価することとなる。そのためには、紹介を聞く第三次の学習に入るまでに、何について聞いてみたいかを考えることで聞くことの課題意識を高めたり、どんな言葉で質問し感想を述べるかを考えたりするなどの学習の過程を明確にした指導が求められる。

そこで、第二次において、

○宝物紹介の準備をしながら、友達のどんな紹介を聞いてみたいかにも意識を向けられるように声がけする。

○二人組でリハーサルを行い、宝物の素敵なところについて感想を述べたり、もっと聞きたいところについて、質問したりできるようにする。

などの、聞くことの学習の過程に応じた指導を位置付けた上で、第三次において聞く能力を評価することとしている。

③ 評価する機会や場面を繰り返し設定することによる確実な指導と評価

第三次では、話し手の宝物の紹介を聞いて質問や感想を述べる場を繰り返し設定している。児童から出てきた感想の述べ方や質問の仕方について、話し手と聞き手の双方とつ

て大事なことを落とさずに聞くようにする点から助言したり、各々の児童が質問や感想を述べる機会を確保できるよう意図的に指名したりするなどして、指導と評価を確実なものにしている。

(3) 「言語についての知識・理解・技能」の評価

「言語についての知識・理解・技能」では、観点の趣旨に示すように、小学校学習指導要領の〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕について指導したことを評価することとなる。

本事例では、「話すこと・聞くこと」の指導を通して指導するため、年間を見通した上で密接に関連する事項を取り上げ、指導過程における評価規準を例えば次のように設定している。

[言イ(ウ)] 気持ちを表す語句や色、大きさ、形を表す語句など、意味による語句のまとまりがあることに気付いて話す言葉を考えている。(第二次 第3～4教時)

「意味による語句のまとまり」には様々なものが挙げられるが、本事例においては「気持ちを表す語句や色、大きさ、形を表す語句など」と具体化して評価規準を設定している。

またこの評価規準を、第二次の話す事柄や順序を考える場面に位置付けて評価することで、音声言語の指導においても、カードの記述など評価の材料が集めやすくなるよう工夫している。

最終的には、このような表を作り、評価をまとめていくことになります。

5 観点別評価の総括

(1) 観点別評価の進め方

ここでは、児童の評価結果を記録する一覧表を用いて観点別評価を進める場合について取り上げる。

① 単元の観点別評価表の作成

本単元で取り上げる指導事項を基に本単元の評価の重点を明確にし、観点別評価表を作成して個々の児童の評価結果を記録する。

事例1「自分の宝物を紹介しよう」の観点別評価表は、表1のようになる。

横の行には児童名、縦の列には単元の評価規準を位置付ける。評価の観点の欄の下にはどの評価規準なのか一覧できるように以下のように表記しておく。

「国語への関心・意欲・態度」には、単元の領域(本事例では「話す・聞く」)を記入する。また、「話す・聞く能力」「言語についての知識・理解・技能」には、指導事項等の記号とともに該当する単元の評価規準を示す見出し(「話題設定」「必要な事柄」など)を記入する。

(表 1) 単元の観点別評価表 (重み付けをしない場合)

評価の観点		国語への 関心・意欲・態度		話す・聞く能力				言語についての 知識・理解・技能			特記事項
単元の評価規準		A 話す・ 聞く	総括	A 話題設 定	A 必要 な事柄	E 聞く	総括	ウ 語句の まとめ り	カ 主語と 述語の 照応	総括	
No.	児童名										
1	児童1	A	A	A	A	B	A	A	A	A	大切な訳を複数挙げている
2	児童2	A	A	A	B	B	B	B	B	B	宝物を実際に見せたいと意欲的
3	児童3	B	B	A	B	C	B	A	B	A	
4	児童4	B	B	B	C	C	C	B	C	B	どんな宝物か、個別に聞き出す

② 単元の観点別評価表の作成に当たっての留意点

「国語への関心・意欲・態度」を評価する際には、単元の冒頭における児童の姿だけでなく、学習を進める過程や終末時で見られる実現状況、次単元への期待や課題意識の高まりを重視する。

「話す・聞く能力」を評価する際は、実際に話したり聞いたりしている場面を評価するばかりではなく、狙いに応じて話題設定や取材等の学習過程についても評価する。

児童の「十分満足できる」状況（A）や、個人内評価において特に伸びが顕著であるものについては、随時特記事項若しくは別途、個票に記録・蓄積し、次単元以降の指導や保護者への説明資料、指導要録に記載する際の基礎的な資料などとして活用する。

(2) 単元における観点別評価の総括

① 観点別の評価の総括についての考え方

5 (1) で示した「単元の観点別評価表」(表 1) を基に、総括の方法について述べる。原則として、各観点においてAが半数以上であれば、観点の総括もAとする。また、各観点においてCが半数を超えていれば、観点の総括もCとする。また、AとCが同一観点内に混在する場合は、相殺して集約する。(例 AとCが各一つ→Bが二つ。)

② 総括の具体的な方法

観点別評価の総括に当たっては、同一観点内の複数の評価規準を、重み付けをせずに均等に扱う場合と、重み付けをして総括する場合とが考えられる。双方について、以下「個々の児童の評価例」を挙げる。

【個々の児童の評価例 (重み付けをしない場合)】(表 1 参照)

〈児童 1〉「話す・聞く能力」の観点の三つの評価規準に照らした評価は二つがA、一つがBである。Aが半数以上あるので、観点の総括もAとなる。

- 〈児童2〉同様に評価は一つがA、二つがBである。Aが半数以上ではないので、視点の総括はBとなる。
- 〈児童3〉同様に評価は一つがA、一つがB、もう一つがCである。AとCが相殺されるので、視点の総括はBとなる。
- 〈児童4〉同様に評価は一つがB、二つがCとなっている。Cが半数を超えているので、視点の総括もCとなる。

次に、単元で特に重点的に評価する評価規準を設け、総括に当たって重み付けをする場合について述べる。

当該単元の狙いを設定する際に、年間指導計画の見通しの下、特に重点的に取り上げて指導する指導事項を設定することが考えられる。そのような場合は、例えば次のように重み付けをして観点別評価の総括を進めることが考えられる。

表2は「単元の観点別評価表」に「本単元の重点」欄を設け、単元で評価する事項を○、そのうち特に重点的に評価する事項を◎で示したものである。ここでは、重み付けを行うために、総括に当たっては、「本単元の重点」が◎であるものは2倍にして集約することとしている。

(表2) 単元の観点別評価表 (重み付けをする場合)

評価の観点		国語への 関心・意欲・態度		話す・聞く能力				言語についての 知識・理解・技能			特記事項
本単元の重点		◎	総括	◎	○	○	総括	○	○	総括	
単元の評価規準		A		ア	ア	エ		ウ	カ		
No.	児童名	話す・聞く	話題設定	必要な事柄	聞く	語句のまとめ	主語と述語の照応				
1	児童1	A	A	A	A	B	A	A	A	A	大切なわけを複数挙げている
2	児童2	A	A	A	B	B	A	B	B	B	宝物を実際に見せたいと意欲的
3	児童3	B	B	A	B	C	B	A	B	A	
4	児童4	B	B	B	C	C	B	B	C	B	どんな宝物か、個別に聞き出す

【個々の児童の評価例 (重み付けをする場合)】 (表2参照)

- 〈児童2〉「話す・聞く能力」の観点の三つの評価規準に照らした評価は一つがA、二つがBである。このうち本単元の重点である「ア 話題設定」についてはAである。この評価を2倍にするので、評価の集約はA A B Bとなる。Aが半数以上になるので視点の総括もAとなる。
- 〈児童4〉「話す・聞く能力」の観点の三つの評価規準に照らした評価は一つがB、二つがCである。このうち本単元の重点である「ア 話題設定」については、Bである。この評価を2倍にするので、評価の集約はB B C Cとなる。Cが半数を超えてはいないので、視点の総括はBとなる。

第1 目標

言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

- (1) 日常生活に必要な国語について、その特質を理解し適切に使うことができるようにする。
- (2) 日常生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、思考力や想像力を養う。
- (3) 言葉がもつよさを認識するとともに、言語感覚を養い、国語の大切さを自覚し、国語を尊重してその能力の向上を図る態度を養う。

第2 各学年の目標及び内容

〔第1学年及び第2学年〕

1 目標

- (1) 日常生活に必要な国語の知識や技能を身に付けるとともに、我が国の言語文化に親しんだり理解したりすることができるようにする。
- (2) 順序立てて考える力や感じたり想像したりする力を養い、日常生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、自分の思いや考えをもつことができるようにする。
- (3) 言葉がもつよさを感じるとともに、楽しんで読書をし、国語を大切にしてい、思いや考えを伝え合おうとする態度を養う。

2 内容

〔知識及び技能〕

- (1) 言葉の特徴や使い方に関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。
 - ア 言葉には、事物の内容を表す働きや、経験したことを伝える働きがあることに気付くこと。
 - イ 音節と文字との関係、アクセントによる語の意味の違いなどに気付くとともに、姿勢や口形、発声や発音に注意して話すこと。
 - ウ 長音、拗音、促音、撥音などの表記、助詞の「は」、「へ」及び「を」の使い方、句読点の打ち方、かぎ（「」）の使い方を理解して文や文章

の中で使うこと。また、平仮名及び片仮名を読み、書くとともに、片仮名で書く語の種類を知り、文や文章の中で使うこと。

エ 第1学年においては、別表の学年別漢字配当表（以下「学年別漢字配当表」という。）の第1学年に配当されている漢字を読み、漸次書き、文や文章の中で使うこと。第2学年においては、学年別漢字配当表の第2学年までに配当されている漢字を読むこと。また、第1学年に配当されている漢字を書き、文や文章の中で使うとともに、第2学年に配当されている漢字を漸次書き、文や文章の中で使うこと。

オ 身近なことを表す語句の量を増し、話や文章の中で使うとともに、言葉には意味による語句のまとまりがあることに気付き、語彙を豊かにすること。

カ 文の中における主語と述語との関係に気付くこと。

キ 丁寧な言葉と普通の言葉との違いに気を付けて使うとともに、敬体で書かれた文章に慣れること。

ク 語のまとまりや言葉の響きなどに気を付けて音読すること。

(2) 話や文章に含まれている情報の扱い方に関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。

ア 共通、相違、事柄の順序など情報と情報との関係について理解すること。

(3) 我が国の言語文化に関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。

ア 昔話や神話・伝承などの読み聞かせを聞くなどして、我が国の伝統的な言語文化に親しむこと。

イ 長く親しまれている言葉遊びを通して、言葉の豊かさに気付くこと。

ウ 書写に関する次の事項を理解し使うこと。

(ア) 姿勢や筆記具の持ち方を正しくして書くこと。

(イ) 点画の書き方や文字の形に注意しながら、筆順に従って丁寧に書くこと。

(ウ) 点画相互の接し方や交わり方、長短や方向などに注意して、文字を正しく書くこと。

エ 読書に親しみ、いろいろな本があることを知ること。

[思考力、判断力、表現力等]

A 話すこと・聞くこと

(1) 話すこと・聞くことに関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。

- ア 身近なことや経験したことなどから話題を決め、伝え合うために必要な事柄を選ぶこと。
 - イ 相手に伝わるように、行動したことや経験したことに基づいて、話す事柄の順序を考えること。
 - ウ 伝えたい事柄や相手に応じて、声の大きさや速さなどを工夫すること。
 - エ 話し手が知らせたいことや自分が聞きたいことを落とさないように集中して聞き、話の内容を捉えて感想をもつこと。
 - オ 互いの話に関心をもち、相手の発言を受けて話をつなぐこと。
- (2) (1)に示す事項については、例えば、次のような言語活動を通して指導するものとする。
- ア 紹介や説明、報告など伝えたいことを話したり、それらを聞いて声に出して確かめたり感想を述べたりする活動。
 - イ 尋ねたり応答したりするなどして、少人数で話し合う活動。

B 書くこと

- (1) 書くことに関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。
- ア 経験したことや想像したことなどから書くことを見付け、必要な事柄を集めたり確かめたりして、伝えたいことを明確にすること。
 - イ 自分の思いや考えが明確になるように、事柄の順序に沿って簡単な構成を考えること。
 - ウ 語と語や文と文との続き方に注意しながら、内容のまとまりが分かるように書き表し方を工夫すること。
 - エ 文章を読み返す習慣を付けるとともに、間違いを正したり、語と語や文と文との続き方を確かめたりすること。
 - オ 文章に対する感想を伝え合い、自分の文章の内容や表現のよいところを見付けること。
- (2) (1)に示す事項については、例えば、次のような言語活動を通して指導するものとする。
- ア 身近なことや経験したことを報告したり、観察したことを記録したりするなど、見聞きしたことを書く活動。
 - イ 日記や手紙を書くなど、思ったことや伝えたいことを書く活動。
 - ウ 簡単な物語をつくるなど、感じたことや想像したことを書く活動。

C 読むこと

- (1) 読むことに関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。
- ア 時間的な順序や事柄の順序などを考えながら、内容の大体を捉えること。

- イ 場面の様子や登場人物の行動など、内容の大体を捉えること。
 - ウ 文章の中の重要な語や文を考えて選び出すこと。
 - エ 場面の様子に着目して、登場人物の行動を具体的に想像すること。
 - オ 文章の内容と自分の体験とを結び付けて、感想をもつこと。
 - カ 文章を読んで感じたことや分かったことを共有すること。
- (2) (1)に示す事項については、例えば、次のような言語活動を通して指導するものとする。
- ア 事物の仕組みを説明した文章などを読み、分かったことや考えたことを述べる活動。
 - イ 読み聞かせを聞いたり物語などを読んだりして、内容や感想などを伝え合ったり、演じたりする活動。
 - ウ 学校図書館などを利用し、図鑑や科学的なことについて書いた本などを読み、分かったことなどを説明する活動。

〔第3学年及び第4学年〕

1 目 標

- (1) 日常生活に必要な国語の知識や技能を身に付けるとともに、我が国の言語文化に親しんだり理解したりすることができるようにする。
- (2) 筋道立てて考える力や豊かに感じたり想像したりする力を養い、日常生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、自分の思いや考えをまとめることができるようにする。
- (3) 言葉がもつよさに気付くとともに、幅広く読書をし、国語を大切にして、思いや考えを伝え合おうとする態度を養う。

2 内 容

〔知識及び技能〕

- (1) 言葉の特徴や使い方に関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。
 - ア 言葉には、考えたことや思ったことを表す働きがあることに気付くこと。
 - イ 相手を見て話したり聞いたりするとともに、言葉の抑揚や強弱、間の取り方などに注意して話すこと。
 - ウ 漢字と仮名を用いた表記、送り仮名の付け方、改行の仕方を理解して文や文章の中で使うとともに、句読点を適切に打つこと。また、第3学年においては、日常使われている簡単な単語について、ローマ字で表記されたものを読み、ローマ字で書くこと。

- エ 第3学年及び第4学年の各学年においては、学年別漢字配当表の当該学年までに配当されている漢字を読むこと。また、当該学年の前の学年までに配当されている漢字を書き、文や文章の中で使うとともに、当該学年に配当されている漢字を漸次書き、文や文章の中で使うこと。
- オ 様子や行動、気持ちや性格を表す語句の量を増し、話や文章の中で使うとともに、言葉には性質や役割による語句のまとまりがあることを理解し、語彙を豊かにすること。
- カ 主語と述語との関係、修飾と被修飾との関係、指示する語句と接続する語句の役割、段落の役割について理解すること。
- キ 丁寧な言葉を使うとともに、敬体と常体との違いに注意しながら書くこと。
- ク 文章全体の構成や内容の大体を意識しながら音読すること。
- (2) 話や文章に含まれている情報の扱い方に関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。
 - ア 考えとそれを支える理由や事例、全体と中心など情報と情報との関係について理解すること。
 - イ 比較や分類の仕方、必要な語句などの書き留め方、引用の仕方や出典の示し方、辞書や事典の使い方を理解し使うこと。
- (3) 我が国の言語文化に関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。
 - ア 易しい文語調の短歌や俳句を音読したり暗唱したりするなどして、言葉の響きやリズムに親しむこと。
 - イ 長い間使われてきたことわざや慣用句、故事成語などの意味を知り、使うこと。
 - ウ 漢字が、へんやつくりなどから構成されていることについて理解すること。
- エ 書写に関する次の事項を理解し使うこと。
 - (ア) 文字の組立て方を理解し、形を整えて書くこと。
 - (イ) 漢字や仮名の大きさ、配列に注意して書くこと。
 - (ウ) 毛筆を使用して点画の書き方への理解を深め、筆圧などに注意して書くこと。
- オ 幅広く読書に親しみ、読書が、必要な知識や情報を得ることに役立つことに気付くこと。

[思考力、判断力、表現力等]

A 話すこと・聞くこと

(1) 話すこと・聞くことに関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。

ア 目的を意識して、日常生活の中から話題を決め、集めた材料を比較したり分類したりして、伝え合うために必要な事柄を選ぶこと。

イ 相手に伝わるように、理由や事例などを挙げながら、話の中心が明確になるよう話の構成を考えること。

ウ 話の中心や話す場面を意識して、言葉の抑揚や強弱、間の取り方などを工夫すること。

エ 必要なことを記録したり質問したりしながら聞き、話し手が伝えたいことや自分が聞きたいことの中心を捉え、自分の考えをもつこと。

オ 目的や進め方を確認し、司会などの役割を果たしながら話し合い、互いの意見の共通点や相違点に着目して、考えをまとめること。

(2) (1)に示す事項については、例えば、次のような言語活動を通して指導するものとする。

ア 説明や報告など調べたことを話したり、それらを聞いたりする活動。

イ 質問するなどして情報を集めたり、それらを発表したりする活動。

ウ 互いの考えを伝えるなどして、グループや学級全体で話し合う活動。

B 書くこと

(1) 書くことに関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。

ア 相手や目的を意識して、経験したことや想像したことなどから書くことを選び、集めた材料を比較したり分類したりして、伝えたいことを明確にすること。

イ 書く内容の中心を明確にし、内容のまとまりで段落をつくったり、段落相互の関係に注意したりして、文章の構成を考えること。

ウ 自分の考えとそれを支える理由や事例との関係を明確にして、書き表し方を工夫すること。

エ 間違いを正したり、相手や目的を意識した表現になっているかを確認したりして、文や文章を整えること。

オ 書こうとしたことが明確になっているかなど、文章に対する感想や意見を伝え合い、自分の文章のよいところを見付けること。

(2) (1)に示す事項については、例えば、次のような言語活動を通して指導するものとする。

ア 調べたことをまとめて報告するなど、事実やそれを基に考えたことを書く活動。

イ 行事の案内やお礼の文章を書くなど、伝えたいことを手紙に書く活動。

ウ 詩や物語をつくるなど、感じたことや想像したことを書く活動。

C 読むこと

(1) 読むことに関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。

ア 段落相互の関係に着目しながら、考えとそれを支える理由や事例との関係などについて、叙述を基に捉えること。

イ 登場人物の行動や気持ちなどについて、叙述を基に捉えること。

ウ 目的を意識して、中心となる語や文を見付けて要約すること。

エ 登場人物の気持ちの変化や性格、情景について、場面の移り変わりや結び付けて具体的に想像すること。

オ 文章を読んで理解したことに基づいて、感想や考えをもつこと。

カ 文章を読んで感じたことや考えたことを共有し、一人一人の感じ方などに違いがあることに気付くこと。

(2) (1)に示す事項については、例えば、次のような言語活動を通して指導するものとする。

ア 記録や報告などの文章を読み、文章の一部を引用して、分かったことや考えたことを説明したり、意見を述べたりする活動。

イ 詩や物語などを読み、内容を説明したり、考えたことなどを伝え合ったりする活動。

ウ 学校図書館などを利用し、事典や図鑑などから情報を得て、分かったことなどをまとめて説明する活動。

〔第5学年及び第6学年〕

1 目標

(1) 日常生活に必要な国語の知識や技能を身に付けるとともに、我が国の言語文化に親しんだり理解したりすることができるようにする。

(2) 筋道立てて考える力や豊かに感じたり想像したりする力を養い、日常生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、自分の思いや考えを広げることができるようにする。

(3) 言葉がもつよさを認識するとともに、進んで読書をし、国語の大切さを自覚して、思いや考えを伝え合おうとする態度を養う。

2 内容

〔知識及び技能〕

(1) 言葉の特徴や使い方に関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。

ア 言葉には、相手とのつながりをつくる働きがあることに気付くこと。

- イ 話し言葉と書き言葉との違いに気付くこと。
 - ウ 文や文章の中で漢字と仮名を適切に使い分けるとともに、送り仮名や仮名遣いに注意して正しく書くこと。
 - エ 第5学年及び第6学年の各学年においては、学年別漢字配当表の当該学年までに配当されている漢字を読むこと。また、当該学年の前の学年までに配当されている漢字を書き、文や文章の中で使うとともに、当該学年に配当されている漢字を漸次書き、文や文章の中で使うこと。
 - オ 思考に関わる語句の量を増し、話や文章の中で使うとともに、語句と語句との関係、語句の構成や変化について理解し、語彙を豊かにすること。また、語感や言葉の使い方に対する感覚を意識して、語や語句を使うこと。
 - カ 文の中での語句の係り方や語順、文と文との接続の関係、話や文章の構成や展開、話や文章の種類とその特徴について理解すること。
 - キ 日常よく使われる敬語を理解し使い慣れること。
 - ク 比喻や反復などの表現の工夫に気付くこと。
 - ケ 文章を音読したり朗読したりすること。
- (2) 話や文章に含まれている情報の扱い方に関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。
- ア 原因と結果など情報と情報との関係について理解すること。
 - イ 情報と情報との関係付けの仕方、図などによる語句と語句との関係の表し方を理解し使うこと。
- (3) 我が国の言語文化に関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。
- ア 親しみやすい古文や漢文、近代以降の文語調の文章を音読するなどして、言葉の響きやリズムに親しむこと。
 - イ 古典について解説した文章を読んだり作品の内容の大体を知ったりすることを通して、昔の人のものの見方や感じ方を知ること。
 - ウ 語句の由来などに関心をもつとともに、時間の経過による言葉の変化や世代による言葉の違いに気付く、共通語と方言との違いを理解すること。また、仮名及び漢字の由来、特質などについて理解すること。
 - エ 書写に関する次の事項を理解し使うこと。
 - (ア) 用紙全体との関係に注意して、文字の大きさや配列などを決めるとともに、書く速さを意識して書くこと。
 - (イ) 毛筆を使用して、穂先の動きと点画のつながりを意識して書くこと。
 - (ウ) 目的に応じて使用する筆記具を選び、その特徴を生かして書くこと。

オ 日常的に読書に親しみ、読書が、自分の考えを広げることに役立つことに気付くこと。

[思考力、判断力、表現力等]

A 話すこと・聞くこと

(1) 話すこと・聞くことに関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。

ア 目的や意図に応じて、日常生活の中から話題を決め、集めた材料を分類したり関係付けたりして、伝え合う内容を検討すること。

イ 話の内容が明確になるように、事実と感想、意見とを区別するなど、話の構成を考えること。

ウ 資料を活用するなどして、自分の考えが伝わるように表現を工夫すること。

エ 話し手の目的や自分が聞こうとする意図に応じて、話の内容を捉え、話し手の考えと比較しながら、自分の考えをまとめること。

オ 互いの立場や意図を明確にしながらか計画的に話し合い、考えを広げたりまとめたりすること。

(2) (1)に示す事項については、例えば、次のような言語活動を通して指導するものとする。

ア 意見や提案など自分の考えを話したり、それらを聞いたりする活動。

イ インタビューなどをして必要な情報を集めたり、それらを発表したりする活動。

ウ それぞれの立場から考えを伝えるなどして話し合う活動。

B 書くこと

(1) 書くことに関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。

ア 目的や意図に応じて、感じたことや考えたことなどから書くことを選び、集めた材料を分類したり関係付けたりして、伝えたいことを明確にすること。

イ 筋道の通った文章となるように、文章全体の構成や展開を考えること。

ウ 目的や意図に応じて簡単に書いたり詳しく書いたりするとともに、事実と感想、意見とを区別して書いたりするなど、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫すること。

エ 引用したり、図表やグラフなどを用いたりして、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫すること。

オ 文章全体の構成や書き表し方などに着目して、文や文章を整えること。

カ 文章全体の構成や展開が明確になっているかなど、文章に対する感想

や意見を伝え合い、自分の文章のよいところを見付けること。

(2) (1)に示す事項については、例えば、次のような言語活動を通して指導するものとする。

ア 事象を説明したり意見を述べたりするなど、考えたことや伝えたいことを書く活動。

イ 短歌や俳句をつくるなど、感じたことや想像したことを書く活動。

ウ 事実や経験を基に、感じたり考えたりしたことや自分にとっての意味について文章に書く活動。

C 読むこと

(1) 読むことに関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。

ア 事実と感想、意見などとの関係を叙述を基に押さえ、文章全体の構成を捉えて要旨を把握すること。

イ 登場人物の相互関係や心情などについて、描写を基に捉えること。

ウ 目的に応じて、文章と図表などを結び付けるなどして必要な情報を見付けたり、論の進め方について考えたりすること。

エ 人物像や物語などの全体像を具体的に想像したり、表現の効果を考えたりすること。

オ 文章を読んで理解したことに基づいて、自分の考えをまとめること。

カ 文章を読んでまとめた意見や感想を共有し、自分の考えを広げること。

(2) (1)に示す事項については、例えば、次のような言語活動を通して指導するものとする。

ア 説明や解説などの文章を比較するなどして読み、分かったことや考えたことを、話し合ったり文章にまとめたりする活動。

イ 詩や物語、伝記などを読み、内容を説明したり、自分の生き方などについて考えたことを伝え合ったりする活動。

ウ 学校図書館などを利用し、複数の本や新聞などを活用して、調べたり考えたりしたことを報告する活動。

第3 指導計画の作成と内容の取扱い

1 指導計画の作成に当たっては、次の事項に配慮するものとする。

(1) 単元など内容や時間のまとまりを見通して、その中で育む資質・能力の育成に向けて、児童の主体的・対話的で深い学びの実現を図るようにすること。その際、言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、言葉の特徴や使い方などを理解し自分の思いや考えを深める学習の充実を図ること。

- (2) 第2の各学年の内容の指導については、必要に応じて当該学年より前の学年において初歩的な形で取り上げたり、その後の学年で程度を高めて取り上げたりするなどして、弾力的に指導すること。
- (3) 第2の各学年の内容の〔知識及び技能〕に示す事項については、〔思考力、判断力、表現力等〕に示す事項の指導を通して指導することを基本とし、必要に応じて、特定の事項だけを取り上げて指導したり、それらをまとめて指導したりするなど、指導の効果を高めるよう工夫すること。なお、その際、第1章総則の第2の3の(2)のウの(イ)に掲げる指導を行う場合には、当該指導のねらいを明確にするとともに、単元など内容や時間のまとまりを見通して資質・能力が偏りなく育成されるよう計画的に指導すること。
- (4) 第2の各学年の内容の〔思考力、判断力、表現力等〕の「A話すこと・聞くこと」に関する指導については、意図的、計画的に指導する機会が得られるように、第1学年及び第2学年では年間35単位時間程度、第3学年及び第4学年では年間30単位時間程度、第5学年及び第6学年では年間25単位時間程度を配当すること。その際、音声言語のための教材を活用するなどして指導の効果を高めるよう工夫すること。
- (5) 第2の各学年の内容の〔思考力、判断力、表現力等〕の「B書くこと」に関する指導については、第1学年及び第2学年では年間100単位時間程度、第3学年及び第4学年では年間85単位時間程度、第5学年及び第6学年では年間55単位時間程度を配当すること。その際、実際に文章を書く活動をなるべく多くすること。
- (6) 第2の第1学年及び第2学年の内容の〔知識及び技能〕の(3)のエ、第3学年及び第4学年、第5学年及び第6学年の内容の〔知識及び技能〕の(3)のオ及び各学年の内容の〔思考力、判断力、表現力等〕の「C読むこと」に関する指導については、読書意欲を高め、日常生活において読書活動を活発に行うようにするとともに、他教科等の学習における読書の指導や学校図書館における指導との関連を考えて行うこと。
- (7) 低学年においては、第1章総則の第2の4の(1)を踏まえ、他教科等との関連を積極的に図り、指導の効果を高めるようにするとともに、幼稚園教育要領等に示す幼児期の終わりまでに育ってほしい姿との関連を考慮すること。特に、小学校入学当初においては、生活科を中心とした合科的・関連的な指導や、弾力的な時間割の設定を行うなどの工夫をすること。
- (8) 言語能力の向上を図る観点から、外国語活動及び外国語科など他教科等との関連を積極的に図り、指導の効果を高めるようにすること。

- (9) 障害のある児童などについては、学習活動を行う場合に生じる困難さに応じた指導内容や指導方法の工夫を計画的、組織的に行うこと。
- (10) 第1章総則の第1の2の(2)に示す道德教育の目標に基づき、道德科などとの関連を考慮しながら、第3章特別の教科道德の第2に示す内容について、国語科の特質に応じて適切な指導をすること。
- 2 第2の内容の取扱いについては、次の事項に配慮するものとする。
- (1) 〔知識及び技能〕に示す事項については、次のとおり取り扱うこと。
- ア 日常の言語活動を振り返ることなどを通して、児童が、実際に話したり聞いたり書いたり読んだりする場面を意識できるよう指導を工夫すること。
- イ 表現したり理解したりするために必要な文字や語句については、辞書や事典を利用して調べる活動を取り入れるなど、調べる習慣が身に付くようにすること。
- ウ 第3学年におけるローマ字の指導に当たっては、第5章総合的な学習の時間の第3の2の(3)に示す、コンピュータで文字を入力するなどの学習の基盤として必要となる情報手段の基本的な操作を習得し、児童が情報や情報手段を主体的に選択し活用できるよう配慮することとの関連が図られるようにすること。
- エ 漢字の指導については、第2の内容に定めるほか、次のとおり取り扱うこと。
- (ア) 学年ごとに配当されている漢字は、児童の学習負担に配慮しつつ、必要に応じて、当該学年以前の学年又は当該学年以降の学年において指導することもできること。
- (イ) 当該学年より後の学年に配当されている漢字及びそれ以外の漢字については、振り仮名を付けるなど、児童の学習負担に配慮しつつ提示することができること。
- (ウ) 他教科等の学習において必要となる漢字については、当該教科等と関連付けて指導するなど、その確実な定着が図られるよう指導を工夫すること。
- (エ) 漢字の指導においては、学年別漢字配当表に示す漢字の字体を標準とすること。
- オ 各学年の(3)のア及びイに関する指導については、各学年で行い、古典に親しめるよう配慮すること。
- カ 書写の指導については、第2の内容に定めるほか、次のとおり取り扱うこと。

- (7) 文字を正しく整えて書くことができるようにするとともに、書写の能力を学習や生活に役立てる態度を育てるよう配慮すること。
- (イ) 硬筆を使用する書写の指導は各学年で行うこと。
- (ロ) 毛筆を使用する書写の指導は第3学年以上の各学年で行い、各学年年間30単位時間程度を配当するとともに、毛筆を使用する書写の指導は硬筆による書写の能力の基礎を養うよう指導すること。
- (エ) 第1学年及び第2学年の(3)のウの(イ)の指導については、適切に運筆する能力の向上につながるよう、指導を工夫すること。
- (2) 第2の内容の指導に当たっては、児童がコンピュータや情報通信ネットワークを積極的に活用する機会を設けるなどして、指導の効果を高めるよう工夫すること。
- (3) 第2の内容の指導に当たっては、学校図書館などを目的をもって計画的に利用しその機能の活用を図るようすること。その際、本などの種類や配置、探し方について指導するなど、児童が必要な本などを選ぶことができるよう配慮すること。なお、児童が読む図書については、人間形成のため偏りが無いよう配慮して選定すること。
- 3 教材については、次の事項に留意するものとする。
- (1) 教材は、第2の各学年の目標及び内容に示す資質・能力を偏りなく養うことや読書に親しむ態度の育成を通して読書習慣を形成することをねらいとし、児童の発達の段階に即して適切な話題や題材を精選して調和的に取り上げること。また、第2の各学年の内容の〔思考力、判断力、表現力等〕の「A話すこと・聞くこと」、「B書くこと」及び「C読むこと」のそれぞれの(2)に掲げる言語活動が十分行われるよう教材を選定すること。
- (2) 教材は、次のような観点に配慮して取り上げること。
- ア 国語に対する関心を高め、国語を尊重する態度を育てるのに役立つこと。
- イ 伝え合う力、思考力や想像力及び言語感覚を養うのに役立つこと。
- ウ 公正かつ適切に判断する能力や態度を育てるのに役立つこと。
- エ 科学的、論理的に物事を捉え考察し、視野を広げるのに役立つこと。
- オ 生活を明るくし、強く正しく生きる意志を育てるのに役立つこと。
- カ 生命を尊重し、他人を思いやる心を育てるのに役立つこと。
- キ 自然を愛し、美しいものに感動する心を育てるのに役立つこと。
- ク 我が国の伝統と文化に対する理解と愛情を育てるのに役立つこと。
- ケ 日本人としての自覚をもって国を愛し、国家、社会の発展を願う態度を育てるのに役立つこと。

コ 世界の風土や文化などを理解し，国際協調の精神を養うのに役立つこと。

- (3) 第2の各学年の内容の〔思考力，判断力，表現力等〕の「C読むこと」の教材については，各学年で説明的な文章や文学的な文章などの文章形態を調和的に取り扱うこと。また，説明的な文章については，適宜，図表や写真などを含むものを取り上げること。

別 表

学年別漢字配当表

第一学年	一右兩円王音下火花貝学気九休玉金空月犬見五口校左三山子四糸字 耳七車手十出女小上森人水正生青夕石赤千川先早草足村大男竹中虫 町天田土二日入年白八百文木本名目立力林六 (80字)
第二学年	引羽雲園遠何科夏家歌画回会海絵外角楽活間丸岩顔汽記帰弓牛魚京 強教近兄形計元言原戸古午後語工公広交光考行高黄合谷国黒今才細 作算止市矢姉思紙寺自時室社弱首秋週春書少場色食心新親図数西声 星晴切雪船線前組走多太体台地池知茶昼長鳥朝直通弟店点電刀冬当 東答頭同道読内南肉馬売買麦半番父風分聞米歩母方北毎妹万明鳴毛 門夜野友用曜来里理話 (160字)
第三学年	悪安暗医委意育員院飲運泳駅央横屋温化荷界開階寒感漢館岸起期客 究急級宮球去橋業曲局銀区苦具君係軽血決研県庫湖向幸港号根祭皿 仕死使始指齒詩次事持式実写者主守取酒受州拾終習集住重宿所暑助 昭消商章勝乘植申身神真深進世整昔全相送想息速族他打对待代第題 炭短談着注柱丁帳調追定庭笛鉄転都度投豆島湯登等動童農波配倍箱 畑発反坂板皮悲美鼻筆氷表秒病品負部服福物平返勉放味命面問役薬 由油有遊予羊洋葉陽様落流旅両緑礼列練路和 (200字)
第四学年	愛案以衣位茨印英栄媛塩岡億加果貨課芽賀改械害街各覚渴完官管関 観願岐希季旗器機議求泣給拳漁共協鏡競極熊訓軍郡群径景芸欠結建 健験固功好香候康佐差菜最崎材崎昨札刷察参産散残氏司試児治滋辞 鹿失借種周祝順初松笑唱焼照城繩臣信井成省清静席積折節説浅戦選 然争倉巢束側続卒孫帶隊達単置仲沖兆低底的典伝徒努灯働特徳栃奈 梨熱念敗梅博阪飯飛必票標不夫付府阜富副兵別辺変便包法望牧末満 未民無約勇要養浴利陸良料量輪類令冷例連老勞録 (202字)
第五学年	庄囿移因永堂衛易益液演応往桜可仮価河過快解格確額刊幹慣眼紀基 寄規喜技義逆久旧救居許境均禁句型経潔件険檢限現減故個護効厚耕 航鉦構興講告混查再災妻採際在財罪殺雜酸賛士支史志枝師資飼示似 識質舎謝授修述術準序招証象賞条状常情織職制性政勢精製税責績接 設絶祖素総造像増則測属率損貸態団断築貯張停提程適統堂銅導得毒 独任燃能破犯判版比肥非費備評貧布婦武復複仏粉編弁保墓報豊防貿 暴脈務夢迷綿輸余容略留領歴 (193字)
第六学年	胃異遺域宇映延沿恩我灰拡革閣割株干卷看簡危机揮貴疑吸供胸郷勤 筋系敬警劇激穴券絹権憲源厳己呼誤后孝皇紅降鋼刻穀骨困砂座濟裁

六 学 年	策冊蚕至私姿視詞誌磁射捨尺若樹收宗就衆從縱縮熟純処署諸除承将 傷障蒸針仁垂推寸盛聖誠舌宣專泉洗染錢善奏窓創裝層操蔵臍存尊退 宅担探誕段暖值宙忠著斤頂腸潮賃痛敵展討党糖届難乳認納腦派拜背 肺俳班晚否批秘俵腹奮並陞閉片補暮宝訪亡忘棒枚幕密盟模訊郵優預 幼欲翌乱卵覽裏律臨朗論
-------------	---

(191字)

このテキストの使い方

▼筆者が今、初等国語科教育分野の入門書として最も信頼をおいているものが、次の著作である。

牛頭哲宏・森篤嗣 著

『現場で役立つ小学校国語科教育法』

2012年 ココ出版

この著作があつて、本書があると言つても過言ではない。私のこれまでの国語科教育法の講義で、数年にわたりテキストとさせていただいた。今後も変わらないだろう。よつて、本書でも、牛頭先生・森先生の主張されたことの数々の要点部分を取り入れさせて戴き、私なりの見解や教材類も加えさせていただいた。受講生の皆さんには、本書の内容を理解した上で、さらに『現場で役立つ小学校国語科教育法』を紐解き、該当部分を熟読し、見識を深めていただきたいと思う。

▼次に、同様に重視する引用・参考資料が、光村図書出版社の教科書教材文・教師用指導書・PR誌である。書中において図版等で使わせていただいた。その全ての資料を、前書とともに本学教職資料室の所定の書架においてある。詳しくはそちらを参照し、より多くを学んでほしい。

▼また、教育出版の教科書教材文、明治図書出版の「教育学国語教育」誌の一部も図版として使わせていただいた。これらの資料についても上記と同様、教職資料室に実物を置いているので、是非とも参照願いたい。

▼最後になつたが、文部科学省による「小学校学習指導要領(国語)」(H30・3告示)、同国立教育政策研究所による「評価規準の作成のための参考資料・小学校国語」(H2

3・11刊)もそれぞれ資料編に使わせていただいた。記して厚く御礼申し上げます。

筆者

国語科教育の理論と実践

発行 平成二九年一月一日

発行者 広島文教女子大学

著者 初等教育学科教授 岡 利道